
封殺者-To prove this existence-

織宮征

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封殺者 - To prove this existence -

【Nコード】

N1512S

【作者名】

織宮征

【あらすじ】

鬼人を殺す為だけに生涯を生きる存在——封殺者。その類に属する千堂鏡夜は、自身の虚無的な在り方に苦悩し、教室で涙を流していた。

そこに現れたのは、小柄な一人の少女——遠近湊だった。鏡夜を「自分と似ている」と言う湊は、翌日から鏡夜に接していく。しかし、鏡夜の「存在理由」は彼女と出会った直後から崩壊を始めていた——。基本シリアス路線です。この物語を読んで、少しでもあなたの心が揺れ動くことを願って…… 第三章 - c a i n e l a e i

S - を開始しました。

設定用語集（前書き）

これは封殺者という物語におけるネタバレを多分に含んでいます。
ですので、本編を未読の方にはオススメできません。

設定用語集

『封殺者 - To prove this existence -』
設定用語集（物語が進む毎に更新していく予定です）

『封殺者』 ふうたつしや

鬼人を殺すためだけに生まれてきた存在。生を授かった頃に魔術儀式によって体内魔力粒子を認識させられ、後に施設と呼ばれる封殺者の育成機関に監禁され、物心がつき始めた頃から殺人訓練を積む。

幼少期からそのような生き方をしてきたが故、封殺者となった者は日常に生きる人間とは異なる思考、価値観、倫理観を用いている。『「日常」に生まれた人間と「非日常」に生まれた人間では、考える事も、想っている事も、在り方さえも異なっている』というのは千堂鏡夜の言葉。

幼少期に施設で開発された身体能力向上の薬剤を摂取していた為、身体能力は常人から逸脱している。さらには、身体能力だけならば魔術師をも凌駕している。

基本的に、封殺者が扱える魔力は体内魔力粒子のみとされている。さらには、星礼会において魔術師＞封殺者という不等式が成り立っており、封殺者が魔術師に勝つことは不可能とされている（しかし例外として、魔術家系の人間が封殺者となった場合や、心界を認識した封殺者が魔術師に勝利することもある）。

『鬼人』 きじん

人間の負の感情が一点に収束し、現実世界に顕現する存在。体格は成人男性とほぼ同じ。全身を覆うその色は漆黒。唯一、眼球は人間の体液を連想させる赤色となっている。

人間の負の感情には大きく分類して四種類在る。

『疑心』、『不義』、『後悔』、『絶望』。この四種類は全て人間を心を苛むモノである。そして、『自身の邪な感情に負けた』という語源から、星礼会せいらいかいにおいて負邪ふじゃと呼称されている。

この負の感情が、人間が必然的に用いている生命魔力粒子オトに支障をきたし、人間が行う『呼吸』という二酸化炭素の排出と共に外界に漏れる。そして、外界に漏れた負邪が鬼人を形成する質と量にまで発展した瞬間、彼らは顕現を果たす。

鬼人は負の感情の思念体であり、思念のみで身体部位の形状変態が可能となる。それは、負邪という物質概念が、人間世界で定められた法則から逸脱しているからである。

『せいしつろんり 精質論理』

人間の負の感情が収束した物質である負邪は、魔力とは『対極』の関係性にある。陰陽で例えるならば、負邪は『陰』、魔力は『陽』に値する。

互いに相反する物質ではあるが、一方の負邪には致命的な弱点があり、それが精質論理とされている。

負邪は、『不義』、『絶望』、『後悔』、『疑心』の四大概念から成り立っている。

これは、負邪との語源である『自身の感情に敗北した弱体精神の思念』であることから、『精神的弱質の無意識体』と星礼会において定義されている。

対して、魔力という物質は己の欲望、意志力である。自身の望む力で敵を討つ為だけに封殺者、魔術師が体内、体外において練成する破邪の物質である。

そして魔力を体外、体内で使役させる際に扱う陽性的な意志力を『ハードメンタル
精神硬質』と呼ぶ。

魔力は陽性意志力であり、負邪は陰性弱質体である。

弱質体が意志力に勝つことは決してありえないとされ、負邪を消滅させる役目は魔力にある。

それは星礼会、施設でも絶対法則として成立している。

『せいいいかい
星礼会』

端的に言えば『世界管理者』。

思想、存在概念、最終目的の全ては『世界安定』の為にある。本拠地はイギリスのロンドンにあり、半径一キロ四方に渡って半円球型の人払いの結界も張り巡らせてある。

最終目的は、全世界に顕現する鬼人の排除である。鬼人は世界安定を維持する為の不要な要素、有り体にいえば邪魔な存在だと定義している。

鬼人を殺す事が星礼会の下部要員である封殺者の役目であり、安定を保つ為の手駒とされている。

世界管理者と名乗るだけあり、世界各国の政府とも交流が深い。政府の上層部に位置する人間は、星礼会は勿論のこと、封殺者の存在も認知している。

そして、封殺者を育成する機関である施設への資金援助も世界政府が担っている。星礼会という一組織だけでは、世界中に在る研究設備を整えるのは不可能だからである。

『フォースリフト
四殺解』という最高幹部四人で構成された精鋭部隊が存在する。彼ら四人は、他者から『殺人狂』と揶揄されることが多い。

本部の地下には様々な闘技場が設けられており、実質的に、封殺者や魔術師の鍛錬場とも言える。

『かんさつしゃ
観察者』

観察者とは下者ロウアー——つまり直属の部下である封殺者の行動、鬼人の抹殺数を記録し、星礼会の上層部に報告書を提出する義務を担っている者。

観察者の仕事は、文字通り下者ロウアーを『観察』するだけである。封殺者を観察する観察者の大半は魔術師であるが、観察者は星礼会からの任務は授かることはなく、それは彼らの行動に入らない。それが

星礼会の定めたルールである。その掟を破った観察者は星礼会によって罰せられる。

『コードナンバー』

『コードナンバー』とは、有り体にいえば封殺者の戦闘力を示す。封殺者と成った時、最初に該当する階級^{クラス}は50である。その段階から、鬼人の抹殺数、戦闘能力を『上者^{エルダー}』——つまり観察者がデータとして記録し、星礼会に報告書を提出する。その報告書によって、星礼会上層部がその封殺者の実力を吟味し、戦闘レベルを割り出す。50から始まって、鬼人の抹殺や任務を果たすことによって40、30と実力が上がっていく。

封殺者の最終到達地点は『零階級^{ゼロクラス}』とされている。そして、零階級の領域に踏み込んだ封殺者は、その戦闘理論に似合った称号が授与される。

『三種の魔力』

魔力というのは、生命を持っている存在ならば必然的に体内に内包^{げんじょ}している『原初の源^{みなもと}』である。精神、肉体、脳を働かせる為に有る、『人間としての機能を動かす装置』とも言う。

生命が機能する。それは即ち、機能する為の装置が備わっているからこそ可能な事象であり、その実、生物は三種の魔力の一つである生命魔力^{オド}粒子を用いていて、初めて生命が機能する。

封殺者が用いている体内魔力^{イナ}粒子は、魔術儀式によって生命魔力^{オド}粒子が戦闘用の魔力に変質された魔力とも言える。

そして、魔術師のみが扱える、魔力の根源とされている大気魔力^マ粒子は、万物を創造した力と称えられ、ひいては、万物に支障を生じさせないために存在するモノとして世界的に認知されている。

生命魔力^{オド}粒子、そして体内魔力^{イナ}粒子は体内で使役するものであるが故、精神硬質^{ハードメンタル}を扱うことに消費していく。しかし、大気魔力^マ粒子は世界に満ちている外界的な魔力を扱うので、生命魔力^{オド}粒子を消費

することはない。

『きんきまじゅつ禁忌魔術』

禁忌魔術は『存在の破壊』を示す行為である。人間の道徳から大幅に逸脱した術であるがゆえ、その危険性を序列で定めている。禁忌魔術をその身に宿し、それを解除——つまり、外的要因の規制を取り除くには、さらなる上位の禁忌魔術を実行して、植え付けられた概念をさらに上位の概念で抑圧し、消滅させるしか手段はない。

第三章までの序列

第一位『想像心界』

第二位『言語抑制術』

第三位『？』

第四位『記憶操作術』

『しんかい心界』

心界というのは、人間の思考原理、行動原理、言動原理の三つの概念の大元を司る、人間の心に『在って無いもの』。ここで述べる『在って無い』というのは、認識している人間にはその概念を理解できて、認識していない人間にはその概念を理解することが不可能という正逆論理として成り立っている。現代においては『存在理由』で流通している。

思考原理、行動原理、言動原理。これら全ては、その人間の『在り方』に深く関わっている。例として、何かしら思考を巡らせるにしても、言葉を放つにしても、行動を行うにしても、それはその人間が培ってきた人生経験の知識を生かして行うものである。故に、その人生経験の内容が、その人間の在り方に直結するという論理となる。

心界の認識後は自身の一人称、及び口調が変化する。『あたし』が『私』になったり、『僕』から『俺』となる。それは、人間の成

長における思考原理が完全に正しい方向へと決定されるが故。

認識後のメリットとして、『「精神」、「肉体」、「脳」』に異常なまでの活性化が見られる。封殺者に例えるならば魔術師の領域に踏み込む事も可能である。

そして、心界を認識した人間は、心界に従って生きることしかできなくなるというデメリットも背負うことになる。心界を認識した人間が心界を否定すると、自身の存在理由に支障がきたして、在り方が曖昧になってしまうからである。

人間というのは、誰しもが自分自身の在り方を用いている生き物である。認識してしまった人間がそれを否定してしまうと、自分は何の為に生きているのか判らなくなったり、自分が自分でないような錯覚に陥ってしまう。故に、認識した人間はそれを許容するしかない。

『想像心界』 そうぞしんかい

想像心界というのは、心界を認識した人間のみが扱える術である。禁忌魔術での総順位では、第一位に位置している。

心界が『存在理由』ならば、想像心界は『存在の証明行為』に部類される。

自身の存在理由を完全に認めたときのみこれを起動することが可能になり、発動後の一分間、己の内界に宿る存在理由——心界が、存在を証明させる為だけに身体を無意識的に活動させてくれる。

しかし、この術を起動できるのは一度きりであり、心界の証明行為は一分間が上限とされている。そして、その時間の上限を超えると心界が消滅してしまう。

『魔力の反発機能』 オド

生命魔力粒子オドを持っている魔術師はその能力を極め、自身に生命魔力粒子が宿っていると完全に自覚する。そして、他者の生命魔力オド粒子の質も見極めることができ、他者の生命魔力粒子オドがどんな質で

あるか理解することができる。生命魔力粒子^{オド}同士の反発機能というのは、一方の存在が生命魔力粒子^{オド}を自覚していて、かつ一方の生命魔力粒子^{オド}の質を自分の脳に記録^{データ}として記録した時初めて事象とし成り立つ。第二章にて、千堂裏魅はこのように解釈している。

「インターホンを想像してみろ。自分が自宅にいて、家の前に来訪者が来た。それだけで、お前は『来訪者という存在に気づく』事ができるか？ かなりの聴覚を持っていて、足音のみで家の前まで誰かが来たということを認識しない限り、それは不可能だ。つまりだ。来訪者がインターホンを押すからこそ、自分は来訪者に気づくことができる。生命魔力粒子^{オド}の反発機能^{オド}というのは、それを応用化させた技巧みたいなものだ。自己の脳内で知っている生命魔力粒子^{オド}の保持者のデータを記録し、反発機能をセッティングしておく。あとは、その者が接近した際に自動的に反発機能が働いて、データとして記録した存在を察知できる」

そして、この技巧は封殺者の用いている体内魔力粒子^{イナ}においても可能である。それ以前に、封殺者は負邪を察知する技を施設にて習得しているので、魔力同士の反発機能の修得は二の次とされている。

始まりの夜

——夜空を見上げていた。

灰色の満月は光り輝いている。立ち込める黒雲の隙間から覗かせるその月を見た千堂鏡夜は、率直に幻想的だという感想を胸に抱いた。

しかし、地上はそれ以上の眩しい光で溢れ返っていて、無心の内に抱いた感想はガラガラと音を立てて崩壊していった。人工的に設置された様々な光。忙しなく点滅するそれらを鏡夜は観察する。…やはり、天然モノと人工モノでは抱く幻想も異なるんだなと、実感と痛感が入り混じった感情を覚えた。

鏡夜は、町の繁華街を独りで歩いていた。視線はどこへ巡らせても、人、人、人。幾多の人々で繁盛している。午後九時を回った現在、繁華街は様々な人間が集う場所として機能していた。

たとえば、風俗店の客引きをしている若い男性。

たとえば、屋台で酒に溺れている中年のサラリーマン。

たとえば、街灯の前で嘔吐している見知らぬ誰か。

それらをただの傍観者として観察していた鏡夜は、脳裏である連想をした。

この人間達は、自分とは隔絶された世界に存在する者達だと。

思考も、行動原理も、その在り方さえも。この繁華街に入り浸っている人々の中で、鏡夜と一致する者は誰一人として存在しないだろう。

単調な足取りで歩いている鏡夜は、自分がこの繁華街から不在しているように思えてならなかった。まるで幽霊にでもなってしまうたかのような、そんな疑念が彼の心を侵害していく。

しかし鏡夜は、侵害してくるその不快感を理性で抑制させた。…

…精神的疲労は免れないが、自分が自分である為には、こうして、理性を正常に保たせるしか手段は無かった。

言ってしまうえば、それが千堂鏡夜という人間であつた。

生きている実感を持ち得ない人間。正常な人間とは異なる在り方を用いている人種だつた。

（——だけど、それは事実だ）

自身に言い聞かせるように心中で呟く。その、ある意味最上級に値する自虐的思考を巡らせているにも拘らず、彼の表情に変化は生じなかつた。

無関心、無愛想、無感情の三拍子が揃つた『無人間』。彼が通つている学園では、そのようなあだ名が密かにつけられていた。

そして、生きている実感を持ち得ない彼に在るのは、ただ現在^{いま}を生きるという使命だけだつた。

逆に言うならば、今を生きなれば鏡夜は生きていない——生きるべきではないのだ。

幼少期に告げられた言葉は、今も記憶の断片として心に残っている。

不意に、その言葉を思い出してしまった鏡夜は、微かに口を歪ませた。……このような自虐的思考を走らせている時点で、彼は『負けている』という事も理解しているというのに。

——と。不意にどこからか視線を感じた鏡夜は周囲を見やった。

左右に首を回した結果、一人の小さな少女が驚いたように目を見開いて自分を見据えていた。

（……誰だ？）

見たこともない少女にじつと見据えられ、さすがの鏡夜も多少の不快を覚える。彼は交錯する視線を自分から外し、その少女の存在を忘却することに努めながら、その場を後にした。

堂崎^{なり}市の東区には、広大な敷地を誇る河川敷公園が存在する。この町と隣町を繋ぐ鉄橋も架けられており、河川の向こう側に行くに

は、この鉄橋を渡るしか手段はなかった。

しかし今、用があるのはこの河川敷公園だけだった。芝生の傾斜を緩慢な足取りで下りながら、鏡夜は無意識にため息を漏らした。

というのも、彼がこの河川敷公園に訪れるのは今日が初めてだからだった。何年間もこの町に住んでいるというのに、自分の無関心さに呆れてしまったが故のため息だった。

鏡夜は周辺を見回す。夜中である事が幸いしたのか、辺りには誰もいなかった。

ゲートボール場やテニスコート、児童が遊ぶ為に設けられた遊具を見る限り、休日には多くの人々で賑わうと容易に想像できた。

（――だが）

そう。それは日が昇っている時だけの喩えだ。

闇夜の最中。風景面を見ると、そこには何の違和感も存在しない。ただ黒という色彩が周囲を覆い、典型的な『不気味』という言葉が表現されているだけだった。

（反応は……確か、この辺りだったか）

――しかし、そんな時。違和感が皆無だった風景面に、物質的な違和感が収束を初め、非日常への扉が開かれた。

「きたか――」

呟いた言葉は、ただ確信だった。

――それは、突然だった。

鏡夜の背後、十メートルほど離れた場所で、その気配が感じられた。

この河川敷公園の周辺に漂っていた魔気。一般人には視認できない黒色の粒子が収束を始める。その粒子は、螺旋を描きながら存在感を増幅していくことが判る。

最初に現れたのは脚だ。さらに両腕、胴体、頭部と――次々に体の箇所を顕わにしていく。それは、まるで異界からの『門』を通り現実世界に現れるかのような光景だった。

——リアル過ぎる。故に、比喻ではなかった。
体は黒く、存在は影のように昏い。

闇の根源である彼らはそれに相当する像でなければならない。
故に、現れた存在はただ妖的だった。

体格は成人男性と例えれば良いだろうか。しかし、体を覆うその色だけは、決して人間の持つものとはいえなかった。

その存在は、脳天から足の先まで黒色で彩られていた。この夜空などとは比較すべきではない、闇を体現化させた存在。

唯一異なっている部分は、両目の色だけだ。

連想させるのは人間の体液。禍々しく、歪な色彩で構成させられている眼球。

黒と赤。その、統一性がゼロな色彩で構成された存在は、鏡夜を視界に捉えた。

『鬼人』と呼ばれる者だった。闇の密度が上昇し、人間の負の感情が一点に収束した時、現実世界に姿を現す存在。

負の感情には、大きく類別して四種類ある。

——『疑心』、『不義』、『後悔』、『絶望』。

このような、人間を苦悩させようと苛む感情が一固体の生命体となり、彼らは顕現するのだ。

鬼人は、負の感情の集合無意識体である。故に、創り出した者達を襲うという法則が鬼人の排除を目的とした組織——『星礼会』において成立していた。

星礼会は、鬼人の体を構成している物質を、『自身の邪悪な感情に敗北した』と言葉で表し、『負邪』と名づけた。

——創り出したのは人間であり、創られたが故に襲う存在。
この相対関係は、決して変わることは無いだろう。

しかし、鬼人が一般世界に顕現した時。その行動を阻害し、抹殺する者がいるのもまた事実。

鏡夜は振り向いて、鬼人と対峙する。

それが、星礼会に所属する『魔術師』の手によって人工的に作ら

れた、人間を超越した存在——『封殺者^{ふうさつしや}』である。

彼らはこの世に生を授かった時、魔術儀式によって、その内界に在る魔力を強制的に認識させられる。

そして、儀式に成功した乳児は『施設』という封殺者の育成を目的とする機関に監禁され、物心が付き始めた頃より様々な殺人技術を身体に叩き込まれる。

そして、気づいた頃には既に遅い。

何の逡巡も覚えずに、鬼人を殺すという嗜好が身に付いてしまうのだ。

……鏡夜は、あの時の言葉を思い返す。

——鬼人を殺すためだけに生きて、そして死んで逝け——

それは、当時十歳だった少年にとって、呪いに相当する言葉だった。

——しかし。

「それしか、できない」

まるで機械が喋っているような語調で、鏡夜は呟いた。

そう。自分に有るのは、ただそれだけだった。

当たり前の日常を想像する事も、未来を夢見る事も、幸せになる事も、赦されはしない。

それが、今まで何千という数の鬼人を殺してきた彼の罪であり、存在理由でもあった。

「だから、殺す」

鏡夜は、鬼人に敵意を定める。

鬼人と鏡夜の視線が交錯した。

——鬼人は、何も答えない。

ただ、禍々しい赤い眼が鏡夜を凝視していた。

赤い眼は、鏡夜に何も教えない。

赤い眼は、鏡夜に何も語らない。

この存在には、何もない。

——ならば、殺しても良いのだろう。

鏡夜が疾走を開始する。人間の身体能力を超越した優雅な走りだった。

鬼人との距離はおよそ十メートル。だというのに、鏡夜は残像すら残しながら一瞬でその距離を詰めた。

右の手刀に収束するのは体内に蓄積されてある魔力。鏡夜の意志により物質的变化を成した魔力が、鬼人の胸部を穿った。

鬼人はびくん、と一瞬だけ体を痙攣させた。突き刺した箇所から溢れ出したのは、鬼人を構成している物質——負邪だ。

しかし、その攻撃だけでは、鬼人は消滅しなかった。

突如、鬼人の体に変化が生じる。右腕の部分が、西洋の槍を連想させる形状へと変態したのだ。

鬼人は負の感情の思念体だ。思念のみで体の形状変態が可能であるのは、負邪という物質が、人間世界で定められた物理法則から完全に逸したものであるからだった。

漆黒の槍が鏡夜の胸元に狙いを定め、放たれた。

しかし鏡夜の表情に変化は窺えない。

彼は槍を軽く一瞥し、瞬時に次の行動を起こす。貫通した胸部から腕を振り切り、胸部の右部分を切断した。そして振るった魔力は、漆黒の槍を一撃の下に破壊した。

しかし、鏡夜の動作は止まる事を知らない。

槍の破壊を確認した鏡夜は、そのまま体を反転させる。遠心力を利用して、より勢いを持った一撃で首を切断。さらには、左腕、両足と、次々に体の切断を実行した。

——それはまるで、舞っているかのような美しい動作だった。

……気が付けば。

鬼人は原型を留めておらず、無様な肉片へと成り下がっていた。切断された箇所から溢れ出す漆黒の思念は、夜の空へと消えていく。

鏡夜は毅然とした顔で、鬼人が消滅する様を見届けていた。

それはあたかも、圧倒的な実力を誇る上位者に、下位者が敗れたかのような。

……そして、鬼人の肉片が完全に消失する寸前――

「夢くらい見ろよ」

鏡夜の感情を表すかのような小さな余韻が、静寂な闇夜に木霊した。

だが、それと同時に。鏡夜の内界で、言い様のない正逆の思考が闘ぎ合い始める。

――こんな事を続けて、何の意味があるんだろうか。

それは、鏡夜の存在理由を無にしてしまふ禁忌の考えだった。

――でも、俺にできる事はこれだけだ。

それは、自分の行為が正当なものだと認識できる考えだった。

――でも、封殺者という鎖が、今の俺を繋ぎ止めているのなら、

――その鎖を断ち切れば、俺はどこへでも行けるかもしれない。

「そんな事は不可能だ。俺は、どこにも行けやしない」

彼の矛盾した思考は相変わらず続いていた。

決定者との邂逅

ピピピピッ、という機械音で、鏡夜は微睡みの世界から現実世界へと引き戻された。

ベッドから身を起こし、除々に意識を覚醒^{めざ}めさせていく。デジタル式の目覚まし時計のスイッチを押し、鳴り響くタイマーの音を止めた。

……呆、とした表情で辺りを見回す。

そこは自分の住んでいるマンションの一室だった。施設の研究員が封殺者となった鏡夜の為に提供した部屋であり、もうかれこれ七年も一人で住んでいる。

最初の内は戸惑う事ばかりだったが、一年も経てば自然と『自分の家』という認識を持つようになっていた。食費や生活用品を購入する為の資金、そして家賃も施設の人間——さすがに一般人の偽名を使用している——が払っているのだが。

部屋を見渡す限り、およそ男子高校生の部屋とはかけ離れていると言っても過言ではないだろう。生活用品も必要最低限の物しかない。テレビやテーブルなどはあるが、趣味で集めている物も少なくあるとすれば、二、三冊の分厚い古書が部屋の隅に積まれているだけだ。これは星礼会本部に訪れた際、図書館から拝借した魔道書である。とは言っても、厳重に保管されていた物ではなく、一般人の目に触れても問題のない世間的にも有名な本である。

と、そのように自分の部屋を他人の部屋のように観察していた鏡夜は、もう一度時計を見る。

現在、午前八時五分だった。学園の閉門時間は八時三十分。このままのんきに過ごしていたら、遅刻は免れないだろう。

（朝食は——食べてる時間はないか）

鏡夜はそう判断し、壁に掛けている学生服に着替え始める。朝食とは言っても、いつもトースト一枚で済ましている。それならば、

食べても食べなくてもほとんど同じだろう。

靴を持って、玄関口で靴を履き——もう一度、部屋を一瞥する。

「——行ってきます」

誰に言うでもなくそう呟き、鏡夜は廊下に出た。

朝の通学路を、鏡夜は独り歩く。

外気はそれなりに冷え込んでいた。昨晚ほどの寒さではないが、吐く息が白く滲んで見えるのは冬も本番の証だろう。

もう十二月の中旬だ。そろそろ、雪が降ってきてもおかしくはない。

元々、鏡夜は冷え性という体質もあってか、この季節はあまり好きになれなかった。

単調な足取りで歩みを進める最中。考える事も無いので、学校名を思い出してみる。

（——確か、黒堂学園、だったような……）

うる覚えであるのは、学校名など鏡夜にとってどうでも良い事柄の一部であるからだ。入学当初はすぐに思い出せていたのだが、今となっては、頭の片隅に保管している程度の知識だった。

その理由の一つに、学校に興味が無いという理由が挙げられる。事実、鏡夜は学校に何の関心も抱いていない。それ以前に、自分には何の利益も得られない無価値な場所という認識でしかなかった。

その学校に通っている理由はただ一つ。封殺者は、一般世界に紛れ込んで存在しなければならなかった。

封殺者は、世間では一般人と同一の存在として扱われている。封殺者として完成され、一般世界で生きられる見込みがあると判断された場合、十歳以下の歳で学校に通うという事もある。

実例として、鏡夜は十歳で『完成された封殺者』と判断され、その歳で小学校に通い始めた。一般世界で生き、日常と非日常での思考の使い分けをできるよう鍛錬を積み、自制心を覚えるのだ。無論、鬼人を殺すという嗜好を忘れないまま。

そして鏡夜には——これは他の封殺者にもいえる事だが——両親が存在しない。生まれた時に魔術儀式を行う場に連れていかれる事から、両親は非日常側の人間だと推察はできる。しかし、施設の研究員は封殺者候補の子供に両親の存在も、その真意も教えることはない。彼らとしても、子供達に不要な情報を与え、余計な感情を抱かせてしまうことだけは避けたかったのだらう。

だが、人間社会で生きていく過程の中で、いずれはその単語を知るようになるのもまた必然である。

鏡夜がその単語を認識したのは、十歳の頃——封殺者になって、小学校に入った直後だった。

そこで初めて授業参観という行事を目にした鏡夜は、いつもと違う教室の風景に混乱しそうになった。そして、隣の席に座っていた、大して親しくもない同級生にこう言われたのだ。

——千堂くんの親って、どの人なの、と。

突然の理解できない問いに、鏡夜は数秒間、沈思した。

しかし、鏡夜はその言葉の意味を理解してしまったのだ。故に、返答すべき言葉が見つからず、その生徒の問いを無視して授業に集中することで気を紛らわせた。

(だけど——)

そう、鏡夜はただ思う。

自分には親という存在がいなくてラッキーだった。

鬼人を殺すヤツが子供だなんて、きつと親が悲しむと思ったから。

……ポツポツと。そんな雨音が鼓膜を刺激する。

一人で色々と考え込んでいたからだらう。空を仰ぐと、いつの間にか暗雲が立ち込めていた。

なら、雨が降り出してもおかしくはないだらうと納得する。

十二月に降る雨の冷たさは、春や夏のそれと比較すべきではない。冷たい雨滴は、自然の摂理に逆らわずに鏡夜の体を——心までも

凍えさせていった。

おそらく、今日は一日中降り続けるだろう、鏡夜はそう思った。

学園に到着して、鏡夜は自分のクラスである二年A組の教室に入った。

それと同時に集中する多くの視線。それは、鏡夜にとって他人に等しいクラスメート達のものだった。

しかし、それも一瞬だった。彼らは鏡夜から興味を失ったかのようになり、HR前の駄弁りを再開させた。

鏡夜は、自分の席である窓際最後列の席に腰を下ろし、ハンカチで制服に付着した雨滴を拭き取った。

（あとは、HRが始まるまで待つだけだ）

鏡夜の周りにクラスメートが寄り付かないのは、偶然ではない。確かに、入学した一年の頃は鏡夜に話し掛ける生徒はいた。しかし、どれだけ接してこられても、鏡夜は意図的に無視を決め込んでいたのだ。

そんな鏡夜の態度と性格は瞬く間に学年中へと浸透した。そして一ヶ月も経つと、彼に接する生徒はいなくなっていた。

しかし、鏡夜は自身から孤立を望んだからこそ、意識的にそのような態度を装っていたに過ぎない。

自分は、彼らと関わるべき人間ではないと自覚していたからだ。

——俺は、日常に生きる人間じゃない。

——俺は、彼らのようにはなれない。

それが、封殺者としての千堂鏡夜の考えであり、自分を律する方法でもあった。

……それでも時折、無意識に教室の風景を傍観してしまう。自分の席と、それらを隔てる空間はまるで別世界である。

そして、鏡夜には決して立ち入る事のできない理想の世界。

故に、教室で笑顔を浮かべて駄弁っている生徒も、来年の受験に向けて勉強に励んでいる生徒も、鏡夜とは異なる人種だった。

（俺は……）

——あんな風には、なれない。

彼らが好きな事も、彼らが過ごす日常も、彼らが目指すものも。

それは、鏡夜には無縁の事柄だ。

それを知ってしまったから。彼らとは違つと認識してしまったが故の結論。

（なら、独りの方が断然マシじゃないか）

……彼らから意識を逸らした鏡夜は、窓の外を眺めた。

雨は一向に止む気配はなかった。

時間というものは、呆れるほどに早く進むらしい。

気が付けば中休みが終わり、気が付けば昼休みが終わり、気が付けば放課後になっていた。

それは、まるで一瞬の時だったかのような錯覚に陥らせる。

今日、鏡夜がいつも通りに過ごした学園生活も、無意味かつ無価値な時間で終わりを告げた。

そして現在。鏡夜は、教室から生徒が散り散りに去っていく光景を呆とした眼差しで観察していた。これから、どんな事柄に時間を費やすのだろう、などと思いながら。

——携帯電話をカチカチといじっている女子。友人と待ち合わせでもしているのだろうか……。

——テニスラケットを肩に担いでいる男子。これから部活に向かうのだろうか……。

各様、様々な理由があり、教室を後にしていく。

しかし、そんな当たり前の日常は——程なくして、完全に視界から消え去った。

無音となった教室にいるのは、千堂鏡夜という孤立を続けてきた生徒。

——孤独。

「——それが、当たり前だろう……？」

誰もいなくなった為か、鏡夜は、微かに震えた唇で呟いた。

しかし、自分に言い聞かせた言葉は、本音がどうかも怪しい。

——無音、無声、無感。

そんな虚無感が、鏡夜の心を侵すのはいつものことだ。

しかし最近になって、暴力的に襲ってくるそれらを理性で抑えられなくなってきた。

それ故か、覚える恐怖は本物だった。

この先、自分はこの暴力的な恐怖に抗い続けながら生きなければならないと思うと、死にたい気分に陥ってしまう。

それでも、鏡夜は自殺を行う勇氣など用いていなかった。

鏡夜に有るのは、鬼人を殺す為に生きるという存在理由だけなのだから。

(……でも)

そう考えるのならば、自分は中途半端な封殺者なのではないだろうか？

教室で独りになっただけ。たったそれだけの些細な事で、こんな虚無感に苛まれてしまうほど弱いものだから。

鏡夜は何年も前から自覚していたのだ。自分は、鬼人を殺す事が虚しくてしょうがないという存在の否定に。

——そして、自分が矛盾した思考を用いているという事実さえも、鬼人を殺すことが存在理由なのに、そうしなければならぬ意味を自問する。

自分は日常に生きられる訳がないのに、無意識にそれを期待している。

孤独に生きるのが当然だと自覚しているのに、それさえも偽りの感情に思えてしまう。

普通に生きたいという願いさえ、叶わないのに……。

「何なんだ、俺は……」

掌で顔面を覆って、ため息を漏らした。どうして、こんなくらない事を考えなければならぬのか。

（――殺せばいいだけだ）

そう。殺す事が、鏡夜が存在理由なのだ。
それだけが、自分の取柄なのだ。

そう、信じて生きてきたのだ。

――なのに。

なぜ、頬に涙が伝うのだろうか？

ボロボロと溢れ出す。

感情の一部である水滴が、木製の机を変色させていく。

嗚咽は漏らさなかった。自分が無表情なのは、自分自身がよく解っている。

（――ああ、俺は、こんな感情も持っていたのか）

そんなものは、いららないのに。

――どうして、こんなにも中途半端なのだろう……。

「泣いてるの？」

……不意に。悲哀を感じさせる細い声が、鏡夜の耳に届いた。

鏡夜は振り向かず、ただ無言で泣いていた。

「……なんで、泣いてるの？」

その言葉に、鏡夜はただ考えた。

（……なんで、だろう。知っている筈なのに。知らない筈がない、のに――）

思考の結果、鏡夜はかすれた声でこう呟いた。

「解らない」

そう。解る筈がないのだ。矛盾した思考を持っていて、それで自分の事を理解しているのなら、こうして『泣く』という行為に至る訳がない。

と、鏡夜の返答に反応したのか、声の主は足早に席へと駆け寄っ

てきた。

鏡夜は横目で、その人物を観察した。

小さい少女。それが第一印象だった。百四十センチにも満たない低身長に、その小柄な体格に似合った幼さが残る顔立ち。色素の薄い、長く伸ばした髪。

しかし何より、その哀しげに見つめる表情が、鏡夜の心を一層狂わせていった。

「――何か用か？」

「用ならあるよ」

少女は、鏡夜の素っ気無い言葉に笑顔で返した。

その微笑は、純粹で、無垢で、邪氣が感じられない。だからこそ一瞬、鏡夜は自分に向けられているものだという錯覚に陥りそうになった。

「千堂くんと、お話してみたかった」

そんな温かい言葉が、何故か嬉しく思ってしまった。

……しかし、その反面。

（駄目だ……。関わってはいけない）

——詭弁だ。俺がこの少女と会話をして得られるものなど何もないんだ。

そう自分に諭しても、鏡夜は返答してしまった。

「……なんで、俺なんだ？」

何かに期待をしている自分がいる事に自己嫌悪してしまう。

それは、少女の嘘偽りのない笑顔を見てしまったからだろ。だから、そんな言葉を口にしてしまった。

「私が、千堂くんの事を知りたいから」

「――何の為に？」

「……友達に、なつてほしいから」

その一瞬。少女の逡巡した顔を見て、鏡夜の疑心は確定した。

「友達作りなら、他を当たってくれ」

「うつん。私は、千堂くんがいいの。……千堂くんは、私と似てい

るから」

「は……？」

……この少女が自分と似ている？ そんな筈がない。

この少女は一般人なのだ。鏡夜のように、正常な思考を持っていない『異常者』とは違うのだ。

「……俺とあんたの、どこが似ている？」

「他人と関わろうとしないところ。……でも、私の場合、ケースが違うかな」

そう言つて、少女は弱々しくはにかなだ。

「私の場合、誰かを信じて傷つくのが怖いだけなんだけど、千堂くんの場合は絶対の否定でしょ？ そうなるのを自分が許せない。そうだった自分を許したくない」

少女が紡ぐ言葉に、鏡夜は何も返せなかった。

それは、核心を突かれたように思えたからだ。この少女の言う言葉は全体的確だと思つてしまったからこそ、鏡夜は押し黙ってしまった。

この少女は、鏡夜の心の奥底を覗いているようだった。

「学園に入学した頃から、千堂くんは私と似てるなつて思つてた。だから、ずっと気になつてた。……でも、話しかけるキツカケがなかなか無くて」

「じゃあ、何で話しかけた？」

「泣いてたから」

と。少女は迷い無くそう答えた。

瞳が訴えかけるのは純粋な答えだった。それだけが理由、それだけしかないと言わんばかりに。

「千堂くんでも涙を流すんだなつて、知つてしまったから。孤独が辛いんだなつて、知つてしまったから。だから、話しかけたの」
「……」

——少女の、言葉。

信じて傷つくのが怖いから。……鏡夜は、過去に似たような体験

をしたことがあった。

忘却したいあの頃の記憶が蘇りそうになり、咄嗟にその思考を断絶させる。

そして鏡夜と同じく、この少女はそれを経験してしまった。

根本の部分では異なるのだろうが、『孤独』という点でいうなら、鏡夜とこの少女は近似していた。

「——今日は、少しでも話せてよかった」

少女は踵を返す。

「私、遠近湊とちのかみなとっていうの。明日からは、ちゃんと話しかけるから」
最後に柔らかな微笑みを浮かべた少女——遠近湊は、静かな歩調で教室を後にした。

再び独りになった教室で、鏡夜は何を考えれば良いのか判らず、ただ、思考を停止させていた。

遠近湊

学園の昇降口に出ると、大粒の雨滴が灰色の空から降り注いでいた。

「……雨」

遠近湊は、基本的に雨が嫌いだった。

雨を目にすると、否応なくあの日の事を思い出してしまうからだ。それは忘却したい記憶だというのに、六年の月日が経った現在でも、雨を目にすると容易に蘇ってしまう。

故に、湊は頭を振って即座に思考を切り替えた。

——湊が千堂鏡夜を意識し始めたのは、一年前の春だ。黒堂学園に入学して、友達を作ろうと決心したあの頃。しかし湊は、それを実行することができなかった。

誰かに関心を抱こうとすると、背中が『傷』が疼き、拒否反応を訴える。

『また傷つきたいのか』と。

湊は、自分の負っている『傷』が未だ癒えていなかったことを再認識した。

……だから、諦めかけていたのだ。

そして、入学して半月が経過した、ある日の放課後。

クラスメート達が教室から散り散りに帰っていく様を呆と眺めていると、最後には独りになった。

いや、独りではなかった。

窓際に目を向けると、湊と同じく、呆とした様子で外の景色を眺めている男子がそこにいた。

何を考えているのか分からなかったが、湊はひとつの確信を覚えた。

——彼は、自分と同じだと。

錯覚でも、思い違いだとしても、湊にとってはそれで良かった。

……同じ存在が、同じ空間にいる。

それが、それだけの事が、凄く心地よかった。それから、湊は鏡夜を意識するようになった。

鏡夜は寡黙だった。そして、その孤立性は酷く虚しく思えた。

そんな鏡夜の在り方に、湊は興味を抱き始めたのだ。

鏡夜はクラスで孤立していた。……いや、それは彼の望みでもあったのだと湊は思う。

他人が嫌いなわけではない。おそらく、全くの関心が無いのだ。関わりを持ってしまったら自分自身が傷つく。故に孤立を選んだのだと、その頃の湊はそう決め付けていた。

鏡夜はただ、窓際最後列の席に座って窓の外の景色を眺めているか、読書をしているかの二択だった。

そして、今日もいつものように鏡夜の様子を窺いにいった。

おそらく、いつもと同じく窓の外を眺めているか、本を読んでいるかのどちらかだと思っていた。

その姿を見るために、湊は放課後の教室を覗いただけだった。しかし、今日は違っていた。

鏡夜は、泣いていた。

そこにどのような理由であつたとしても、彼にも『泣く』という感情があつたことが何より嬉しかった。だから、湊は衝動的な行動を起こして鏡夜に話しかけたのだ。

孤立を続けてきた鏡夜の心境に、涙するほどの変化が起こった理由が知りたくて仕方がなかったから。

（千堂くんがこの想いを聞いたら、きつと怒る……怒るのかな？）

もし怒られても、それでも嬉しい。

それは、鏡夜と関わりを持てたという証だから。

拒絶で隔てた鏡夜の空間に入る事ができたという証なのだ。

（今の私の気持ちは、ただそれだけ——）

——もつと、彼と話したい。

——もつと、彼を知りたい。

抑制が効かないが、とても素直な気持ちだった。

これで雨が止んだらもつと高揚していたのかもしれない。

……彼と一緒に傘に入れたらな、なんて事を思いながら、湊は学園を後にした。

彼は街に着いた。

以前、住んでいた頃と全く変わっていない街並みを眺める。

——同類が、この街にいる。

故に、彼は歩みを進めた。

翌朝になつての出来事だった。

鏡夜は起床すると同時に、酷い頭痛に苛まれていた。

頭痛を体験するのは初めてに近いが、これは痛いなんてものじゃない。頭の中で何かが響く感覚は、幻聴というモノなのだろうか……。

そして、不意に——

あの人の声が聞こえた気がした。

「痛ッ……！」

……幻聴だとしても、何かがおかしい。

脳裏を駆け巡るのは、七年前の記憶。

完全に忘却したいと努めてきた、忌まわしい過去。

「くそ……」

家に頭痛薬はないから、鏡夜はしばらく辛抱することにした。

カーテンを開けて、窓の外の様子を窺う。

昨晚、深夜まで雨が降り続けていたせいか、未だに空は灰色で染まっていた。

……それと同じく、鏡夜の心は曇ったままだった。

それは、一人の少女の存在が鏡夜の心に刻み込まれたからだ。

「とおちか、みなと——」

呟く。

『明日からは、ちゃんと話しかけるから』

——そんな事を告げられても、俺は普通に話せるのだろうか。

何年間も他人と接していなかったのに、そんな提案をされても、

鏡夜は困惑するしかなかった。

その思考は、無知な子供に似ていた。

子供は、生まれた頃は何も知らない。それは、動物であるが故の至極当然の事だ。

しかし、そこから『成長する』という過程において——他人と接して、喋って、思っ、感じていくことで、無知から解放されていく。

そうして、社会で生きる力を身に付けていく。

(……だけど)

そう。鏡夜は無知な子供のままなのだ。

誰とも接しない。それは、そのような状況と環境で育ったから、自ずとそのような人格に成ってしまったのだらう。

施設で過ごしてきた日々でさえも、一日の半分は牢の中にいたから誰とも接することができなかった。

そのせいで、鏡夜は他人の在り方を知らない。……いや、知ることが不可能になったのだ。

だから昨日も、あのような愛想のない言い方でしか言葉を表現できなかった。

そんな自分が、彼女と普通に接することは可能なのだろうか……。ふと、鏡夜は掛け時計に視線を配った。

午前七時五十分。

——そろそろ家を出よう。彼女の対処は、学園に着くまでに考えれば良いだけだ。

しかし、自宅のマンションを出ると、鏡夜はすぐに困惑する破目となった。

「あれ？ 千堂くんって、このマンションに住んだの？」

……路上に出た瞬間、湊と出くわしてしまったのだ。

「そっか。私の家と結構近いんだね。私も、この通学路を使って学園に通ってるんだ」

湊は心底嬉しそうに、柔らかな笑みを浮かべた。

一方、鏡夜はどう返答すれば良いのか見当がつかず——結果、逃げるようにひとり歩き始めた。

そんな鏡夜の行動に不満を持ったのか、湊は足早に歩み寄って、不機嫌そうに頬を膨らませた。

「返事くらい返そうよっ」

「……そう言われても、どうすればいいか分からない」

鏡夜の本心からの呟きに、湊は不思議そうに小首を傾げた。

「どうすればって、どういう意味？」

「女子と喋るのは、ほとんど遠近が初めてだから……対処の方法が思いつかない」

鏡夜の言葉に、彼女は少なからず動揺したようだ。

「千堂くんって、高校に入る前からこんな風だったの？」

「……そうだ」

だから鏡夜にとって、対処に困るとはそういう事だった。異性との会話など、七年間も行っていなかったのだから。

気軽に話しかけられた経験がほとんど無いから、自分も同じ様に返答ができない。

——こんな風になるなんて、思ってもみなかったから。

「でも、千堂くんって結構モテるんだけどなあ」

どこか遠い目をしながら、湊は言った。

「……俺が、モテる？」

「うん。身長は高いし、顔も格好良いつて、クラスの女の子達が言ってるよ。噂話でも、千堂くんってクールで格好いいよねって感じで学年中に流れてるし」

そのような噂話を、鏡夜は一度も耳にしたことがなかった。——いや、そんな話は興味の対象ではないから、耳にした時があっても即座に忘れてしまうのだろう。

鏡夜は、必要な情報と不要な情報があるとしたら、必然的に前者を取る人間なのだから。

「……俺は、そういう事に興味はない」

言つと、湊は「そうなんだ……」と、気分を落としたように顔を俯かせて黙り込んだ。

でも、今の言葉は鏡夜の本音だった。

恋愛なんて興味以前の問題だ。女性に好意を抱くなど、鏡夜は決して行つてはいけない事だから。

誰かを好きになると、自分自身が傷つくから。

封殺者である事を隠し通す自信がないから。

嘘偽りの無い気持ちを伝える自信がないから。

「——千堂くんは、自分に自信がないんだね」

湊は、ポツリと呟いた。

「……そうなのかもな」

鏡夜も、同様に呟いた。

「でも反面、そうでいたいと思ってる」

「……………」

「やっぱり、私と似てるね」

そう言つて、湊は笑みを浮かべた。

——似ている。ならば遠近も、俺と同じ考えを持っているのだろうか？

実行したい事柄があつても、それを行動に移すことができない。心のどこかで抑制が掛かつてしまつて。

そうして結局は、自分を偽ったまま人生を終えてしまうのだ――。

「遠近は……」

知らず内に、鏡夜は立ち止まっていた。

「……俺と、似ていると思っただけで話しかけたのか？」

似ているという理由で接してこられても、その本質を知らないのだから、鏡夜もどう接すれば良いのか判断がつかない。

湊が何を考えて、何を思って、自分に話しかけてきたのか。

その『本質』を、鏡夜は聞きたかった。

少し前を歩く湊は、振り返って笑顔を見せる。

「それだけじゃないよ。……一年間。ずっと意識していた人が悲しんでいたから、少しでも癒してあげたかった」

恥ずかしげに笑う湊を――鏡夜は少なからず信用してしまった。

――俺は。

「……余計なお世話だ」

そう吐き捨てた鏡夜は再び歩き始める。

湊は満足そうに笑って、隣に並んだ。

――遠近を、意識し始めている。

しかし、その気持ちに嘘偽りがあったことを、鏡夜はまだ知らなかった。

偽りの平穩

学園に着いた鏡夜と湊は、二人一緒に教室に入った。

一瞬、クラスメート達からの視線を浴びる。しかし、こんな事はもはや日常茶飯事である。

鏡夜は横目で湊を窺うが、彼女もとりわけ気にしている様子はなく、自然な様子で自分の席に座った。

鏡夜もいつも通り、窓際最後列の席に座り、窓の外に顔を向ける。……しかし。顔が勝手に湊の方へと向いてしまった。

湊の席は、廊下側から二列目の中間だった。

今まで気づきもしなかった存在が、同じ空間にいる。

——何か、不思議な気分だった。

それは、鏡夜が彼女を知ってしまったからだ。『遠近湊』という存在が、自分と同じだと思い込み始めたからだだった。

と、彼女は鏡夜の視線に気づき、笑顔で呑気に手を振っていた。当たり前のような日常が、ここにあった。

それは、今まで経験できなかった未知。

それは、経験することが許されなかった夢。

(……でも、それでいいのか?)

自分は、そちら側の人間と関わっても良いのだろうか?

……決して辿り着くことのない自問に、鏡夜は頭を悩ませ続けた。

「千堂くんっ。一緒にお昼ご飯食べよう!」

昼休みになり、湊が鏡夜の席に駆け寄ってきた時の第一声がこれだった。

自分は元々、昼休みは何も食べずに読書で時間を潰す方なのだが、と鏡夜は口にする、湊はずいっと顔を近づけて問いかけた。

「千堂くん。お昼休みは何の為にあるか分かってる?」

「自分のやりたい事に時間を潰すた——」

「違つよっ！」

鏡夜の言葉を素早く遮り、湊は拳を強く握り熱弁する。

「お昼休みっ！ それは購買にいる生徒達との戦争！ 敗者は潔くあんパンを食し、勝者は焼きそばパンを頬張れるっ！ さあ行くよ！ 焼きそばパンが売り切れる前に！」

鏡夜の意思を無視して、強引に手をひっぱり出す湊。

——読んでいた最中の小説の続きが気になって仕方がなかったと、鏡夜は机に置いた本を見つめ続けた。

「うわあ、今日も多いね！」

鏡夜は二年生になって初めて職員棟の購買に立ち入ったが、その光景に少し動揺した。

生徒の数が半端なものではなく、カウンターの前では、生徒達の群集がせ鬨ぎ合っていたからだ。

「あの人だかりの後ろに並べばいいのか？」

「違つよっ。あそこに突入するの！」

「でも、結構……というか、生徒が多すぎるぞ。それに、遠近は体が小さいから危なくないか？」

「それは……そうなんだけど」

顔を俯かせて、湊はこれまでの経緯を説明し始めた。

曰く、湊は毎日、あの人だかりの中へと突入しているというのだが、高確率——というか100%——で人ごみの中から弾き出され、あんパンを買う破目になっていたらしい。さらに、今日は鏡夜を教室から連れ出すのに二分の時間を費やした為、この人混みの中に突入するのが遅れてしまったということだった。

「……じゃあ、俺が行く」

「え、いいの？」

「出遅れた責任は俺にあるみたいだからな。焼きそばパンでいいのか？」

「あ、うん」

本人に確認を取ると、鏡夜は人混みの後方に佇み、軽く状況を分析した。

——なるほど。確かに、これじゃあ遠近が突入するのは困難だ。しかし、入れないことはなかった。人混みで溢れているのは確かだが、その『隙間』という空間は確かに存在している。

しかし、その空間が刹那で閉じられるのも確かだ。ならば『隙間』ができた瞬間に、次の『隙間』へと移れば良い。

後方から人混みに近づきつつ、鏡夜は神経を集中させた。

「ほら、焼きそばパン」

人混みの中から帰ってきた鏡夜は、湊にパンを渡した。

しかし彼女は、呆けたようにだらしなく口を開けた。

「ど、どうやって……？」

「普通に、人と人の隙間を通っただけだ」

「……もしかして、千堂くんって凄いひと？」

「——早く教室に戻るぞ」

鏡夜は踵を返して、さっさと歩き始める。湊も、「あ、うん」と

鏡夜の言葉に反応して、足早に追ってきた。

鏡夜はこれ以上、ここにはいたくなかった。

……背後から多くの視線が集中しているような気がして、居た堪れなくなっただからだ。

教室に戻り、鏡夜は自分の席で小説の続きを読むことにした。

と、今まさに読み始めようとしたその時、湊が自分の椅子を持つて近寄ってきた。

おもむろな動作で机の隣に椅子を配置して、座り込む。

「……何してるんだ？」

「お話しようかと思って」

そう言っ、満面の笑みを浮かべる湊。

「俺は小説を読んで、遠近は昼食を食べる。それでいいだろ」

「むう。小説を読みながらもお話は出来るよ」

「小説は自分ひとりで黙って読むものだろ。食事だってそうだ」

鏡夜の言葉に、湊は不安そうな表情に変えた。

「……千堂くん、いつも一人でご飯を食べてるの？」

「そうだが」

「家族の人とは一緒に食べないの？」

「いない」

「……そうなんだ」

そう言って、湊は数秒間黙り込んだ。しかし、鏡夜が無意識に溢した『家族がいない』という事に関しては何も触れてこなかった。

湊はすぐさま笑顔に変えて、鏡夜に色々な話を聞かせた。

身長が一向に伸びないこと。遊園地のアトラクションにほとんど乗れないこと。その小さな口で美味しそうに焼きそばパンを頬張りながら、彼女はずっと笑っていた。

翌朝。

休日の土曜日、午前十時に近づきつつある時間。

鏡夜は駅前の広場のベンチに腰掛けて、湊を待っていた。

というのも、彼女から「明日、遊びにいかない？」と誘われたからだった。

本当は約束をすっぱかして自宅で読書でもしようとしていたのだが……気がつけば、マンションを後にしてこの広場にやって来ていた。

（何をやってるんだ、俺は……）

内心で自分の行動に呆れながら、ため息をついた。

本来の鏡夜ならば、そんな約束は破って当然の人間だった。いや、それ以前に、そちら側の人間と関わるべきではないと判断し、約束を記憶から抹消するのが行動原理だった筈なのだ。

……ベンチに座ったまま、鏡夜は駅前の様子を呆と観察する。

休日だからだろうか、人の数が異様に多い。学生もいるし、子供

連れの親子もいる。

その人混みの中に、ふと、湊の姿を見つけた。

彼女も鏡夜を見つけると、ぱあっと顔をほころばせ、足早に駆け寄ってくる。

「お待たせつ。待ったかな？」

呼吸を整えながら笑顔でいう湊に、今来たところだ、と鏡夜は返した。

彼女は、その容姿に似合った純白のワンピースを着ていた。心なしか、良い匂いが鼻をくすぐる。おそらく香水だろう。

「そっか。それにしても……千堂くんって、いつも同じような私服を着てるの？」

小首を傾げて訊く湊。その言い方は少しおかしく、鏡夜も首を傾けた。

鏡夜は、白いYシャツの上に黒色のジャケット羽織って、紺色のジーンズを穿いていた。

しかし、鏡夜が湊に私服姿を見せるのは今日が初めてだ。『いつも』という聞き方が示す意味は——彼女は、過去に鏡夜の私服姿を見たことがあるということだ。

「……俺の私服姿をどこで見たんだ？」

訝しげに鏡夜がそう口にすると、湊は怒ったように頬を膨らませた。

……容姿が幼いせいか、威圧感も迫力も全然なかった。

「——千堂くん。三日前のこと、覚えてる？」

「……？」

……三日目に、何か心に思い残るような事があっただろうか、と鏡夜は黙考する。確か、その日は学園を終えて夜に鬼人の抹殺に向かい、殺した後に帰路に着いただけだった。

——と。不意に、抜け落ちていた記憶の断片が脳裏に蘇った。

そこで、鏡夜は三日前と同じ服装である事に気づく。

「あれ、遠近だったのか」

「そっだよつ。というか千堂くん、夜の繁華街で何してたの？」

「……何でもいいだろ」

言葉を濁して、目を背ける。

鬼人の抹殺に向かっていた、などと口が裂けても言えなかった。飯に言っただとしても、馬鹿にされるか頭がおかしいと蔑まれるに違いない。

話の方向を変え、鏡夜は訊ねた。

「それで、どこに行くんだ？」

「……うーん」

と、湊は腕を組んで考え出す。……行き先も決めずに遊びに誘ったのか、と鏡夜は深いため息を漏らした。

それから、湊は五分ほどその場でぐるぐると回り続けた。そして考えた末、喫茶店に入るという結論に至った。

鏡夜もとりわけ意見がある訳ではないので、先導する彼女の後を追った。

駅前のありふれた喫茶店に入店して、向かい合って席に着いた。

湊は紅茶、鏡夜はホットコーヒーを注文して、しばし無言状態が続いた。

しかし、この雰囲気が居た堪れなくなったのか、湊が口を開いた。「せ、千堂くんって、休日は何をしてるの？」

会話の内容としては、一般人としてはごく普通のものなのだろう。……プライベートの事を訊かれるのは初めてであるが故、鏡夜はしばし考え込んだ。

「読書と……瞑想とかだ」

「瞑想って、目を閉じて静かに考え事することだけ？」

「ああ」

「何を考えてるの？」

——どうも、遠近は俺に関しての事柄が知りたくてしょうがないような言動をするな。

鏡夜は数秒間、どう答えたものかと黙考する。そして、話せる範

囲内での事実を口にすることにした。

「……俺が生きている意味とか、だ」

無意識に、鏡夜は本音を語っていた。他人にこんな事を喋るのは初めてだからかもしれない。

呟きに等しい小さな声に、湊はどう応えたら良いのかと戸惑っていた。

「……滑稽だろ。こんな歳でこんな事を考えてるなんてな」

自嘲気味に薄く笑う鏡夜。しかし湊は「……うつん」と笑顔で首を横に振った。

「——生きる意味を考えるのは、どんな歳でも関係ないよ。誰だって、そんな自問をする時は必ずあると思う。……私も、たまに考える時があるから」

「……そうか」

「でね、私は人が信じられなくなつて……それなら、死んじゃった方がマシだつて考えちゃうの。でも、どれだけ憂鬱になつても、どれだけの傷を負つても、『夢』を見続ける為には生き続けるしかないって答えに辿り着くんだった」

「夢……」

それは、鏡夜が鬼人を殺した際にいつも告げている言葉だった。そして、あの頃——あの人に教わったひとつの単語でもあった。

「……夢なんて幻想だ」

鏡夜はそう反論した。しかし、湊は返答しない。

ただ、淡い笑みを浮かべているだけだった。

その笑みにどんな意図があるかは、所詮、鏡夜のような人の在り方を知らない人間に分かるわけがなかった。

注文した紅茶とコーヒーを飲み干した二人は、喫茶店を後にした。

それから、二人は色々な場所を回った。

デパートに入り服飾店を巡って、映画館に入って恋愛映画を見て

——とにかく、様々な場所を巡り歩いた。

気がつけば、既に日は沈んでいた。……遊びというものがこれ程
疲れるものなのか、と鏡夜は実感すると同時に痛感した。

それでも、湊は疲労している様子はなかった。笑顔を保ったまま、
色々な話を振って鏡夜がそれに素っ気無く返答する。そのやりとり
が続いていた。

——そんな、時だった。

ピシンッ

……体に宿る魔力が、反発機能としてそれを感知した。

そして、鏡夜は瞬時に思考を切り替えた。

腕時計を見る。

既に、時刻は八時を過ぎていた。

「——遠近、用事を思い出した。悪いが、今日はここまでだ」

「そうなの？ ……分かった。じゃあ、また月曜日に会おうね！」

「ああ」

言って、鏡夜は踵を返す。

この時点で、鏡夜は『遠近湊』という存在を完全に思考から外し
ていた。

——敵を殺すための封殺者として、自分は生きなければならぬ
と再認識したからだ。

決別

鏡夜が湊と出会ってから、一週間が経過した。

その間、鏡夜は湊と時間を共にすることが多くなっていた。

鏡夜はただ思った。自分の体験した日常は、未知を通り越して怖いほどだと。

それは、鏡夜自身がずっと望んでいた理想^{ユメ}であったというのに。しかし、鏡夜は一度も笑えなかった。

その分、湊は笑っていた。鏡夜が笑えないということを知っていたのかどうかは定かではないが、おそらく、鏡夜の分を補っていたのだろう。

遠近湊は笑える。

千堂鏡夜は——笑えない。

「……くそっ」

夜の街で、彼は苦々しく吐き出した。

目前に在るのは、消滅寸前の鬼人の残骸。いつも通りに殺したただけだった。

なのに——この気持ちは何なのだろう、と鏡夜は苦悩する。

一週間前に鬼人を殺した時も、このような言い様のない不快な気分^{気分}に陥った。

まるで、やってはいけない事を仕出かしてしまったかのような、

そんな背徳感。

(……だけど、これは俺の存在理由だ)

罪悪感を覚えるはずがない。——覚えてはいけないと、鏡夜は自身に言い聞かせる。

——何故なら。それが出来なくなってしまうたら、自分は存在している意味が無いのだから。

冬休みも間近のある日。

放課後、教室からクラスメート達が除々に消え去っていく様を鏡夜は観察していた。

それは、教室に残っている湊も同一だった。寂しそうな表情で、彼らが去っていく光景を見つめている。

——やがて。無音となった教室には、鏡夜と湊だけが残った。

「……帰らないのか？」

「うん。千堂くんが帰るなら、私も帰るよ」

「俺は、まだ帰らない」

「そっか。なら、私もまだ残るよ」

——それは、ただ言葉を受け取り、返すだけの行為だった。

この一週間で、この行為をどれだけ繰り返しただろう、と鏡夜は考えた。

（……俺の人生では、そんな経験はほとんどなかった）

湊と一緒に登校して、湊と一緒に時間を共有して——今、こうして二人きりになった。

そして、鏡夜の心には、こんな時間がずっと続けば良いと思っている感情が在った。

（こんな気持ちを抱くことになるなんて、思ってもみなかった）

しかし、その感情を否定している自分がいるのも、また事実で。やはり、自分は中途半端なのだと思い知らされる……。

湊は、いつもと変わらない様子で机の上に座り、窓の外を眺めていた。

「……雪、降ってるね」

「……そうだな」

大粒の白い結晶が、灰色の空から舞い降りている。

暦は十二月の下旬だ。雪が降っていても、おかしい事は何もない。雪が降っているから、ただ、それを呆と見つめているだけ。

何の意味もなく、何の変哲もない。ただ、舞い降りてくる雪を、無心で見つめているだけ。

それなのに、こんなにも心地よい。

故に鏡夜は、この瞬間を大事にしようと思った。

いつかは消え行く刻だと思つと、こうした無意味な行為でさえ大切にしたかった。

「千堂くん」

不意に、湊は鏡夜に話しかけた。

鏡夜は首を彼女の方へと向けて「なんだ？」と返す。

彼女は机から下りて、

「この一週間。私と話してみて、どう思った？」

と。いつも通りの微笑を浮かべて、いつも通りの幼い声で——そう、鏡夜に問うた。

「楽しかった？」

彼女は、言葉を重ねる。

「嬉しかった？」

彼女は笑みを崩さずに。

「哀しかった？」

純粹な気持ちで——そう、鏡夜に問うた。

故に、鏡夜はその気持ちを裏切つてはいけなかったからこそ、こう返した。

「全部だ」

——そう。想いを明確に表すのならば、そう応えるのが一番だった。

「遠近と一緒に登校して、楽しかった。遠近と時間を共有して、嬉しかった」

だけど、それでも。

「それを許してはいけないと思う自分があることが——哀しかった」
それが、嘘偽りのない本心。

嬉しいからこそ、哀しい気持ちになってしまう。
楽しいからこそ、虚しい気持ちになってしまう。

どれほど素晴らしい『日常』を体験しても、千堂鏡夜はそれを許容できなかった。

それは、鏡夜が封殺者という鎖から抜け出せないだけかもしれないけれど。

でも、それはただの言い訳に過ぎない。

（やっぱり、俺はこの少女を否定していたんだ）

結局、千堂鏡夜は『日常』へ行く事は不可能なのだ。

——だから。

「ありがとう」

そう告げた鏡夜は、湊の隣をかわした。

彼女の顔は見なかった。見てしまうと、きっと立ち止まってしま
うから。

だから、見たくはなかったのだ。

扉が閉まると、湊は教室で独りになった。

（また、独りぼっちになっちゃった……）

——思い出すと。

去り際の鏡夜の顔は、酷く哀しそうに思えた。

勿論、今の湊がそうであるように。

窓を見ると、自分の顔を薄く映し出していた。

——ああ、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「結局……」

湊は思う。この一週間は、自分だけの自己満足だったのではない
か、と。

湊が嬉しくても、鏡夜が嬉しい訳ではない。

湊が楽しくても、鏡夜が楽しい訳ではない。

『ありがとう』

……あの言葉は、おそらく決別での意味だろう。

これ以降、自分に全くの関心を見せないという意味での、絶対的な否定。

——もっと、千堂くんと話したかった。

——もっと、千堂くんを知りたかった。

たった一週間の付き合いでも、遠近湊の心は満たされたというのに。

それが、たったの一週間で終わりを告げてしまった。

——湊の頬に、何かが伝った。

それはおそらく、涙。

彼のことを想っていたからこそ、こうして溢れ出した。

……涙は、一向に止まる気配はない。

それほどまでに、湊は千堂鏡夜に好意を抱いていたのだ。

涙が止まって、湊は学園を後にした。

外は雪景色。

灰色の空から舞い降りてくる白い結晶は幻想的だった。

しかし今は、湊の体を凍えさせるだけの自然現象だ。

——雪は、スキだった。

雪だるまを作るのがスキだった。

雪合戦をするのがスキだった。

いつか、鏡夜と雪だるまを作りたいと思っていた。

しかし、それは叶わぬ願いに終わった。

独りで帰り道を辿る。

路面は雪で覆われていて、どこか足取りが重い。

それでも、独りで歩く。

鏡夜は、もう隣にいないのだから。

——孤独だった。

涙は乾いているから、誰にも気づかれずに済む。

「……気づかせない」

そう、湊は決意した。

父親にも、母親にも、絶対に気づかせはしない。

これは、遠近湊一人で解決しなければならぬ問題なのだから。

(……でも)

何日掛かるだろう、と湊は顔を落とす。

明日になれば、また気軽に鏡夜に話し掛けている遠近湊が想像で
きる。

そんな事は、考えてはいけないというのに。

しかし何故か、鏡夜も話を聞いてくれそうな気がする。

それは、なんてくだらない幻想ユメなのだろう。

——夢、幻。

鏡夜が話を聞いてくれたならば、それは夢。

鏡夜が返事をしてくれたならば、それは幻。

現実にはありえない想像風景。……妄想の世界。

——だというのに、それを期待している自分が今、ここに在る。

「……駄目だな、私」

独り言のように、呟く。

「何が駄目なんだ？」

……それは、独り言ではなくなった。

顔を俯かせて歩いていたらだろうか、前方に人が佇んでいる事
に気づかなかった。

湊は、ゆっくりと顔を上げる。

黒い傘を差しているからか、顔は判らない。

しかし、判った。判って、しまった。

——その、声だけで。

「あ……ああ……」

湊は呻き声を漏らした。

その男だと、確信してしまったから。

——背中の傷が、亀裂を起こしたように痛み出す。

その男は、黒い傘を畳んで、歪んだ顔で湊を見据えた。

「会う事はないと思っていたんだけどな……」

その瞳に映るのは、六年前と同じ殺意の黒色。

「——でも、会っちゃったんだよな」

そう呟いて、ゆっくりとした歩調で湊に歩み寄る。

湊は逃げられなかった。いや、逃げ出すことさえ叶わなかった。

——何故なら。この時点で既に、男は湊の『傷』を抉ってしまったのだから。

生きたい。

生きたい。死にたくない。

それだけの逃避概念を糧に、少年は、ただ必死に日々を過ごしていた。

それは、少年の願いだったのか。それとも、生きたいという望みだったのか。

そのような事は、まだ幼かった少年の知能では判別がつかなかった。

しかし少年には、それだけしか考えることができなかった。

気づいた頃には、身体中に幾多の傷跡を負っていた。

白い肌に不適合な、赤黒く穿たれた傷。

少年は痛覚を覚えなかった。おそらく、研究員が施した薬剤の効果が表れているのだろう。

しかし、少年にとって身体的な傷はどうでも良かった。問題は、精神面にあったのだから。

理性は完全に破壊され、発狂したことが何度もあった。心を犯すのは暴虐。——残ったモノといえば、生き残る為に自ずと身についてた知識だけだった。

朝六時に起床して、施設の研究員に薬剤の摂取を促される。後に何の飾りもないナイフを渡され、広大な面積を誇る地下闘技場へと連れて行かれるのだ。

向かいの扉から現れたのは、少年と同年くらいの子供。

後は何も言わない。

研究員の貌が告げる。

——殺れ、と。

だから、殺し合う。

そうしなければ、少年は生きられないと、既に悟っていたが故。だから、ただ必死だった。

他者を蹴落とし、他者を犠牲にして、他者よりも強くなった。

そうして何人殺してきただろうか、少年は血で帯びた闘技場の上に佇み、呆と考えた。

しかし、少年は何も感じない。

何も思わない。――否。思いたくなかったのだ。

全ての感情を排除して、一日でも長く存在していたかった。

そして、毎日殺人を続けていると、いつの間にか施設内の牢には誰一人いなくなっていた。

――何故か。

少年が全員を殺したからだ。

……少年は思った。

終わったのかな、と。

開放されるのかな、と。

生きられるのかな、と。

しかし、そのような思い上がった考えは、あっけなく破壊された。
――そう。

それは、本当にあっけなかったのだ。

「君は強い。『■■』を認識する素質もある。故に、さらに強くなつてもらふ」

にこやかに笑う施設の所長は、当然のようにそう告げた。

「三日後から、君に観察者を設けさせる。君の上司となる人だ」

そして三日が経ち、その人は少年の前に現れた。

「キョウヤ・センドウですね。初めまして」

現れたのは女性だった。顔つきからして十代後半だろう、と少年は勝手に憶測する。

端正な顔立ち、流麗な銀色の長髪。

そして、何より少年が魅了されたのは、その微笑だった。その笑みからは邪気が全く感じられず——一瞬、自分に向けられているのだろうか、という疑問すら抱いてしまった。

「貴方の観察者となるべくして参りました。レイ・ストライトです」
にこりと美しく微笑む彼女は、出会い頭に、少年にある言葉を教えた。

——それが、レイ・ストライトとの出会い。そして、少年の運命を定めた一日だった。

裁我

午後十時。日が沈み、空が闇色に染まった頃。

千堂鏡夜は、緩慢な足取りで繁華街を徘徊していた。

理由は言うまでもなかった。

——ただ、一人になりたくて。

——ただ、孤独に戻りたくて。

そして一刻も早く、彼女という存在を忘失したかったのだ。

湊と一緒にいると、自分の思考は、普段のそれと全くの別物へと変化してしまう。

自分でも、何を考えればよいのか判らなくなるのだ。

それは、確実に『遠近湊』という存在が影響を齎しているのだろ
う。

故に、鏡夜は逃避へと走った。

これまでに培ってきた自身の思考パターンが、彼女という存在が
脳内に残っている内は元に戻らないと判断したから。

彼女といると心が安らぐのは事実だ。——しかしそれ以上に、言
い様のない不安が襲ってくるのだ。

……それでも、そちら側に行く事を望んでいたというのに。

それを拒んでしまった鏡夜は、やはりそちら側に行く事を否定し
ていたのだ。

「矛盾している……」

学園で孤立して、他者に関心を持たなかった千堂鏡夜。

それが一週間でも変わったのなら、それで良いではないか。

——ホントウに？——

強風が吹き、雪粒が荒れ狂う。

凍てついた白い結晶が、黒色のコートに附着していく。

まるで、自分の犯した罪を償えと告げているかのように。
それでも、鏡夜は街を歩き続けた。

——集まり始めた負邪を殺す為だけに。

繁華街から二十分ほど歩き、オフィス街に到着した。

ビルとビルの間路地裏を通り、それを見上げる。

鎮座する廃ビルの第一印象は『陰』だ。四方からさらに高い高層ビルに囲まれている。窓ガラスは無作為に割られていて、外壁に装飾されたペンキは剥がれ落ち、さらにはスプレーで落書きまでされていた。灯りは一つも灯っていない。

他のビルとは隔離されているようにも思えるこの廃ビルに、今現在——負邪が収束しつつあった。

ビルの内部に足を踏み込む。

敷地内を一步進むごとに、床に附着している塵埃が舞った。

……他のビルとは、何かが異なっていると鏡夜は感じた。

まるで、外界から別世界に入り込んだかのような違和感が、鏡夜の第六感を刺激する。

灯りが皆無ゆえに、内部はほの暗い。頼りになるのは、割れた窓ガラスから差し込む月光だけだった。

三階に上がると、偶然か必然か、既に顕現していた。

「——探す手間が省けたな」

月明かりが、鮮明なまでに鬼人の姿を映し出している。

（——俺は、こいつらを殺す為だけに生きている）

そう考えると、彼女と過ごした一週間が実に無価値だと思えた。

（……そうだ。やっぱり俺は、あちら側に行くのは不可能だ）

——鬼人を見据え、鏡夜は思う。

今まで、何百回と殺してきた存在。

幾度となく冥界へと葬送してきた存在。

それは性懲りもなく、また自分に殺気を向けていた。

「……もういい。死ね」

自分の口から出た言葉に、内心で多少の動揺してしまう。

——しかし、それが感情。

いらぬモノ。千堂鏡夜という封殺者には有ってはならないモノ。
……苛立ちは治まらない。それは、彼女と関わってしまったから
だろうか。

（——でも、そんな事はどうでもいい）
今は、ただ敵を葬るだけだ。

鏡夜が接近する。

その際、鬼人の体の所々から黒い粒子——負邪が溢れ出ているこ
とに気づく。

（……どうということだ）

この鬼人は、今まさに顕現を行ったばかりだ。不完全に顕現した
のだろうか……。

しかし、先例を思い起こす限り、そのような例は今まで一度もな
かった。

だが、それはそれでラッキーだ。

弱体化しているのなら、いとも簡単に殺すことが可能だから。

……鬼人は、鏡夜の行動に何の反応も見せない。

否。この時点で、すでにそれは不可能だった。

鏡夜は一瞬で間合いを詰める。

後はいつも通り、体を十二分に解体すれば良い。

右手を手刀に変え、体内の魔力を収束させる。

そして胸部を狙い、刺突を繰り出した——

「……………えっ？」

おかしい、と鏡夜は疑問に思った。

自分は確かに胸部を狙い、そして放っただけだ。

なのに——どうして、寸前で止めているのだろうか？

「ちいッ！」

瞬時に二メートル後退する。

そしてもう一度、今度は行動そのものを完全に失わせるために、首の切断を試みた。

……荒い息が、静寂とした空間に響き渡る。

何がなんだか、ワカラナイ。

躊躇うはずがない。——そんな感情は、いらない。

——気が付くと、鬼人は今まで殺してきた中で最上の肉片へと変わり果てていた。

「はあ……はあっ………はあ」

呼吸を整えるには、精神的疲労の回復が要求される。

故に、まずは心理的疑問の解決が優先だった。

(何故だ……?)

鬼人を殺すことに躊躇ってしまった？ 否、そんなはずがない。あつてはならないと鏡夜は自分に言い聞かせる。

逡巡など、封殺者には禁忌の感情だ。

ならば、自分は何のために存在している？

ならば、千堂鏡夜の生きてきた年月は無価値だということか？

そんな筈はない。——そんな事実、あつてはならない。

(……どうなっている)

心中で呟いた疑問は、二つの事柄を指していた。

一つは、鬼人の殺すことに対しての躊躇いだ。

そして、鏡夜は目の前にある光景が理解できなかった。

彼は、いつものように手刀に魔力を収束し、解き放っただけだ。

そして今。鬼人は原型を留めておらず、周辺には肉片が散乱していた。

肉片は——全部で九つ。

首、左腕、右腕、右胴体、左胴体、右脚、左脚、左右手首。

完璧な解体。肉体根本の破壊。

おかしい事は何もない。だというのに――

「――なぜ、消えない？」

鬼人は、鏡夜の攻撃によって原型こそ失ってはいるが、左胴体だけが消滅することはなかった。

それ自体、不可解な事実だった。

人間の負の感情が収束した物質――負邪は、魔力とは対極に位置している。陰陽で例えるならば、負邪は『陰』、魔力は『陽』に値する。

互いに相反する物質ではあるが、一方の負邪には致命的な弱点があった。

その法則が『^{せいしつ}精質論理』だ。

負邪は、『不義』、『絶望』、『後悔』、『疑心』――この四大概念から成り立っている。

それは、自身の感情に敗北した弱体精神の思念であることから、『精神的弱質の無意識体』と定義されている。

対して、魔力という物質は己の欲望、意志力と言っても良い。自身の望む力で敵を討つ。その為だけに術者が練成する破邪の物質だ。そして、その魔力の根源とされている物質は『^{マナ}大気魔力粒子』と呼称されている。万物を創造した力と称えられ、ひいては、万物に支障を生じさせないために存在するモノ。そして、マナを体外、体内で行使させる際に扱う陽的な意志力を『^{ハードメンタル}精神硬質』と呼ぶ。

魔力は陽性意志力。

負邪は陰性弱質体。

弱質体が意志力に勝つことは決してありえない。故に、負邪を消滅させる役目は魔力にあるのだ。

そして、それは鏡夜の所属する組織――星礼会や、施設でも絶対法則として成立していた。

「――」

そこで、鏡夜はある事に気づいた。

この左胴体の『中』に残留してあるのは、負邪だけではないとい

う事に。

鏡夜は、左胴体を片手で持ち上げた。

そして、右手を切断面から胴体の中へと突き刺す。

(……これの筈だ)

ぐちゃぐちゃっ、と気味の悪い音を立てながらも、鏡夜は冷静に残骸の『中』を探る。

ガリツと、爪が何か硬い感触を捉えた。

球状の形と判断した鏡夜は、それを人差し指と親指で摘み、一気に引き抜く。

黒い血が壁や床に飛び散る。それは、粒子となつて虚空に溶けた。

鏡夜は『中』にあつたモノを観察する。

直系三センチほどの円球を象つた黒塊^{こっかい}は、薄暗い光を放っている。そして、黒塊を引き抜いた直後、最後の残骸は完全に消滅した――

「それ、オレがそいつの中に入れたんだよ」

――と。不意に、狂気を感じさせる声が、鏡夜の鼓膜を刺激した。鏡夜は振り返る。

『それ』は唇の端を吊り上げながら、鏡夜を面白げに見据えていた。

「――誰だ」

率直な質問。こんな廃ビルに人がいること自体不思議だが、それ以上に、その体に宿している魔力量は鏡夜に勝るとも劣らない。

鏡夜の端的な問いに、『それ』は一つ鼻で笑った。

「気づいていない訳がねえだろ？ 同類なのに」

カツン、カツンと、静とした空間に『それ』の足音だけが響き渡る。

「――やっと会えた。……オレは、ずっとお前を探していたんだよ。オレの事を唯一理解してくれる仲間をさ。この瞬間を待ちわびていたんだッ……！」

感情が昂ぶっているのか、『それ』は左手で顔を覆い、くくく、

と笑いを噛み砕いた。

「封殺者か」

鏡夜は確信を持って呟いた。

言動を理解すれば、自ずとその答えに行き着いた。キーワードは『同類』、『仲間』、そして体内に宿っている魔力反応といったところか。

百八十センチほどの高身長。肩に掛かる茶色の長髪に、白色のロングコートを羽織った男性。顔付きからして、年齢は二十代前半だろう。

「ああ、自己紹介がまだだったな」

昂る感情を出来うる限り制して、『それ』は話し始める。

「裁我^{サイガ}だ。真名は捨てた。そんなモノはオレにとって無価値だからな」

「そんな事はどうでもいい。この鬼人に何をした？」

裁我と向き合った鏡夜は、少なからず敵意を宿した目で睨む。

「……いいな。いいぜ、その目。その存在感……！ やっぱ、オレの目は節穴じゃあなかったみたいだ！」

鏡夜の問いに答えず、裁我はその喜悦に興奮していた。

奇声を連想させる渴いた笑い声が十秒ほど続いた。鏡夜は耳障りだと思いつつも、裁我から目を離さなかった。

裁我は、悦びに満足したのか表情を戻す。

「——ああ、質問に答えてやるよ。さっきも言った通り、お前が手に持っている『コア』は、オレが鬼人の体内に埋め込んだ物だ。千堂鏡夜。すでにお前も気づいている筈だ。それが魔力を与えた石だつてことにな」

裁我の言う通り、鏡夜はとうに気づいていた。魔力を融合させて精製された魔石。そして、この魔石に宿っている魔力の基が、目前にいる彼のモノだという事さえも。

「精質論理は知ってるだろ？ 負邪を消滅させる役目は魔力にある。故に、殺しても肉片が残留するのは矛盾する。——じゃあ、魔力そ

のものを埋め込めばどうなると思う？」

「性質変化って訳か」

一瞬でその答えに辿り着いた鏡夜に、裁我は賞賛の拍手を送った。「そういうことだ。負邪が魔力に勝ることは決してありえない。なら、魔力で負邪を塗り潰しちまえばいいだけの話だ」

『精質論理』の応用——。裁我が行ったのは、魔力による『消滅』ではなく、魔石を使用した『性質変化』だった。

負邪という『精神的弱質の無意識体』は、魔力という『精神硬質』に勝ることはない。故に、『魔力>負邪』という不等式は自然と成り立ってくる。

そして裁我は、鬼人の体内に自身の魔力を侵食させ、魔力で創られた存在へと変質させたのだ。

つまり、魔力そのものである鬼人に魔力を使用して殺害を行っても、体内に同化しているコアがある限り、『「魔力となった残骸」が残る』という理論だ。

鏡夜は一瞬だけ考えた。

彼はその知識と、それを実行できうる技術をどこで身に付けたのか、と。

しかし、鏡夜は即座に思考を切り替える。

そんな事は二の次だ。

重要視すべきは、それを実行した裁我の『在り方』にあるのだから。

「体内魔力粒子^{イナ}をそんな事のために利用したのか。封殺者であるが為の存在理由を否定したのならば、星礼会の魔術師に殺されても文句は言えないぞ」

体内魔力粒子^{イナ}——。それは魔術儀式により、人為的に認識させられた魔力を指す。封殺者として戦う為の機能を施した物質だ。

そして、それを行使するのは鬼人を殺す時だけだ。星礼会により任務を担った場合は除くが、それ以外の事項は対象にならない。

星礼会の魔術師達は、その為だけに封殺者に体内魔力粒子^{イナ}を与え

る。故に、使い道を誤った者は魔術師に始末されるというのが自然な流れとなっていた。

しかし鏡夜の危惧にも、裁我は全く動じなかった。

「心配してくれて嬉しいな。なら、そうならないように元凶を潰さねえか？」

「——なんだと？」

突然、理解に及ばない事を口にする裁我に、鏡夜は眉を顰めた。

……再び、裁我は距離を詰め始める。

「千堂鏡夜。お前のデータは完全に把握している。お前が日本最強の封殺者であり、同時に矛盾した思考の持ち主だつて事もな」

——鏡夜は応えない。

「さつき、鬼人を殺すのを躊躇ったのはそういうことだろ？ 何故、自分が鬼人を殺さなければならぬのか。何故、こんな理不尽な運命を持つて生きなければならぬのか。何故、星礼会の連中に従わなければならぬのか」

——鏡夜は応えない。

「つまりだ。結論から述べると、大元の原因を破壊すればいい。お前が俺の戦力に加われれば、現存している魔術師達を殺すことは不可能じゃないとオレは踏んでいる」

そこで、鏡夜はやつと口を開いた。

「何を言っている？ 所詮は封殺者だぞ、俺は。日本最強だとか誰が流しているのか知らないが、絶対的な上位者である魔術師に敵う訳が——」

「魔術師を殺したことがあるんだろ？」

……裁我の小さな呟きに、鏡夜は押し黙った。

その期待通りの反応に、裁我はニヤリと唇の端を吊り上げる。

「言ったはずだ。千堂鏡夜のデータは完全に把握しているってな。施設時代の観察者をわずか十歳だったにも関わらず殺したんだろ？」

星礼会の上位幹部殺しの情報を知った時は、さすがのオレも驚いた。だが逆に言うならば、わずか十歳の子供でも、魔術師を殺せるだけの戦闘力を用いていた事と同一だ。だから――」

と。裁我の言葉はそこで途切れた。

一瞬で眼前に迫っていた鏡夜の魔刀を防ぐことに思考を費やしたからだ。

側面から虚空を切り裂いて襲い掛かってくる一撃には、すでに裁我を殺せるだけの体内魔力粒子が収束されていた。

鏡夜の狙いは首。頸動脈を切り裂き、数秒で彼の生命活動を停止させる。それだけだ――

「いきなりだな」

しかし、その魔刀を防ぐだけの体内魔力粒子を、裁我は軽い口調で話しながらも蓄積していた。

だからこそ、たった一本の腕で防ぎきることができた。

鏡夜の前で『彼女』の話を持ち出すと、瞬時に敵意を抱き、標的に定めるという事さえも知っていた。

だからこそ、裁我はわざとその話を持ち出した。

「あの女が忘れられないんだろ？ そりゃそうだ。お前に唯一、夢を与えた女だもん。忘れられる訳がない」

淡々と紡ぐ言葉に、鏡夜はただ憎しみを覚えた。

彼女を忘れていなかったからこそ、自身さえも呪った。

「それだけの感情が、まだお前にも残っている。オレも同じだ。こんな理不尽な生き方を殺す為に、アイツらを破滅させる。その為に、戦力を増やさなきゃならねえ」

軋みを上げる腕を、裁我は強引に弾き返した。

そして……耳元で、そつと囁く。

「今すぐに答えを貰うつもりはねえ。だが、お前の本能は直感している筈だ。自由になるためには、星礼会を潰すしかないって事にな

……！」

鼓膜を刺激する悪魔のような囁きは、瞬く間に鏡夜を焦心状態へと陥らせた。

裁我は満足したような笑みを浮かべると、踵を返し、鏡夜の前から立ち去った。

時が止まったかのように、鏡夜の顔に変化はなかった。

「……答え……」

独り残された鏡夜は、裁我の言葉を繰り返す。

自由になる？ そんなことは不可能だ。彼女を殺した時点で、自分にそうなる資格はなくなった。

——だというのに。

「馬鹿野郎……！」

一瞬、思い至ったその結論は、千堂鏡夜の在り方を破滅しかねない『答え』だった。

鏡夜との接触を終えた裁我は、街中を歩いていた。

ふと、夜空を眺める。

先刻までの強風は、今となっては少しずつ治まりつつあった。

「……雪、か」

今夜は満月な分、白い結晶を神々しく輝かせているように思えた。

「……ちっ」

思わず舌を打つ。

これはただの自然現象だ。そこには、すでに科学的な解明が成されている。

はるか上空で水蒸気が極小の粒に変化し、地上に落下するだけ。その理論を認識したから、驚くことはなくなった。

……初めて『外』に出た頃は、あれだけ呆然と——愕然としていたのに。

気持ちが高揚して、あれだけ無邪気に遊んだというのに。

今は、ただ鬱陶しく、見るだけで憎悪を覚えさせた。

彼をそのような心境にさせる原因は――

「ニクイ」

裁我は、そんな言葉を発した。

そんな一言で片付けられてしまう。

――そんなものじゃないだろう？

――もっと、実行するべきやりかたがあっただろう？

(……くそ)

誰かが、脳内に問いかけてくる感覚を覚える。

それは、おそらく『裁我』という人間の内に宿る本能が告げているのだろう。

つまりは、あんなやり方では生温かったのだ。

――後腐れなく、あいつを殺るべきだったのだ。

……今頃になって、彼は後悔してしまう。

こんなどうでも良い事に思考を巡らせてしまう。

では――なぜ後悔するのか。

結論は、簡単に出た。

「……迷っちまったのか？」

しかし、自然と漏れた言葉は疑問系だった。

では、なぜ疑問系なのか？

そこを考えよう。

裁我が彼女に抱いていた感情は、嫉妬、不快、憎悪。……これくらいか。

しかし、それだけの負の感情を持ち合わせていたというのに、何故できなかったのか？

……………。

今度は、全く解らなかった。

「もう止めだ。時間の無駄だ」

結局、彼はその思考を断絶させた。

さて、別の事柄を考えよう。

(これから、どう行動すべきか……)

白い結晶が舞い降りる中、彼は静かな足取りで歩みを進めた。

観察者

翌朝の七時半。ベッドから起き上がった鏡夜は、睡眠不足でどこか体がダルく感じた。

（……馬鹿げてる）

睡眠不足——というか一睡もできなかったのは、裁我という封殺者の事を延々と考えていたからだった。

（そうだ。あいつの考えは理解に達しない）

そう自身に言い聞かせる。そうだ。星礼会を破滅させたところで、裁我はともかく……自分は自由になどなれないのだ。

何故、彼が自分から絶望の道を辿ろうとしているのか、現時点での鏡夜には解らなかった。

どんな理由があつて、どんな想いを抱いて、そのようなくだらない幻想を夢見てしまったのか。

——所詮は、価値のない事だというのに。

「考えるだけ無駄だな……」

結局、鏡夜は裁我という男を忘却する事にした。

考えを決めると、次の行動に移行するのは容易だ。すでに時刻は七時半を回っている。少し早いが、学園に向かう準備を整えることにした。

いつも通りに制服に着替え、いつも通りに、鞆に教科書を詰め込み——

「——いつも通り？」

と。鏡夜は震える唇で呟いた。

（……今、完全に思考が狂った）

鏡夜は、『いつも通り』の類に『彼女』の存在が混ざっていた事を認識した。

（違う……！）

だからこそ、自分自身に憤慨してしまう。このような思考は、今

の自分に不適合であると。

——終わったんだ。

そう。鏡夜は終わらせたのだ。

そちら側には行けないと、再認識してしまったから。

『彼女』のようにはなれないと、確信してしまったから。

だから、「ありがとう」と告げたのだ——

（駄目だ……）

……昨日の一件もあり、過度な精神的疲労が続いたからだろう。

鏡夜の顔から、除々に気力が失われていった。

「今日は、休もう……」

鞆を部屋の隅に放り投げ、荒々しくベッドに横たわった。

鏡夜は、ゆっくりと目を閉じる。

（……何を迷っている、千堂鏡夜）

瞑想を行ってみても、答えなど出てこなかった。

いや、それ以前に、鏡夜はこうした行為を今まで幾度となく繰り返ししてきた。しかし、納得のいく答えを見出したことなど一度もなかったのだ。

こうやって無駄な時間を費やして、何かが変わるなどありえないと知っているのに。

——でも、今日くらいは良いだろう。

——眠りたい。

——せめて夢の中だけでも、俺は。

ピンポーン。

微睡みに墜ちる寸前。鏡夜の耳に、そんな機械音が届いた。

「……ッ！」

そして、一気に眠気が退く。

反射的にベッドから身を起こして、正面にある玄関を見据えた。当然だが、扉の向こう側が透けて見えるはずがない。

——しかし。扉の向こう側には、『あの存在』がいると体内魔力粒子が直感を示していた。

魔力分子が互いに反発し合っている。故に、眠気が退いたのだ。

それは、従う者と支配する者の決定的な上下関係。
それは、絶無者と絶対者の決定的な在り方の違い。

ベッドから立ち上がった鏡夜は、玄関まで歩いた。

震える膝をどうにか御しながら……ゆつくりと扉を開ける。

まず確認できたのは、二メートルを超える巨軀。

全身は黒という服装で構成されている。長く、地面に届くほどの外套すら黒色。

感情が有るとは思えない、何も無い顔。

——しかし、その存在感はホンモノだ。

鏡夜を静かに見据えている魔術師が、そこにいた。

それは、地獄を連想させた。

空気が死に、音が死に、体に宿る魔力が怯えている感覚に襲われた。

すでに、ここ周辺は異界へと変化を遂げてしまったといっても過言ではないだろう。

一般人が付近を通りかかったら、間違いなく気絶する。

それ程までの地獄を創造した男を眼前に、鏡夜はできうる限り平静を装った。

……この感覚は、あの時と酷似していた。

「——久しいな、千堂鏡夜」

低く重い声の中には、どのような感情が混ざっているのか。

鏡夜は、変化しない男の顔から目を逸らさなかった。

「何の用だ。天美戒」

少なからず敵意を持って、鏡夜は男——天美戒を静かに睨み付け

た。

「立ち話もなんだな。部屋には入れるか？」

「——重要事項か？」

「その通りだ」

やはり変化のない口調で返す天美。

「……わかった」

端的に了承して、鏡夜は道を開ける。

天美は玄関で黒色の靴を脱ぎ、ワンルールの部屋に上がり込んだ。

「座らせてもらうぞ」

天美は、居間の畳に正座をする。

鏡夜も、天美の向かいに胡坐で腰を下ろした。

「——用件は？」

探るような目を向けながら、鏡夜は尋ねた。

他人である封殺者の元に魔術師が自宅訪問を行うなど、およそありえない光景だった。

故に、鏡夜は問う。

「あんたは俺の観察者じゃない。星礼会の魔術師が俺と接触する理由が解らないが」

「確かに、お前の意見は的を射ている。しかし、場合が場合なのでな。私はお前の観察者ではないが、下者^{ロウアー}がお前と接触した。故に、他人事ではなくなった。知つての通り、観察者とは下者^{ロウアー}——直属の部下である封殺者の行動、鬼人の抹殺数を記録し、星礼会の上層部に報告書を提出する義務を担っている」

お前は例外だがな、と付け加えて天美は言葉を紡ぐ。

「そして今回の件は、私の下者^{ロウアー}が引き起こした事件である事から、私がお前への伝達者^{メッセンジャー}となった。——千堂鏡夜。すでに裁我とは接触したな」

「……何故、その事を知っている？」

「それは、私が彼の元観察者ゆえに、だ」

紡ぐ言葉には、威圧的な重みを感じられた。天美の発する一言一

言が、鏡夜の脳へと必然的に刻み込まれていく。

「星礼会は、この町に二人の封殺者を派遣する予定だ。明日にはこちらに到着するだろうな。その少数精鋭部隊の隊長に、お前が抜擢された。」

率直に告げる。星礼会の上層部が議論し、導き出した結論はこの通りだ。『コードナンバー01、千堂鏡夜に命じる。裁我を始末しろ』

「……それは、決定事項なのか？」

「その通りだ。奴が接触し、尚且つ、我々に反逆を行う為に仲間に加えようとしている人物は、紛れもない千堂鏡夜という封殺者——お前だ。そして、接触の機会は今から幾度となく訪れるだろう。ならば、その機会を有効活用するのが最善の策だ。コアを埋め込まれた鬼人の始末は他の二人に任せることになる」

「……ひとつ訊きたい事がある。コアを創り出したという事は、裁我の魔術技巧は博士号並みという事実と直結する。あいつは、あの超絶技巧をどこで修得した？」

あのような魔石を創り出したこと自体驚くべき事実だが、鬼人の体に埋め込むという例を鏡夜は聞いたことがなかった。

鏡夜の問いに、やはり天美は無表情で返答する。

「彼は封殺者でもあり、同時に魔術の探求者でもある、というべきか。二年前まで、彼は関西の施設において様々な研究を行っていた。その研究成果が現在に至るといふことだな。今お前が述べた通り、彼は星礼会上層部から、『魔術論理学』の博士号を授与されている」

「……そうか」

呟いて、鏡夜は黙り込んだ。

おそらく、裁我はこの時のためだけに研究を進めてきたのだろう。星礼会を滅ぼし、自分が自由になる為だけに、二年の年月を費やした。

(……所詮、価値はないのに)

どれだけ抗おうとも、自分達は従う事しかできないのに……。

「何を躊躇っている？」

天美の言葉には、迷いなど微塵もなかった。

「殺す事がお前の存在理由だ。それは鬼人のみが対象ではない。過去の任務においても——そして七年前も、お前は殺してきたはずだ」

天美の言葉には、逡巡など全く籠っていないかった。

それは、鏡夜がそれだけしかできないと知っているからだ。

鏡夜の在り方に、迷いは必要ないと彼は知っているからだ。

(……そうか)

そして、鏡夜は改めて実感した。これが、魔術師という存在なのだ。

古傷は決して癒えない。——心に負った、あの人を殺した時の感覚。

天美は、顔色一つ変えずに、ただ冷然と自分を見据えている。

天美は、邪魔な存在を殺すためだけに自分を利用しようとしている。

——今頃になって、鏡夜は気づいた。

自分に、逃避など叶わないのだと。

「——コードナンバー01、千堂鏡夜。裁我の始末を承諾した」

……結局、鏡夜はそう口にしてしまった。

「その言葉、確かに受け取った」

天美は深く頷き——不意に、こんな言葉を口にした。

「頭痛は治まったか？」

「……なに？」

意味が解らず、鏡夜は眉を顰める。

「……よい。邪魔したな」

言って、天美は立ち上がり鏡夜に背を向けた。

除々に遠ざかっていく足音は——しかし、玄関口で止まった。

「あの娘の見舞いに行つてやれ。……遠近湊だったか。K大付属総

合病院に入院している。――ではな」

そう言い残して、今度こそ天美は扉の向こう側へと消えた。そして、この時点で鏡夜は気づいていなかった。

その言葉が、魔術師の慈悲だったということに。

少女は、閉じていた双眸をゆっくりと開いた。

ぼやけて見えた視界が、除々に鮮明な風景を描き出していく。

「……ん……う」

咄嗟に目を細めた。

カーテンの隙間から射し込む日光は眩しく、少女に朝が来たという事を報せてくれた。

少女は仰向けの状態で、首だけを動かした。

白い天井。白い壁。辺りを見回しても、誰もいない。

そこで、少女は自分が病室にいるという事を認識した。

「……いたっ」

少しでも体を動かそうとすると、腹部辺りが痛んだ。

でも、と少女は思う。

何故、自分は病室にいるのだろうか？

少女の記憶では、その辺りがどこか曖昧だった。

しかし、おそらくこの痛みが原因なのだろう。パジャマを捲ると、腹部には包帯が巻かれてあった。

身を起こそうとしても、腹部に亀裂が走ったような激痛を覚える。

少女は、満足に起き上がれない状態だった。

何故入院しているのかは、後で医者に尋ねれば良いだろう。

……それと、もう一つ。

自分は、何かを忘れていないか、という疑問を抱いた。

そして『それ』は、忘れてはいけなかったような気がしてならない。

ズキンッ、とまた腹部が痛み、少女は顔を歪ませた。

——駄目だ。今は考えるのはやめよう。

——もう少しだけ、眠ろう。

次に目を覚ました時には、きっと思い出しているだろうから。

心界の章 / 2

少年の観察者となったレイが施設に訪れ、一週間が経過した。

その間に行われた事は、少年とレイによる戦闘訓練のみだった。

元封殺者であったレイの実力は、少年が今まで相手にしてきた封殺者候補と比較すべきではない。いや、その考察自体、愚考だと少年は思った。

いつ、攻撃を受けたのか解らない。

いつ、気を失わされたのかさえも理解できない。

少年の全力を込めた魔刀による攻撃も片手であしらってしまうほど、レイ・ストライトの強さは異常だった。

いや、異常という表現にも語弊がある。レイは、その強さが『完成』されていたのだ。

これまでに何千という数の鬼人を殺してきたレイは、少年とは『格』というモノがかけ離れていたというだけの話だった。

「キョウヤ、少し休憩を入れましょう」

五時間にも及ぶ戦闘訓練に、二十分間の休憩を挟もうと提案を出したのはレイだった。

闘技場の隅に腰掛けた二人は、喉に飲料水を通す。

「……レイさん」

「なんですか、キョウヤ？」

微笑みながら、小首を傾げるレイ。その仕草はとても愛らしく思えて——同時に、心臓の鼓動が一段と早くなってしまうという鏡夜にとって厄介な仕草だった。

少年は顔を俯かせて、抑揚の無い声で尋ねた。

「レイさんは、昔、封殺者だったんでしょ？ 鬼人を殺していた時、哀しいって気持ちにならなかった？」

いつか、自分もレイと同じ場所に立つ者として、『先輩』というべき人間の意見を聞いておきたかった。

——レイさんは、何を想って殺しているのか。

——レイさんは、何を悟って普通でいられるのか。

少年の問いに、レイは少し愁いを帯びたような笑みを浮かべた。

「そうですね。哀しいという感情は確かに有りました。それは封殺者になった人間ならば、必然的に経験する感情ですからね。鬼人を殺す為だけに生きて、死んで逝く。私がその運命を自覚したのも、貴方くらいの年頃でした。ですが——」

そこで言葉を切ったレイは、普段通りの優しい微笑を浮かべた。
「私は、それを受け入れるつもりはありません。抗いなど無価値だと言う輩もいますが、それでも私は、夢を見続けていたい」

「……夢？」

「ええ。私が抱いている夢。貴方が抱いている夢。その種類は人それぞれですが、人間は誰だって、夢を見続けていたい生き物なんです。願望、自身の在り方を決定する『正への方向性』」。

キョウヤ、貴方の夢はなんですか？」

問う視線すら優しい彼女に、少年は顔を俯かせることしかできなかった。

（……僕の、夢）

それは、考えてはいけない事だと少年は思った。

鬼人を殺す為だけに生きて行くのに、そんな奇麗事は無価値だと思えてならなかったから。

——なのに、何でその言葉を意識しようとしている自分がいるんだろう？

黙り続ける少年に、レイは小さなため息を漏らす。

「今はまだ、その時ではないのかもしれませんが、ですが、私は祈り続けましょう。貴方が、本当の感情に気づくその時まで」

レイは、両手を胸に当てて、本当に祈るように口にした。

天使を連想させる柔らかな微笑みは、確かに少年を想つての仕草だった。

この時、少年はレイと共に笑うことができなかった。

——僕も、いつか笑える日が来るんだろうか。
しかし、レイの笑顔を見つめていると、そんな日が来るのかも
しれないと少年は思えた。

二人の封殺者

——魔術師は去った。

再び一人になった鏡夜は、荒々しくベッドに寝転ぶ。……畏怖というモノは感じなかったが、疲労だけは免れなかった。

体は汗まみれになり、両手の震えは止まらず、唇まで小刻みに震えてきた。

——その要因は。

『あの娘の見舞いに行つてやれ』

その言葉を聞いた瞬間、強烈な不安が押し寄せてきた。何か、言いたくない危険が迫っていると鏡夜は直感したのだ。

「……遠近が、入院している」

その理由が何であれ、彼女が傷を負ったというのは確かな事実だと思った。

では何故、魔術師がそのような事柄を鏡夜に伝えたのか？

自分の観察者でもない天美戒が、日常世界の他人事に干渉する意味は皆無だ。

故に、先の言動の意味が鏡夜には全く解らなかった。

——では、なぜ？

(……あいつが、鬼人が裁我に襲われた……)

心中で、鏡夜はその可能性を呟いた。

確率は低いが、天美が日常世界に生きる人間の話を持ち出したのは、非日常の事柄と関連しているからかもしれない。

(もしその通りなら、遠近から何らかの情報を得られるかもしれない)

結論を出すと、行動に移すのは早かった。

ベッドから起き上がり、天美戒が言っていたK大付属総合病院に向かう支度を始める。

裁我を始末する任務を受け持ったのだ。彼に関する情報は少しで

も多い方が――

「今、俺は何を考えた？」

しかし、自分の考えていた事の意味が、瞬く間に恐怖を覚えさせる。

(……まただ)

また、思考が狂った。

――利用するのか？

彼女を遠ざけて。

必要となれば、彼女に近づく。
期待させて、絶望させて――。

「まるで偽善者だ……」

再びベッドに横たわる。

ピンポーン

二回目の呼び鈴が鳴った。

しかし、鏡夜は聞こえていないかのように目を虚ろとさせていた。
(……俺に何の用がある？ 何を求めている？ ――何を期待している？)

――こんな、何もかもが中途半端な人間に。

(……早く帰ってくれ)

鏡夜の否定を無視するかのように、呼び鈴は二回、三回、四回と鳴り続ける。

鏡夜は出る気がなかった。今は、人と会いたくないから。
人と会って、こんな無様な自分を見せたくないから。

……しかし、それは唐突だった。
ガチャッ

「……は？」

思いもしなかった来客の行動に、鏡夜は思わず呆けた声を漏らした。

あろうことか、来客は許可なしに家に上がり込んできたのだ。

鏡夜は、咄嗟にベッドから身を起こす。

「ふああ。……良いんスカ？ 勝手に上がり込んで」

最初に聞こえてたのは、大きな欠伸をしている女性の声。

「いいのいいの！ 居るのは確実なんだから！」

次に、いつか聞いたことのあった中性的な少年の声。

静かな足音に対して、ドスドスと無遠慮な足音。

——かくして、その二人は鏡夜の前に姿を現した。

「久しぶりだね、キョウヤ！」

「お邪魔するツス」

先導して姿を見せたのは、テンションの高い銀髪に碧眼の小柄な少年。後方には、ポニーテールの髪型に、目を半眼状態にした日本人の少女がいた。

「——なぜ、お前が日本にいる？ カイン・エレイス」

「そんな結論も見出せないの？ 全ては星礼会の命令により、だよ」

「……天美が言っていた封殺者っていうのはお前のことか」

はあ、と重いため息を吐く鏡夜。

その、明らかに気分を損ねた鏡夜の反応に、少年——カイン・エレイスはぶくつと頬を膨らませた。

「二年ぶりの再会なんだから、もう少し喜んでもいいんじゃない？」

「お前と再会して喜ぶヤツは、世界には存在しない。——あんたも気をつける。いつ殺されるかわからないからな」

鏡夜はポニーテールの少女に視線を送り、忠告を促す。

ポニーテールの少女は、鏡夜の危惧に二度目の欠伸で応えた。まるで緊張感というものが感じられない。

「すでに殺り合ったツスよ。空港からこっちに向かう途中というものの、何度も奇襲を仕掛けられたツス。まあ、カインくんが本気じゃなかったから、死ぬことはなかったツスけど」

微妙な敬語を使いながら、気怠るそうに言う。大きな黒い瞳を半眼状態にした少女は、いかにも無気力な雰囲気醸し出していた。腰まで届くポニーテールは流麗で、黒絹で出来ているかのような艶やかさがあつた。

そんなポニーテールの少女は、直方体の形をした革張りの箱を肩に担いでいた。

（あの箱――）

瞬時に、鏡夜は理解する。あの箱の中に入っている物は、死を具体化した彼女の武器であると。

「チサメちゃんの戦闘力を測定したかったただだよ。好奇心好奇心っ！」

対するカイン・エレイスという少年は、百五十センチほどの低身長。銀髪に碧眼という容姿をしている。鏡夜の記憶では、確か喜怒哀楽がはつきりとした少年だった。それは現在でも変わっていないようだ。

……しかし、鏡夜はこの少年の本性を知っていた。故に、対応の仕方は完全に熟知しているといっても過言ではない。

そして、二人が最後に別れた二年前と変わらず、大型のアタッシユケースを手には担いでいた。あのケースの中にはカインの武器が入っているのだ。

「天美は明日に到着すると言っていたが……お前のことだ。早く殺したくて前日に来たんだろ」

「その通り！ さつきカイさんと偶然会ったけど、少し動揺してたよ。でも、『早いに越したことはない』って言ってたから万事オツケーでしょ？」

ニコニコと笑いながら、指でVサインを作るカイン。

「まあ、私もそれには賛同ツスね。面倒な事には変わらないツスけど……」

後ろ向きな同意を示すポニーテールの少女。その微妙な温度差は、カインとミスマッチしているように思える。

「……とりあえず、二人とも荷物を置いて座ってくれ。紅茶でも用意する」

鏡夜は三メートルとない距離を歩き、キッチンでマグカップを用意し始める。

「サンキュ！ 砂糖多めでね！」

「ありがとッス。あ、私は日本茶でお願いするッス」

三人がテーブルにつくと、最初にカインが話を切り出した。

「さて、まずは互いの自己紹介といこうか。ボクはカイン・エレイス。十五歳。イギリスの施設で育った封殺者で、殺す事が大好きな美少年だよ！」

「……」

「……」

微妙な沈黙が入り、ポニーテールの少女は横目で鏡夜を見やる。

「……こういうヤツなんだ。放っておけ」

「む、何かボクを馬鹿にしているような言い方だね、それ。じゃあ付加要素として言い直すよ。好きな言葉は『殺害』、『殺戮』、『皆殺し』、『殺し合い』……まだまだあるけど、一応、高順位ではこれくらいかな？」

「……」

「もついい、無視してやれ」

「了解ッス」

二人の言葉に、カインはぷくー、と再び頬を膨らませる。しかし、先の言動のせいか、二人は謝る気になれなかった。

「じゃあ、私の番ッスね。工藤千雨くふうちんあめッス。歳は十七。私も一応封殺者ッスけど、施設には入ってないッス」

「なに？」

鏡夜は千雨という少女を訝しげに見据えた。そんな前例は聞いたことがなかったからだ。

封殺者に成る為には、施設での殺人訓練が絶対視される。それは、

何の躊躇いもなく鬼人を殺すという嗜好を身に付けさせるためだ。それでは矛盾が生まれてしまう。施設の出身者以外が封殺者に成ったという前例を鏡夜は耳にした事がない。つまり、それが意味するのは――

「あんだ、魔術家系の人間か？」

「はいッス。工藤家は、日本退魔御三家の筆頭とされているッス。古くからの血統が受け継がれて、生まれた時から純粋な魔力を扱える体だったので、魔術儀式も受けていないッスね」

なるほど、と鏡夜は心中で納得する。

スポンサーが日本を代表する魔術家系――そして、魔力の使用が可能なら、施設での訓練は無駄という訳だ。

「じゃあ、あんだは大気魔力粒子の使い手なのか？」

大気魔力粒子^{マナ}には、封殺者が行使する体内魔力粒子^{イナ}とは異なる点が一つある。

それは使用に限りがないということだった。封殺者の用いる体内魔力粒子^{イナ}は、長時間の使用によって――使用頻度にもよるが――体力、精神力の低下と共に底が尽きてしまう。

しかし、大気魔力粒子^{マナ}は自身の外界から収束するものであるが故、使用上限というものがないのだ。

そして、それを行使できる存在は、魔術家系に生まれた人間――つまり、『魔術師』の部類に属するということになる。

しかし鏡夜の問いに、千雨は頭をガシガシと掻きながら否定した。

「あー、いえ。私、基本的に大気魔力粒子^{マナ}は扱わないんすよ。一族の当主から使用を禁じられていまして。私の基本戦闘論理は、あの革張りのケースの中に入っているモノによる近接戦ッスから」

と、千雨は先刻部屋の隅に置いた直方体のケースを指差した。

「それと、封殺者に成ったのも当主の命令ッスね。『お前の生活環境を変える。星礼会に所属して、世の中の為に働け』だそうッス。

……まあ、四六時中、家で寝ていたのが原因だと思っくんすけどね」

「……そんな理由で、あんたを封殺者にしたのか？」

「はいッス。それと、星礼会っていう団体とか、『コードナンバー』とか、よく解らないッス。私が封殺者に成ったのは今年の十月でして。知識に乏しくてすみません」

ペコリと礼儀正しく頭を下げる千雨に、今まで二人の会話を傍観していたカインが口を開いた。

「簡単に説明するとね、星礼会っていうのは『世界管理者』だよ」

——思想、存在概念、最終目的、その全ては、世界安定の為にある。本拠地はイギリスのロンドンにあり、半径一キロ四方に渡って半円球型の人払いの結界を張り巡らせてある。

「目的と言ったら、鬼人の排除に当たるね。その存在は、世界安定を維持する為の不要な要素——まあ、有り体にいえば邪魔な存在だと彼らは定義してるんだ。」

鬼人を殺す事が星礼会の下部要員であるボク達封殺者の役目で、安定を保つ為の手駒ってわけ。そして、世界管理者と名乗るだけあって、世界各国の政府連中とも交流が深い。政府の上層部に位置する人間は、星礼会は勿論のこと、封殺者の存在も認知しているだろうね。さらに言えば、封殺者を育成する機関である施設への資金援助も世界政府が担っている。星礼会という一組織だけじゃあ、世界中に在る研究設備を整えるのは不可能だからね」

カインはそこで一息つき、紅茶を喉に通した。

千雨は「うーん」と、難しい顔をして低く唸った。

「極論で言うと、私達は星礼会の必要要素と判断して良いッスか？」

千雨は鏡夜に視線を向けて訊ねる。しかし彼は目を逸らし、黙り込むだけだった。

「チサメちゃん。鏡夜が黙り込むのは、彼らの考えには興味がないっていう意思表示だよ」

皮肉げに唇の端を吊り上げながらカインは言った。鏡夜もその言葉に反論できないあたり、事実当たっているのかもしれない。

「それと、確かにチサメちゃんの言葉が真実だけどね、ボク達はそ

これから理解するという行為に至るまで相当な時間を有したよ。――

ねえ、キヨウヤ？」

「知るか。俺に聞くな」

反応はにべもない。カインはその様子をニコニコと面白げに見据えながら、「じゃあ、最後はキヨウヤだね。とびつきりなヤツをお願い！」と、大袈裟に両手を開いて自己紹介を促した。

「……千堂鏡夜。十七歳。日本の施設で育った」

鏡夜の端的な自己紹介に、カインは不満があるのか「えー、それだけ？」と、唇を尖らす。

しかし、鏡夜にとってはそれだけの言葉で全てが事足りていた。他に言う事もないし、他人に個人情報を教えなくなかったからだ。

「ま、いつか。じゃあチサメちゃんに『コードナンバー』の説明をするね。空港では言いそびれたから」

「カインくんが奇襲を繰り返したからツスけどね」

無表情で悪態をつく千雨に、カインは「まあ、それは置いて」と腕でジェスチャーをした。

「簡単に言うとな、コードナンバーっていうのは階級クラスのこと。あ、でも地位とは無関係だよ」

『コードナンバー』――。有り体にいえば、それは封殺者の戦闘力を指す。

封殺者と成った時、最初に該当する階級クラスは50である。その段階から、鬼人の抹殺数、戦闘能力を『上者エルダー』――つまり観察者が記録し、星礼会に報告書を提出する。その報告書によって、星礼会上層部がその封殺者の実力を吟味し、戦闘レベルを割り出すのだ。

「50から始まって、鬼人の抹殺や任務を果たすことによって40、30と実力が上がっていくんだ。最終到達地点は『零階級ゼロクラス』ってされてる。そして、零階級の領域に踏み込んだ封殺者は、その戦闘理論に似合った称号が授与されるんだ。

……でもそうになると、チサメちゃんの階級ってどの位置になるんだろうね。魔術家系に生まれた人間だったら、魔術師の部類に属す

るのが普通だけど、封殺者でもある。うーん……」

腕を組んで考え込むカインは、彼女の階級に関して納得がいつていないようだ。

「50で良いんじゃないツスカ？　だって私、封殺者に成ってからまだ一度も鬼人を殺してないんスから。というか、面倒だっただけなんスけど」

半眼をさらに細くして、千雨はしれっとそんな事を言った。

（……こいつは、封殺者に成るべきじゃなかったんじゃないだろうか）

鏡夜は心の底からそう思った。鏡夜からすれば、鬼人を殺さない封殺者など、封殺者ではないという倫理観に基づいた考えだった。

「で、二人の階級はどれ位なんスか？」

鏡夜とカインに視線を巡らせ、千雨は尋ねた。

「ボクは零階級のナンバー06だよ。称号は、一応『射貫^{いぬ}く銀』っていうのを授与されてる。……まあ、そんなモノを貰ったところで何かが変わるわけじゃないけどね」

「鏡夜くんは？」

「……ナンバー01。称号は『刹那』だ」

そして、鏡夜もカインと同一の考えだった。称号など与えられても、どうなるものではない。ただ、強くなったという認識しかできないのだから。

「じゃあ、一番強い封殺者は鏡夜くんって事ツスカ？」

「……ナンバー01とはいえ、それは日本を限定しての話だ。それに、その例えは封殺者の部類での話だろ。魔術師を類に加えると、俺なんか下位者もいいところだ」

鏡夜の言い分は、事実その通りであった。

零階級の封殺者といえども、それは魔術師の領域には程遠い。

事実、星礼会の定めた基準では、『魔術師>封殺者』という不等式が成り立っているのだから。

「さて。自己紹介も済んだし、そろそろ現状の把握に努めようか。

キョウヤ、何があつたの？」

「……お前達、星礼会から任務内容の書類を渡されていないのか？」
「はいッス。とりあえず『日本の千堂鏡夜と合流しろ』と、こんなところッスね」

「こんなのボクでも初めてだよ。書類なしで現地に赴くなんてね。
ま、上層部かれらの思惑なんて理解できる訳がないから、別にいいけど」

「それに関しては同意できるな。——とりあえず、順序に沿って説明するぞ」

そうして、鏡夜は昨日の出来事——そして天美戒から掴んだ情報を二人に話し始めた。

「——ふうん。興味深いね。コア、裁我、そして星礼会を潰す、か」
カインはテーブルに肘を立てて、両手の五指を組んだまま思案している。千雨も、腕を組んで「うーん……」と唸っていた。

「——で？ キョウヤはどう思うの？」

「あいつの考えは理解に達しない。星礼会を潰すのは不可能だ」

「そうじゃなくて。ボクが言いたいのは、その裁我ってヤツが星礼会に反逆する理由だよ。そいつの基本詳細は知らないけど、原因がなきゃ、そんな馬鹿げた行動は普通起こさないと思うけどね」

「そうッスね。魔術論理学の博士号なんて、そう貰えるものじゃないッスよ。だけど、コアを創り出すために、二年前まで関西の施設で研究を行っていたという可能性も捨てがたいッスね。なら、原因は二年前を遡るといふ可能性も生まれてくる訳で……頭が痛くなるッスね」

「じゃあ」と、カインは人差し指を立てて、

「話は変わるけど、コアで性質変化された鬼人の戦闘力ってどの程度なの？ キョウヤ、戦ったんでしょ？」

「戦ったのは確かだが、あれは戦闘といえない。あの鬼人は、行動という行動を見せなかったからな」

昨晚あの廃ビルで邂逅した鬼人は、鏡夜の行動に一切の反応を見

せなかった。まるで、自分から殺されるのを望んでいるかのようだった。

「おそらくだが、あの鬼人は不完全に性質変化されたと俺は考えている。あの鬼人には、戦う直前まで少なからず負邪が残っていた。完全に性質変化を終えたのなら、一パーセントでも負邪が身体に残留しているのは辻褄が合わない」

「そうだね。魔術においても、性質変化っていうのは遅くとも五分の時間を有するって論理をボクも施設で習ったよ。なら、その鬼人は実験体ってところかな」

カインの推測に、鏡夜と千雨は同意するように頷いた。

「まあ、彼の目的はひとまず置いておこう。問題はコアだね。キョウヤ、持ってるんでしょ？」

「ああ」

鏡夜はズボンのポケットに手を潜りこませ、それを取り出す。

直径三センチほどの黒塊こっかいは、未だ薄暗い光を放っている。それはつまり、裁我の魔力が残留しているという事を示していた。

「——へえ。よくこんな魔石を創り出したものだね」

カインと千雨は、テーブルに置いたコアをじっくりと見据え、魔力性質を分析していた。

「視ての通り、魔力が融合されてある。あいつは精質論理を応用して、鬼人を魔力で性質変化させたということだ」

「素材は判らないッスけど、結構硬そうッスね、これ」
指でコアを摘み、ジツと見据える千雨。

「……………」

そんな最中、カインは目を細めて、無言のままコアを見つめていた。

「カイン、どうした？」

突然黙り込んだカインに、鏡夜は訝しげに眉を顰めた。しかし、カインはすぐにいつも通りの笑みを浮かべる。

「何でもないよ。——じゃあ、そろそろ行こうか」

突然、立ち上がって「うーんっ！」と大きく背伸びをするカイン。その、完全に何らかの思惑が宿っている碧眼が、鏡夜を定められる。「……どこにだ？」

怪訝に問う鏡夜に、カインの笑みは皮肉げに吊り上がった。

「病院」

——それだけで。

その言葉だけで、鏡夜は否応なしに彼女の事を思い出した。

「病院だよ。有力情報を握っているかもしれない、ミナト・トオチカの入院している病院。知らない筈がないよね、キョウヤ？」

「……どこで聞いた？」

「質問を質問で返さないでほしいな。じゃあ、まずは君の質問から答えるでしょう。」

ミナト・トオチカ、十七歳。黒堂学園二年A組所属。裁我に襲われた確率、大。現在、K大付属総合病院に入院中。これくらいの情報、さつきカイさんと会った時に教えてもらった。そして、君が唯一、心を許した相手でもある。——違つかい？」

「……………」

「びつくりしたよ。日本最強の封殺者が、一般人の少女に心を許すなんてね。でも、最終的には彼女を遠ざけた。その判断は正解だよ。ボク達は一般人の相手なんかしている暇はない。そうでしょ？」

「……………黙れ」

「鬼人を殺す為だけに生まれ、生きて、そして死んで逝く。そんな運命を背負っているボク達が、正常な人間と関われる訳が——と、何のマネだい？」

ほぼ無意識の内に、鏡夜はカインの首の動脈に手刀を突きつけていた。

「——ああ、その通りだ。お前の言っている事は、寸分違わず当たっている」

言葉ではそう言い返すが、反面、鏡夜の手刀は、今にもカインの動脈を切り裂こうとしていた。

——カインに殺意を抱いた事は今まで幾度となくあったが、今回は、今だけは——

ホントウに、殺してやりたいと思ったのだ。

「はい。そこまでッス」

突然割って入った千雨は、鏡夜の腕を掴み強引に首元から遠ざけた。

「チーム同士での喧嘩はさすがに私も見てられないッスね。……

カインくんも度が過ぎるッスよ」

カインに首を向けて、千雨は咎める様な視線を送った。

「はいはい、分かったよ。まあ、今回はボクが悪かった。でもね、キョウヤ。これだけは覚えておいて」

そこで、カインは険しい表情に変わり、鏡夜に忠告する。

「ボク達は、そんな行為に走ることは許されない」

「……ああ」

顔を背けて静かに返答する鏡夜。その言葉にカインは満足したのか、いつも通りの笑みを浮かべた。

「じゃあ行こうか！ 善は急げって言うからね！」

再会、そして……

鏡夜の家を出た三人は、その場所に向かって歩みを進めていた。

鏡夜は学園に「風邪を引いた」と連絡を入れた。その電話の最中、カインは耐えられずクスクスと笑いを溢していたが、別段気にする必要はなかった。

「日本はいつ来ても良い国だね。イギリスなんかよりも、こっちの方が断然落ち着くよ」

街の中枢にある繁華街を歩いている最中、カインはテンションが上がったようにスキップなんかをしていた。

生粋のイギリス人であるカインは、過去に一度、任務で日本に訪れたことがあった。その際、鏡夜はカインをパートナーとして仕事を行ったのだ。

以来、カインは日本の文化——とはいっても、日本のゲームや漫画だけだが——にえらく関心を抱いたらしい。流行のゲーム機や日本で有名な漫画などを尋ねられた鏡夜だが、そのような事に興味が無い彼が教えられる訳もなかった。果ては任務の終了後に漫画喫茶に連れていかれる破目にもなった。

「鏡夜くん、鏡夜くん」

と、ぼんやりとした表情でその頃を思い出していた鏡夜だが、服の袖をちよいちよいと引っ張られて横目で千雨を一瞥する。

「……名前で呼ぶなよ」

「名前くらい良いじゃないッスか。減るものでもあるまいし」

並んで歩いている千雨は、前に出て、下から鏡夜の顔を覗き込んだ。

「私の事はちーちゃんが良いッスよ。それで平等ッスよね？」

「そう呼ぶ事に意味はない」

「意味ならあるッスよ？ 仲間ならコミュニケーションを大事にしないといけないッス」

——仲間、か。そんなモノはいらないが、今回限りの付き合いだ
と考えれば別に気にする必要は無いのかもしれない。

「分かった。——千雨」

「おお、初めて鏡夜くんから名前で呼ばれたツス！」

名前で呼ばれた事がよほど嬉しかったらしく、千雨は初めて微笑
んだ。——しかし、今の鏡夜からすれば、その純粹無垢な微笑は苦
痛でしかなかった。

「鏡夜、疲れたよー。まだ着かないのー？」

先頭に行くカインがそんな愚痴を漏らす。鏡夜は手にしている地
図を広げて「あと三十分くらいだ」と返答した。

K大付属総合病院は、堂崎市の西区——山地付近の場所に位置し
ている。周囲は豊かな緑で囲まれており、その土地面積も広大であ
る。病院に着くまでは多少の坂道を登らなければならないが、この
病院に訪れる人々の大半は町の中核から特別バスに乗車する。なの
で、鏡夜達のようにわざわざ坂道を登ってくる必要はない。

鏡夜は特別バスの存在を知らなかった。違う町から来た千雨は勿
論のこと、イギリスから訪れたカインも知る筈がない。故に、こう
して遠回りに傾斜の高い坂道を登っていた訳だった。

坂道を登りきり、鏡夜はその病院を見上げた。

（ここに、遠近が入院している——）

「何してるの、キョウヤ？」

正門の前で立ち止まる鏡夜に、訝しげに声を掛けるカイン。その
言葉でハッと我に返った鏡夜は、先導するカイン達の後を追った。

正午に近づきつつある時間帯のためか、ロビーにはそれなりに人
がいた。

鏡夜はフロントにいる受付の女性に、遠近湊の面会に訪れたと事
情を説明する。

一枚の用紙に、面会時の必要事項をペンで記入した後、三人は「
第三棟の402号室になります」と案内を通された。

「……」

——402号室の扉の前で立ち止まった三人。ふと、鏡夜は扉の横にある名札を見た。

『遠近湊』の名札しか貼られていないという事は、個室なのだろう。

鏡夜は、ノックを二回する。

「どうぞ」と、控えめな声が返ってきた。

——扉を開ける。

そこには、一週間前に別れた遠近湊がいた。

ベッドからゆっくりと身を起こした湊は、無表情とも取れる顔で、こう言った。

「……あの、どちら様でしょうか？」

——と。鏡夜の記憶に残っているあの笑顔が、ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

「……病室を間違えていませんか？」

除々に戸惑いの表情へと変化する『遠近湊』。

「（どういうこと？ キョウヤの事、知らないみたいだけど）」

耳打ちしてくるカインの疑問には答えず、鏡夜は部屋の端に置かれてあるパイプ椅子を手で引き寄せ、腰を下ろした。

「——俺は千堂鏡夜っていうんだが……あんた、知ってるか？」

緊張させないよう、できる限り静かな口調で問い掛ける鏡夜。

しかし、湊は首を横に振って「……知らない」と返答する。

「——そうか。あんた、何で入院しているんだ？」

問い掛けると、湊は顔を少し俯かせて、眉を寄せた。

震える唇で、今にも泣き出しそうな表情で、湊は口を開いた。

「……最初は分からなかった。気が付いた時には、このベッドにいたの。でも、何でこんな事になったのか分からない」

「……そうか」

——遠近にはもう、俺に関する記憶は無いのか。

それを悔やんでいる自分がいた。そして反面、その事実を喜んで
いる自分もいた。

——何故か、泣いてしまいそうになる。

「……二、三。質問に答えてもらってもいいか？」

「うん」

「あんた、病を持っているのか？」

その問いに、湊は無表情で否定した。

「ううん。私は住宅街で倒れていたらしいの。お腹には、刃物みたいな物で切られた痕がある。それで、私が倒れている所に偶然通り
かかった人が、警察と病院に通報してくれたみたい」

「運ばれたのは、何時頃だ？」

その問いに、湊は無表情で返答した。

「お医者さんの話だと、昨日の夕方頃」

「じゃあ、最後の質問だ。腹部以外に、痛む所はあるか？」

その言葉に、湊は微笑んで返答した。

「ありがとう。心配してくれて。でも、お腹以外に痛む所は無いよ」

——二人だけの教室で雪を眺めた時の笑顔が、ここにあった。

「そうか。それなら良かった」

だから、鏡夜も笑顔で返した。

それは、湊の目にはどう映っただろうか。

それはきっと、笑顔とはいえない、ぎこちない笑顔だったのだろ
う。

パイプ椅子から立ち上がった鏡夜は、湊に背を向けた。

「ありがとう。安静にして、早く退院しろよ」

片手を上げて、鏡夜は病室を後にした。

「最後の別れは済んだのかい？」

病室を出ると、カインが皮肉な笑みと言葉を以って鏡夜を出迎えた。

「……カインさんの皮肉も、ここまで来るとむしろ清々しいツスね。少しは鏡夜さんの気持ちも考えた方がいいと思うんスけど」

「気持ち？　ボク達がそんなモノを持つてどうするの？　感情なんて、ボク達には不要なモノだよ。そうでしょ、キョウヤ？」

「ああ、感情はいらない。全ては終わった。標的も定めた。だから――」

千堂鏡夜は、殺す為に生き続けるだけだ。

『ありがとう』

そう言い残して、彼は病室を後にした。

――何かが、脳裏に過ぎった。

同じ言葉を、湊は以前、聞いた気がしてならなかった。

――でも、それはいつだっただろうか？

彼と話していると、密かに、湊は『嬉しい』という感情を抱いていた。

――でも、それはなぜ？

どうして、そのような感情を抱いたのだろう、と湊はベッドの中で考えた。

彼は、言っていた。

『千堂鏡夜っていうんだけど、あんた知っているか？』

あの言い方が示す意味――おそらく彼は、自分の事を知っていたのだ、と憶測する。

――本当は「知らない」ではなくて、「思い出せない」と言う方が確かな言葉だったのかもしれない。

そう口にしていたら、もしかすると、彼は自分との関係を教えてくれていたのかもしれない。

それが、どんな些細な事柄でも、思い出せたなら、この不安で埋め尽くされた心は、すっきりしていたのかもしれない。

——かもしれないばかりだ。

それは、想像するしかできないけれど。

——でも、また来てくれないかな、と湊は思った。

三人が自宅のマンションに着いた頃には、既に午後六時半を回っており、橙の色彩が空を覆っていた。

この空が完全な闇夜に変貌するまで、残り四時間といったところか。鏡夜はマンションの廊下を歩きながら、空を見上げていた。

カインと千雨の強引な要望で、二人の下宿先は鏡夜の家となった。……確かに、三人が寝られるだけのスペースはある。しかし、女性である千雨まで「意義なし」とはつきり言うとは、さすがの鏡夜も思っていないかった。

「ただいまー！」

「ただいまツス」

……この二人。何だかんだで考えている事が似ているのではないかと、鏡夜は小さなため息を漏らした。

「カイン。先に言っておくが、部屋を荒らすなよ」

「む、そんな事する訳ないでしょ。英国紳士だよ、ボク」

「英国紳士は、人の家の冷蔵庫を勝手に開けて牛乳をラッパ飲みしないと思うがな」

「ぷっはー！ え、なに？」

「……もういい。とりあえず椅子に掛けてくれ。今後の事について話し合うぞ」

鏡夜の促しに、二人は頷いた。

「さて、まずはコアについてだね。今現在把握している事は、『鬼人の体内に埋め込まれている』。『コアがある限り、肉体は消滅しない』。これくらいかな」

前回と同様に、今回もカインが場を仕切ることとなった。

鏡夜もそれに反対する理由はなかった。カインは話の流れ、結論に至るまでの順序の組み立て方が常人より優れていると知っているからだ。

「じゃあ、正逆の論理で考えるとこうなる。肉体よりも先に、体内にあるコアを破壊してしまえばいいんだ。そうすれば、鬼人を司る魔力が消滅して存在は失われる。と、これがボクの推測なんだけど、試してみる価値はあるね。キョウヤ、コア出して」

「ああ」

鏡夜はテーブルにコアを置いた。薄暗い光を放つ魔石には、未だ裁我の魔力が宿っている。

「結構硬そうだけど、キョウヤ。壊せる程度の魔力量でやってみて」
首肯した鏡夜は、体内に蓄積してある体内魔力粒子^{イナ}を右手に収束させる。

次に、『練成』を行う。脳裏で思い描く心象は、コアを破壊できるという強大な陽性意志力。コアを破壊するという意志は、右手に宿る体内魔力粒子^{イナ}を格段に活性化させていく。

「——やるぞ」

「いいよ。ちゃんと視てるから」

カインに確認を取った鏡夜は、指でコアを摘み上げ、コインを弾くようにピンツ、と宙に浮かせる。

——刹那の瞬間、鏡夜は魔刀を横一文字に振り切った。

パキンツ！ とコアは中空で綺麗に両断され、テーブルに転げ落ちた。

その一部始終をしっかりと視ていたカインは、ニコリと笑う。

「うん。視た結果、やっぱり砕けると同時に魔力は消失するようだね。で、今キョウヤが収束した体内魔力粒子^{イナ}の量だと、ボクでも破壊は可能だ。チサメちゃんはどう？」

「うーん、どうツスカね。何ともいえないツスけど、たぶん大丈夫ツスよ」

曖昧に肯定する千雨だが、二人は破壊できる自信があるように窺えた。

「まあ、試してから初めて判ることもあるからね。次は、コアが身体の中の箇所に埋め込まれているかだ。キョウヤ、このコア、体のどの辺りにあったの？」

「左心室——人間でいう心臓の部分だ。お前の言った取り、これを引き抜いたら肉体は消滅したぞ。おそらく、同化した物質が体内から乖離したからだろうな。」

それと話は変わるが、『遠近湊』の病室で一つ判った事がある。彼女を襲ったのは、間違いなく裁我だ」

断言する鏡夜に、千雨は「その根拠は？」と訊ねた。

「傷を負った箇所を視たが、裁我の体内魔力粒子が腹部に残留していた。あれは、俺が初めて裁我と遭遇ったときに感知した魔力性質同一だった。……率直な疑問でいうなら、何故、一般人である『遠近湊』を襲ったのかだ」

「じゃあ、関連性は今の時点では一つツスね」

「……どういう意味だ？」

「湊さんが記憶を失っている事について、鏡夜くんはどう思っているんすか？」

千雨の言葉に、鏡夜は押し黙った。

——そんな事は、もう自分には関係ない。彼女には何の関心も抱いていない。遠近湊の話を持ち出したのは、裁我に関する情報がほしだけなんだ、と鏡夜は自分に言い聞かせる。

そんな鏡夜の思惑を知らずに、千雨は淡々とした口調で話を紡いだ。

「今回の場合、裁我さんに襲われたショックによる一時的な記憶混乱という例が挙げられるツスね。——腹部に傷跡。これは真正面から襲われたという事に繋がるツス。普通、一般人なら恐怖心に心を囚われ、背を向けて逃げ出し、背中辺りに傷を負うのが妥当な線ツス。なら、湊さんは逃げ出せなかったのか、傷を負う以前に何らか

のショックを受けてしまった。さらに裁我さんには、一般人である湊さんを襲う動機があった。こんなところッスかね」

「……千雨は、遠近湊と裁我に接点があるって言いたいのか？」

「まあ、これは私個人の憶測ッスけど。カインくんはどう考えているんスか？」

千雨は、カインに視線を送るが、

「……………」

今朝と同様に、またしてもカインは黙り込んでいた。顎に手を当てて、静かに黙考を続けている。

「……ねえ、キョウヤ。その裁我ってヤツ——」

ピシィンッ

しかし、カインが言いかけた言葉は、突如現れた『魔力反応』によつて、自然と漏れなくなった。

「——えらくタイミングがいいね」

不敵に笑うカイン・エレイスは、その体に禍々しい殺気を宿している。

「ク々の殺しッスか。何か緊張してきたッスよ」

面倒そうに呟く工藤千雨も、同じく。

——そして、千堂鏡夜は。

「場所は河川敷公園。数は二つ。それじゃあ、俺達が俺達でいられる為にも——」

——敵を、殺しにいくか——

宵闇の殺し合い

三人は、マンションの屋上にいた。

鏡夜の住んでいるマンションの屋上は随時一般開放されている。

マンションの住人は滅多に使用しないのだが、鏡夜はここで夜空を見るのを個人的に好んでいた。

鏡夜は、振り返ってカインと千雨の様子を確認する。

「ボクは準備オツケーだよ」

ニコリと笑うカインは、右手に大型のアタッシユケースを握っている。

「私も大丈夫ッスね」

抑揚なく言う千雨の左手には、刀身が三十センチ程の短刀が握られている。先程、部屋でケースから取り出した物だ。柄は木造、鍔は無く、両刃の直刀だった。

二人の戦闘準備を確認した鏡夜は、再び前に向く。

「目的地まで先導する。着いてきてくれ」

言って、鏡夜は高く跳躍した。四秒後には彼の姿は見えなくなる。

「凄いッスね、鏡夜くん。一度であれだけ高い跳躍を行うなんて」

「——白々しいね、チサメちゃん」

「何がッスか？」

「ま、いいけど。じゃあ、ボク達も行くよ。見失っちゃうからね」

言って、カインも高く跳躍した。

「……ま、判ってるッスよね」

そんな言葉を呟き、千雨は二人を追った。

民家の屋根、ビルの屋上を着地地点にして、三人は跳躍を繰り返す。

封殺者は、殺人技術の徹底のみならず、『施設』の研究者が作り出した特殊な薬物を投与される事により、身体能力の向上が施され

ている。

封殺者の人種に値する者は、身体能力だけならば魔術師を凌駕しているのだ。

「キョウヤ〜！ アタツシケース持つてるボクの身にもなつてよ
ー」

跳躍の途中、カインがそんな愚痴を漏らしていたが、鏡夜は無視して跳躍の速度をさらに上げた。

今は、そんな事に気を配っている暇はない。何故なら、『あれ』の魔力反応が増加しているからだ。

二十回ほど跳躍を繰り返し、河川敷公園に辿り着く。

先日、この場所で鬼人を殺した事を鏡夜は記憶していた。

……しかし。今、対峙している鬼人は似て非なる存在だ。

——二体、いた。

へえ、と感嘆の息と漏らすカイン。

「裁我ってヤツ、今回は成功したみたいだね」

殺気どころの話ではない。そこにいるのは、強大は魔力反応を持つ性質変化された鬼人だった。

そして、『普通』の鬼人と異なる点が一点存在するのもまた事実。それは鬼人の眼の色にある。『普通』の鬼人は、毒々しい紅色だ。

——だが、その色も、今となつては透き通った蒼色だった。

「蒼つて事は、裁我さんの魔力性質を表しているんスかね？」

独り言のように、千雨は小首を傾げる。

「負邪は感じられない。有るのは、魔力だけだ」

鏡夜は、その事実を一瞬で見抜いた。

——蒼い瞳が、三人を捉える。

「じゃあ、そろそろ始めるか」

鏡夜は小さく呟く。

（俺の存在理由を、証明する為に——）

しかし、大きな意味を込めて。

「殺害開始だ」

距離は二十メートルほどだろうか。その間合いを除々に詰める鏡夜の疾走は、以前と変わらず流麗だった。

「じゃあ、ボクも」

カインはアタッシュケースを宙に放り投げた。自然とロックが外れ、その武器が姿を現す。

「日本で使用するのには久しぶりだな」

漆黒の柄を中空で掴み、そこから繋がれている恐ろしく長い白銀の鎖がガシャアン、と地に着いた。

その先端には、鋭利に尖った十五センチの刃。殺す為だけに鍛えた、カイン・エレイス専用の殺人武器だ。

柄を握り締め、カインは体内魔力粒子^{イナ}を流し込む。

「よろしく頼むよ、 チェイン」

「じゃあ、私も」

言つて、千雨は両の半眼を見開いた。

黒瞳が見据えるのは、ただ一点——鬼人の姿のみだ。

これが、戦闘時に気を引き締める工藤千雨特有の自己暗示だった。では、私は先に参ります」

千雨の口調は、普段のそれとは完全な別物へと変化していた。静かな——それでいて殺気を含めて言葉を発する彼女は、鬼人を目指して疾走を開始した。

「……変わるものだね、人間って」

いきなり口調が変わった千雨に呆然するカイン。しかし、そんな言葉を口走ったカインも数秒後には援護の準備に回った。

二体の鬼人は、鏡夜が十メートルほどに距離を詰めた時に分散し

た。

散った鬼人の片方は高く跳躍し、鏡夜の後方から疾走している千雨目掛けて落下した。

除々に間合いを詰める鏡夜だが、一方の鬼人は動じなかった。鏡夜の先手を窺っているつもりなのだろうか……。

（——だが、何かある）

鏡夜は、鬼人の一挙一動も見逃すつもりはなかった。殺しにおいて、相手の微細な動きの意味を理解できなかった瞬間、必然的に死は訪れると知っているが故。

鏡夜は間合いを一メートルに詰めた時、一瞬で身を沈める。腰の運動エネルギーを最大限に生かし、右手に体内魔力粒子^{イナ}を流し込んだ。

ダァンツ、という音を立てて、右脚の踏み込みを炸裂させた。

鏡夜にしてみれば、静から動への移り変わりは0・5秒もあれば充分だった。

充分なタメを保ち解き放った刺突の狙いは、コアの埋め込まれている確率が高い左胸部だ。まずは、その一点を破壊する。

しかし、鬼人はその瞬間的な攻撃をいとも簡単に捌いた。体を左に開く動きは、武術の動作にも近似している。

そして鏡夜には、刺突の動作による慣性が生まれ、一瞬の隙が生じた。

その一瞬の間に、鬼人は右腕を変態させる。

猫の爪が多大に伸びた時は、このようになるのだろうか。それは、五本の刀を片手で持っている事と同一だった。

鏡夜の無防備な背中に、鬼人は五本の『爪』を斜め上から振り下ろす。

しかし鏡夜は、腰を限界までを捻り、後ろ回し蹴りで対応した。

鬼人の『爪』と、鏡夜の後ろ回し蹴りが、無音の音と同時に拮抗した。鏡夜の脚が切り裂かれないのは、隙が生まれた瞬間、右手に

収束した体内魔力粒子を一瞬で蹴り足へと移動させたからだ。

しかし、地に足が着いていない鏡夜と地に足がついている鬼人。踏み止まれる点で言えば、圧倒的に鬼人が有利だ。

咄嗟の後ろ回し蹴りによる防御を取った鏡夜は、自身から軋む脚を弾き、五メートルほど後退した。

「……今までは、違うつて訳か」

実感は、まさにその通りだった。この存在は、鬼人であつて鬼人ではない。ならば、今まで行ってきた基本的な殺害手順はほぼ切り捨てるのが無難だろう。

鏡夜は、思考を別の殺害方法に切り替える。

神速の踏み込みで、再び鬼人との距離を縮め始めた。

「鏡夜くんは……大丈夫そうですね」

鏡夜の様子を横目で窺いながら、千雨は鬼人の『爪』を短刀で防ぐことに徹していた。

この鬼人の動きは、今まで殺してきたものとは違う。千雨も、その事実にはとうに気づいていた。

戦闘力の増加は確かに成功したようだ。その証拠に、未だに鏡夜は鬼人を殺せていない。

そして、それは彼女にも言える事だ。

久方ぶりの戦闘とはいえ、身体が鈍っているようには思えない。

（……確かに、『強い』の部類には入りますね）

しかし、千雨にとつてはそれだけの認識でしかなかった。強いという基準などはどうでも良い。彼女は、後手に回っている時点で事実上、この鬼人よりも『弱い』という事に繋がると考えていた。

だが、それは彼女が戦闘力を制限しているだけなのだが。

「……さて。そろそろ、貴方を殺しましょうか」

その言葉と、鬼人の右腕が断ち切られたのは、ほぼ同時だった。

「意志力、85%」

呟いた千雨は、いつの間にか鬼人の五メートル後方に佇んでいた。鬼人は一瞬動きを止めた。何をされたのか理解できていないように、断ち切られた右腕を見つめる。

「工藤一族、第一級家宝——朱風^{あけかせ}」

そんな言葉を発する千雨は、ゆっくりと振り返った。

「魔力で性質変化されたとはいえ、この朱風の前では全てが無意味です」

今度は左腕を『爪』に変態した鬼人は姿を消す。

一瞬で千雨の眼前に移動した鬼人の『爪』による攻撃は、しかし朱風によって容易く防がれた。

「一瞬の移動とはいえ、魔力の痕跡は残留するものです。それを辿れば、防ぐことなど造作もない」

軋みを上げる『爪』と朱風。しかし、千雨はまたしても一瞬で切り落とす。

ヒュオンと、疾風の如き速度で再び鬼人の後方へ移動する。

「朱風を扱う際、必要なモノは『陽性意志力』のみです。自身の殺すという意志が相手に勝っているのなら、朱風はその意志に応えてくれます」

スパアンと、最後に鬼人の両脚が一度に切断される。

「朱風に『意志』を伝達させる。貴方が『精神的弱質』から『精神^{メンタル}硬質』に性質変化したとはいえ、私が四年間、この短刀に伝達させてきた『殺人意志という精神^{ハードメンタル}硬質』に勝ることは決してありえません」

両腕、両脚を断ち切られ、首と胴体だけになって地面に倒れた鬼人に歩み寄る千雨。

「——コアは、そこですか」

左胸部から感じる魔力反応。

千雨は朱風を逆手に握り、その箇所には振り下ろす。パキインッ、と何かが砕け散る音がした。

それは紛れもなく、コアの他にない。

「鬼人ごときが、『魔術師』に敵うなどとは思わないことですね」
冷然と告げる千雨の言葉は、夜の空へと消え行く鬼人には届いていなかった。

「……なにやってるんだよ、キョウヤ……！」

カインは多少なりとも苛立ちを覚えながら舌を鳴らした。

今、鬼人と闘っている鏡夜は確かに有利な状況にある。体内魔力^イ粒子を収束した魔刀によって繰り出す猛撃に、鬼人は十分も後手に回っていた。

しかし、カインはその戦闘自体、納得がいかなかった。

鏡夜ならば、戦闘力が増加した鬼人だとしても十分もあれば殺害に成功している筈なのだ。カイン自身、あの鬼人が『強者』の部類に属しているという事は理解している。

——しかし、どれだけ強かろうが、鏡夜が戦闘において十分も長引かせる訳がないとカインは知っているのだ。

鏡夜は、未だ自身の本質を解放してはいない。だが、それにしても、これは異常事態だった。

それは、鏡夜の戦闘理論にあった。

彼が戦闘において狙う箇所は、人間であれ、鬼人であれ——必ず、人体機能停止箇所なのだ。体内魔力^{イナ}粒子を身体のあるあらゆる箇所に収束し、一度でも一つの箇所を断ち切った瞬間、敵の死は必然的に訪れる。

それが千堂鏡夜の基本術であり、極限まで鍛え上げた自己戦闘理論だった。

しかし今の鏡夜は、手数を増やし——さらに体内魔力^{イナ}粒子の収束量すらも曖昧である——猛撃を放っているだけだった。

それは、戦闘において決して悪い行為ではない。敵の戦闘理論を探るのは殺し合いにおいて基本中の基本だ。

しかし、カインはそれでも納得いかなかった。

鏡夜が鬼人を殺す事に十分も時間を費やすなどありえない。それが頭から離れない。

そして、それが意味するのはただ一つだった。

（もしかして……）

カインが辿り着いた答えは、当たらずとも遠からずの位置にあった。

鏡夜は、敵を殺す事に戸惑いを感じている。

その証拠に、鏡夜は鬼人を殺せていない。

こんなの、本当の彼ではない。

彼が——迷う訳がない。

「……話は後々聞くとして、参戦しようか」

軽いため息を漏らして、カインは、チェインに体内魔力粒子を増幅させた。

「キョウヤツ！ 理論B！」

端的に叫ぶ。だが、カインはそれだけの意思表示で伝わると確信していた。

そして、カインは自身の意志力をチェインに伝達していく。

（——80、95……100%調和完了。魔力性質——誤差0%）
地についていたチェインが、蛇のように無気味な動きを表し始める。先端の鋭利な刃が宙に浮いた。

この瞬間、カインとチェインは『繋がった者』となった。

『繋がった者』——。それは、星礼会が封殺者の為に造型した『魔導器』が術者の魔力性質と100%調和した状態を指す。

「——さて。後は、キョウヤの行動次第かな」

カインの叫ぶ声が届いた。それはおそらく、自分の行動に不可解な点があった事を見抜いての言葉だろう。

事実、鏡夜はその事を自覚していた。

（あの時と同じだ……！）

ギリッ、と奥歯を噛む。

そう。今の鏡夜は、あの廃ビルで鬼人を殺そうとした時と同じく、身体が思うように動いてくれない状態に陥っていた。

殺そうと思えば、すぐに殺せるのだ。

だが、その意志とは正反対に身体が否定している。

『敵を殺す』という自己の意志が、『敵を殺すな』という本能に抑圧されている感覚だった。

まるで、自分の身体を何かに支配されている様で恐怖心まで芽生えてくる。

(……理論B)

カインは、自分の行動の矛盾に気づいている。そして、それを判断してこそその理論Bだった。

確かにその戦闘理論ならば、おそらく、この鬼人を一撃で殺せる。文字通り、瞬間的な殺害へと昇華できるだろう。

しかし、自身が危険を伴う確率が高いのも事実だ。

(……だが、やるしかない)

鏡夜は、魔刀による猛撃を一端中止して、五メートル後退した。

そこからは簡単だ。一瞬で攻守が逆転し、今度は鏡夜が後手に回るようになった。

鬼人が変態させた両腕の『爪』。その連撃を紙一重で避けながら、鏡夜は戦術を悟られないよう、その場所への誘導を開始した。

横目でカインを一瞥する。

それは端的なアイコンタクトだった。カインも、すでに準備は完了しているのだろう。彼の武器——チェインから、強大な量の体内魔力^{イナ}粒子を感じ取った。

その位置に誘い込んだ鏡夜は、鬼人の連撃を避けながら、背後からの『死』に全神経を集中させた。

——そのタイミングは一瞬だ。

しかし逆に言えば、その一瞬を見極められなければ鏡夜は死ぬ。

そして——その瞬間は訪れた。

背後から襲い掛かる『死』を感じ取った瞬間、鏡夜は、瞬時に真

上へと跳躍した。

ドシュッ！

そのわずか一拍後——高速で迫るチェインの先端の刃が、鬼人の胴体を勢い良く貫通した。

位置関係による奇襲。鏡夜の背後十メートルにいたカインを、鬼人は鏡夜の姿により視認できなかった。

その結果が、これだ。

あらかじめ、貫く箇所を特定しての奇襲は、完全にコアを破壊させた。

しかし、この連携攻撃は鏡夜とカインにしか行えないだろう。跳躍の瞬間が0・5秒でも遅ければ、鏡夜の身体が貫かれてしまうのだから。

そして、先の攻撃——チェインの刺殺速度は、鏡夜への遠慮など微塵もなかった。

それは、カインが「鏡夜なら避けられる」と確信していたからだ。それ以上に、「鏡夜なら避けて当たり前」と判断していたからかもしれない。

後方でチェインを操っていたカインは、刺突だけでは物足りないように、顔を歪ませる。

「動」

呟きは、即座に実行へと移させた。

鬼人の胴体を貫いたチェインに体内魔力粒子イナという意志力を伝達させ、方向転換を行う。

鬼人の身体に二重、三重と巻きついていく銀の鎖。そして先端の刃が、胸部に突き刺さった。

『繋がった者』の魔導器は、物理法則すら超越する。カインは精神硬質——『自己の意志力』を魔導器に伝達させ、チェインを『意志を持った性質体』に変化させていた。

「圧迫」

……獰猛にして凶悪。カインは、胴体を貫くだけでは物足りなか

った。

彼は今、一つの苛立ちによって殺す事しか考えていないのだから、締め付ける白銀の鎖が、除々に鬼人の身体へと食い込んでいく。

——最終的に。

「散れ」

鬼人の身体は、四つに切断された。

（消滅したか……）

コアを破壊し、鬼人の肉体を司る魔力が失われた。

その存在の肉片が夜の闇に解けていく様を、鏡夜はじっと見つめていた。

「おつかれさま」

と。すでにチェインをアタッシュケースにしまったカインが、緩慢な足取りで鏡夜に近寄ってきた。

「どうということ？」

咎める様な口調で、カインは言う。

それは言うまでもなく、先刻の戦闘についてだろう。

だが、鏡夜は顔を俯かせるだけで何も言えなかった。それもそうだ。自分でも解らない事を口に出せる筈がない。

「俺は——」

「迷ったの？」

鏡夜の言葉を、カインは心を読んだかの様に遮った。

「迷う訳が無いよね？　今まで、こんな事は一度もなかったもん。君が殺す事を躊躇う筈がない。——それは、ボクが誰よりも知っている」

胸に手を当てて瞳を閉じるカインは、まるで自分に言い聞かせているようだった。

——カインは、鏡夜をずっと見続けてきた。そして鏡夜には、そ

んな無駄な要素はいらない。

彼は、自分と同じく殺す事しかできないのだ。そう——今まで自分に言い聞かせてきたのだ。

「事が起こるには必ず原因がある。それは、君の在り方を破滅させる必要なモノだよ。自分の事なんだから、ボクに言われなくても解るでしょ？」

(……………)

カインの言う事は当たっている。鏡夜も、自ずとその答えに行き着いた。

だけど、そんなことが本当にありえるのだろうか……？

「おつかれッス」

と、朱風を握ったままの千雨が二人と合流した。

「鬼人は殺ったッスよ。そちらは？」

「こつちも終わったよ。自己暗示は封印したのかい？」

「はいッス。あれで結構疲れるものなんスよ。持続時間も、長くて二十分って所ッスかね」

はあ、と重いため息をつく彼女は、戦闘が終わっていかにも気怠そうな様子だった。

「ま、いいか。鏡夜とはまた後で話をしよう。鬼人と戦って、一つ判った事があるんだ」

「なんだ？」

「——変だとは思ってたんだ。コアの魔力性質を感じ取った時も、何故、非日常とは無関係であるミナト・トオチ力を襲ったのかもね。真実を理解した結果、一つの結論に至ったよ。裁我の正体は——」

「オイオイ、何でデメエが日本にいるんだよ」

突然、そんな声がカインの言葉を遮った。

三人は、声の聞こえた方へと顔を向ける。

斜面の上には、月光を背に浴びた人型のシルエットがある。

そのシルエットに、鏡夜は見覚えがあつた。
裁我と名乗つた青年は、再び千堂鏡夜の前に姿を現した――。

個別戦闘論理

裁我の表情は、険しいものから歪んだものへと変化していった。
あたかも、見たくもない人物を見てしまったかのように。

「——オレの半身を殺したか。あの二体には結構な体内魔力粒子^{イナ}をつぎ込んだ筈だったんだがな。やっぱり鬼人を戦力にするのは不適合な判断だったか。

それに、刺客が放たれるとは思っていたが、よりにもよってテーマかよ。カイン」

緩慢とした足取りで斜面を下る裁我の黒眼が、カインを捉えた。
対して、カインも嘲る様な笑みを刻みながら、目を細めて裁我を見ていた。

あたかも、面白いものを見つけてしまったかのように。

「そうだね。星礼会は、君を不要な存在だと判断したみたいだよ。
ボク達は、君を始末する手駒^{テマ}ってわけ。コアから感知した魔力性質が誰かさんと似てるな、なんて思ってたけど、やっぱり君だったんだね」

「あの人を知ってるんすか？ カインくん」

千雨の問いに、カインは皮肉を含めた言葉で返答する。

「うん、知ってるよ。簡単に説明すると、元1階級^{クラス}のナンバー10。
本名は、カケル・トオチカ。ミナト・トオチカの義兄だよ。——これだけ言えば解るよね、キョウヤ？」

カインは、横目で鏡夜の様子を窺った。

「——」

鏡夜は応えない。しかし、その視線は完全に裁我という人物を捉えていた。

鏡夜が何も応えないとは——つまり、その説明に納得したのか、あるいは、その言葉の意味を理解したが故に応える必要がないと判断した、という二択に限られてくる。

しかし、除々に鏡夜の体内で活性化する体内魔力粒子^{イナ}だけが応えていた。

——完全に、後者だと。

「……テメエ。そんな腐れた名前でオレを呼ぶなよ」

湧き上がってくる感情を抑えるように、裁我は手で顔を覆った。

「過去は抹消した。記憶の断片が脳に残留していることすら許されねえ。……そのつもりだった。なのに、テメエはオレを傷つけた。精神が、異常をきたしそうだ」

震える声で発する裁我に、カインは深いため息をついた。

「元々狂ってたでしょ、君は。我を裁くと書いて『裁我』か。良いネーミングセンスだよ、カケル。そんなに自分を裁いて欲しいなら星礼会に出頭しなよ。身体は勿論、君の過去まで、全てを終わらせてくれるから」

カインは、くくく、と嘲笑する。

そして、裁我の過去を彼自身に根こそぎ思い出させようと、こんな事まで話し始めた。

「二年前は世話になったね。君が封殺者じゃなくなった事で、ボクは零階級に成ることができたから、礼を言うべきなのかな？ まったく。1階級止まりの封殺者が星礼会を潰すだなんて、現実主義者の君が言える台詞じゃ——」

「もついい。黙れ」

鏡夜は小さく呟き、カインの皮肉を遮った。

その呟きに宿っている意志は尋常なものではなかった。加えて、彼の身体に宿っている体内魔力粒子^{イナ}さえ、既に尋常な量ではない。

「お前等がどういう関係なんて知ったことじゃない。あいつの相手は俺がする」

鏡夜の言葉に、カインは薄く笑った。

「——へえ。できるの？ さっきは迷ったくせに」

皮肉に鏡夜は応えない。既に、彼の言葉など耳には届いていなかった。

——あいつを傷つけたのは、こいつだ——

それが、それだけの真実が、今の鏡夜を突き動かしていた。迷いなど関係ない。

今の鏡夜に在るのは、衝動的な殺人意志だけなのだから。

裁我は、鏡夜の視線を正面から受け止めると同時に、悲痛の表情を刻む。

「——ああ、そうか。お前まで、オレを敵扱いするのか。お前だけは、オレを理解してくれると思っていたのに……！ 何で、仲間になる筈のお前がオレに殺意を向けるんだよ！ お前も星礼会の連中を怨んでいるんだろ？ だったら、オレ達は同類じゃねえか！ 何で争わなきゃいけないんだよッ！」

裁我が咆える。それでも、鏡夜の殺気は継続されていた。信じられない。理解ができない。裁我は単純にそう思い、小刻みに唇を震わせる。

——鏡夜が、敵になる。

そう思うと、除々に呼吸が荒くなってくる。過呼吸にも似たそれは、苦しみからきているのか——それとも、絶望からか。

「……それ、が——お前の、『答え』か、鏡夜……！」

奥歯を噛み砕きそうな程に軋ませ、裁我は唸る。

鏡夜は答えない。ただ、その殺気を裁我向けていた。

だからこそ、それを認識したからこそ。裁我の荒い呼吸は治まった。

そして、裁我はこう口にした。

「千堂鏡夜を敵と認識した。——殺してやるよッ！」

二人の封殺者は、互いに疾走を始めた。

鏡夜の疾走は、もはや異常にまで達していた。

空気抵抗さえ無に等しい。そう思わせるほどに華麗な走りだった。対して、裁我の疾走は正逆の印象を思わせた。

蛇を連想させる邪悪な疾走。獲物を狩る動きは、獣に近い。

二十メートルの距離を、二人はわずか一秒足らずで一メートルほどに詰めた。

先に動いたのは鏡夜だ。

右手に体内魔力粒子を収束させ、懐に入った瞬間、静から動へと移行させる。一種の刃と化した魔刀が、裁我の胸部に襲い掛かる。

「はッ！」

迫り来る刺突に対し、裁我は鼻で笑って、右腕で簡単に弾き返した。裁我の腕が骨折しなかったということは、体内魔力粒子の量は同一か、それ以上だという事を示していた。

鏡夜は右腕を弾かれた反動でベクトルを狂わせられる。身体が左に反れ、裁我に背中を見せる状態となった。

その大きな隙を狙い、裁我は右手の魔刀で背中を斬りつけようとする。しかし鏡夜は、ベクトルを狂わされようが関係なかった。反れた身体から強引に体を反転。より勢いをつけた左の手刀で首の頸動脈を狙った。

「確率、正の解」

裁我は、そんな言葉を呟いた。迫り来る魔刀を、背を少し仰け反らただけで、紙一重に避ける。同時に、鏡夜は次の攻撃まで一秒の時間を有することとなった。

その一秒で、裁我は十メートルの距離をとった。

鏡夜も追撃という選択は取らず、一端、攻撃を中止する。

(……読まれている)

それは確信に近かった。最初の魔刀を弾いた時、イナの量が全く同じだったこと。裏をついた魔刀すら難なく避けたこと。

おそらく裁我は、その攻撃さえも読んでいたのだろう。

後退した裁我は、くく、と噛み砕いた笑いを溢す。

「『個別戦闘論理』っていつてな。相手の戦闘データを完全に『理解』し、行動、動作の一つ一つを基に、対応策を瞬時に判断するって論理だ。言っただろ？ 千堂鏡夜のデータは全て把握しているってな。お前は零階級、オレは元1階級。戦闘力はお前の方が圧倒的

に上だ。だがな、殺し合いにおいて相手の先の先、百手先まで読めれば、そんなことは無関係だ。確率論で言えば、お前が『本質』を解放しない限り、オレが不利になることは決してありえない。

——だからさあ。出せよ。探り合いはいらないだろ？ あの魔術師を殺した時みたいに、オレにも見せてくれよ」

裁我の挑発によって、鏡夜の脳裏に彼女の笑顔が浮かんだ。

故に、彼女を思い出させた原因を必ず殺すため、鏡夜はそれを開放した。

「SPEED UP」

その言葉と同時に、鏡夜は裁我の眼前へと一瞬で姿を現した。そして瞬間的な刺突。移動から動作まで1秒も掛かっていない。

「論理変換。タイプ2」

裁我も同じく、薄い笑みを刻みながら呟いた。

鏡夜の一瞬での移動、さらに刺突を、裁我は真後ろへと低い跳躍を行うことで避けた。

しかし鏡夜は、後退している最中の裁我に、一瞬で追いついた。鏡夜は中空にいるが、裁我と同じく跳躍を行った訳ではない。今の彼にとって、追撃など一瞬で可能になった。

地に着くほどの低い跳躍をする裁我と、その真上に覆いかぶさる様にいる鏡夜。

両者が同時に放った刺突の狙いは、どちらも首の頸動脈だ。

刺突の速度は全く同一だった。しかし、二人はそれを難無く避ける。

首の横を通り過ぎた両の腕。しかし鏡夜は、その動作から首の切断を試みた。

「甘めえッ！」

切断が実行される寸前、裁我は未だ地に着いていない両脚で、鏡夜の丹田目掛けて両蹴りを行う。

人体急所の一つである丹田は、体内魔力粒子^{イナ}の流れが循環している箇所だ。故に、そこにダメージを与えると、一時的に使用を制限することが可能になる。しかし――

「GUARD UP」

鏡夜の呟いたその言葉は、即座に実現された。身体に蓄積されてある体内魔力粒子^{イナ}が意思を持って丹田の一箇所^{イナ}に収束し、練成され、丹田の硬度を限界まで上昇させた。

裁我の蹴りは、鏡夜にとっては微々たるものだった。しかし、攻撃による効果はなくとも、その反動だけはどうしようもない。結果、鏡夜は三メートルほど、宙に浮かされる。

その時には、既に裁我は着地していた。中空で自由の利かない鏡夜を視界に捉え、追撃を試みる。

体内魔力粒子^{イナ}を両脚に収束しての、脚力上昇。故に、鏡夜の眼前に現れたのは一瞬だった。

斜め下から振り上げる手刀を、鏡夜は右腕で防ぐ。最大限に束ねた両の体内魔力粒子^{イナ}が拮抗し、同時のタイミングで二人は腕を弾き距離を取る。

「SPEED UP！」

「タイプ3ッ！」

だが、それもすぐに攻撃へと転じる。両者に油断など微塵もない。それは、互いを殺すべき対象と判断したが故に。

「カインくん。鏡夜くんの動き、どういうことッスか？」

小首を傾げる千雨は、鏡夜の行動に納得がいていないようだった。

「鏡夜くんの一瞬での移動。あれ、脚に魔力を収束していなかったッスよね？ 追撃をかける際も、魔力が移動中に残留することがなかったッス。鏡夜くん、何をしたんスか？」

横目で窺う千雨に、カインは「あれが、キョウヤの本質だよ」と、戦闘から目を離さずに言った。

「あれね、キヨウヤが元観察者の人に教えてもらったんだって。簡単に言くと『詠唱』の部類に属するんだけど、キヨウヤの詠唱は別格なんだ。普通、詠唱は長文であればあるほど、実際に自己暗示の効果を増幅していくでしょ？ 逆に、短文は長文以上の効果は獲得できない。古今東西、あらゆる詠唱の類において、それが絶対の法則となってる。だけど、キヨウヤの詠唱は、詠唱の基本を全て『無視』してるんだ。

あの詠唱は、種類は違えど、絶対に一言で詠じ終える。そして、その『言葉の意味』を実現させるんだ。キヨウヤも、その言葉の意味を理解する過程において三年はかかったらしいよ」

言語理解という行為は、その言葉の意味を認識することから始まる。その言葉の意味の方向性を違わずに、脳に『正』しく記録させなければならぬ。

『正』しく記録させた言語は、『正』しく再生させ、『正』しく実行に移さなければならない。

しかしながら、純粹かつ、言葉の本質を理解するという行為は、生半可な思考回路では身に付けることは不可能である。そのため、詠唱を扱う類の術者は、知識、知性が常人よりも優れているとされていた。

「詠唱を唱える時間は、わずか一秒。全てが一瞬で言い終えることから、星礼会はキヨウヤに『刹那』の称号を与えたんだ。でも——」

と、カインは次の言葉を紡がなかった。

詠唱を実行した鏡夜に、裁我は互角の殺し合いをしているからだ。カインの知っている裁我は、その驚異的な頭脳を駆使して戦う。彼が『個別戦闘論理』を使用するのはその為だ。だが、カインが気にかけているのは、その部分ではなかった。

裁我は、確かに頭脳戦を利用する。それは理解している。しかし、先が読めていようと、頭で理解していようと、詠唱を駆使して戦う鏡夜の身体能力に追いつける筈が無いのだ。なぜなら、詠唱を発動した鏡夜は『魔術師』の域にまで達しているからだ。

それが、たかが1階級の封殺者に互角の闘いをされてしまうこと自体、あってはならないのだから。だとすると、鏡夜は――

「カインくん、気づいているツスカ？」

千雨も、カインの覚えた矛盾に気づいていた。

カインは、強く握った拳を震えさせている。……ブチッと、爪が皮膚に食い込む音が聞こえた。

「うん。こうなった以上は仕方ないね。――そろそろいくよ」

内に激しい怒りを宿しながらも、カインは冷静に状況を判断した。
「了解ツス」

「オイオイ、オレを殺すんじゃないかったのか？ 迷ってんじゃないねえよッ！」

鏡夜の驚異的な移動速度、瞬間的な攻撃を完全に見切りながら、裁我は笑みを刻みながら回避を続行していた。

確かに、後手に回っているのは裁我だった。しかし、彼には強い余裕が窺えた。

（くそ――ッ！）

おかしい。こんなことはありえない。鏡夜はそう単純にそう思った。

本質を解放したというのに、裁我を殺せない。殺害の瞬間は幾度となくあったというのに殺せない。

身体が否定しているのだ。『敵を切り裂くな』、『敵の体を通つな』、そして――『敵を殺すな』と。

訳が解らない。どうして殺してはいけないのか？ どうして自分の邪魔をするのか？

その一瞬の自問が、身体の動作を停止させる。

しかし裁我にとって、その一瞬が鏡夜を殺す決定的な隙だった。
「迷うなつってんだろぅがッ！」

鏡夜の刺突を余裕で避けた裁我はそのまま懐に潜り込む。胸部を狙い、鏡夜にも劣らない魔刀での刺突を実行する。だが――

「——ッ!？」

手刀が胸部を貫く寸前——コンマ一秒の刹那、白銀の鎖が牙を向いた。

二人の間を割ったのは、カインの魔導器——チェインだった。

裁我は攻撃を中断し、咄嗟に後退する。

「カイン、テメエ……!」

裁我は奥歯を軋ませながら、殺害の機会を妨害したカインを睨み付ける。

「キョウヤも悪いと思うけど、死んでもらったら困るからね。参戦するよ」

「ハッ! テメエのデータは完全に熟知しているって過去に何度言っただと思っただ? テメエは一度でもオレに勝てた試しがねえだろうがッ!」

「まあ、そうだね。——じゃあ、彼女のデータも熟知しているのかい?」

「なん——ッ!？」

と、裁我は口を開こうとした時、気配もなく背後に回り込んでいた千雨の存在に気づいた。

彼女の握っている短刀が、裁我の右腕を目掛けて虚空を疾る。

(チィッ!)

咄嗟の判断。右腕に体内魔力粒子^{イナ}を収束させ、一瞬で魔刀へと練成させる。

「意志力、90%」

しかし、いくら魔力を束ねたとしても、彼女の持つ短刀の前では無力。

裁我の一瞬による魔力を収束した意志力。彼女が短刀に宿し続けてきた殺人意志。一瞬での意志力では、収束できる魔力の量などががしれていた。

ズパァンッ、という音と同時に、裁我の右腕が宙に舞う。

「——ッ!!!」

激痛に、裁我は無音の叫びを上げる。それに構わず、千雨は背後から胴体突き刺そうとするが――

（――論理変換、イナを両脚に完全収束――！）

死の刃が迫り来る瞬間、裁我は瞬時に離脱思考を行動へと移す。

――刹那、彼は姿を消した。

河川敷公園から離脱した裁我は、跳躍を繰り返す。

（魔術師か……！）

それは、直感と同時に確信だった。腕を断ち切られた時に感じたあの殺気。あれは封殺者のものではない。

何度も体験してきた死の塊。敵対したら最後、必ず死が訪れるという絶対的な上位者。

それが、鏡夜の仲間に加わっていたなど完全な誤算だった。

「……マズイな」

魔術師が派遣人員に加わっているとなると、優位な状況に立つことは絶望的だ。ならば、一から対策を練り直さなければならない。

「腕は……使い物にならねえか」

切り落とされた肘から下を見やり、そう判断する裁我。

彼は襲い来る激痛を無視して、嬉々とした表情を浮かべた。

（――だが、まだだ）

そう。鏡夜が殺せなくなったという事実を知った裁我は、先刻のカイン・エレイスの言葉で、『ある可能性』が思い浮かんだのだ。

確率としては限りなく低いが、データを収集すれば、もしかしたら――

「さて、と。それに賭けてみるか」

裁我は限りなく低いその可能性を、脳裏で組み立て始めた。

鏡夜は、ただ立ち尽くしていた。

詠唱を実行したことで、身体的、精神的な疲労は限界まで迫っていた。

しかし今の鏡夜は、そんな理由で立ち尽くしてるわけではなかった。

……自分の不甲斐なさのせいで、裁我を離脱させてしまった。それを恥じるのが最優先事項だ。

殺すつもりだったのだ。カインの言葉を聞いた時点で、鏡夜は彼を殺すと、明確な決意をした筈だった。

なのに——なんて、無様で滑稽なのだろう。

訳の解らない身体の拒否反応は、除々に千堂鏡夜の持つ存在理由を侵害していく。

「何で——」

迷ったんだ、と言い切る前に、カインに鳩尾を殴られた。

「——こんな事をしてる場合じゃないけど、これくらいやらないと気が済まないからね」

鏡夜は咳き込んだ。小柄な少年とはいえ、カインは封殺者なのだ。拳一発で一般人を殺せるのだから、これでも手加減している方なのだろう。

顔を俯かせたまま、鏡夜はカインに視線を向けた。険悪とも取れる表情をした彼は、その瞳に憎悪のような色を宿していた。

しかし、それもすぐに落胆の色へと変えた。

「……仕留められたよね？ キョウヤなら」

それは、疑問をぶつける言動ではない。鏡夜ならそれを実行できると確信していたが故の素朴な質問。

「君が中途半端な封殺者だって事は、ボクでも理解してた。でも、それは精神面だけだと思ってたんだ。——まさか、殺し合いにおいても中途半端になっていたなんて、失望したよ」

ふう、とカインは重いため息を漏らす。

——カインの言葉は、全体的確だった。

精神面が極められていない鏡夜は、自分が中途半端だと自覚していた。

（それでも……）

そう。それでも、鏡夜は殺してきたのだ。何百という数の鬼人を。過去の任務でも躊躇せずに殺してきたのだ。

……鏡夜に異変が起こったのは、昨日の廃ビルでの一件からだ。彼自身、あんな体験は初めてだった。

（殺す事に、疑問を抱いてしまったのか……？　じゃあ、何で疑問を抱いた？）

思考を巡らせても、答えが出てこない。
解らない。ワカラナイ。

——俺八、壊レテシマッタノダロウカ？——

「——カイン」

鏡夜は、顔も向けずカインに声を掛けた。

カインは「なに？」と聞き返す。

「……俺は、変わってしまったのか……？」

そんな事は、自分自身が一番良く解っている筈なのに。

それを問いかけた鏡夜は、自分に確固たる自信がなかったのだ。

変わってしまったという事実を、鏡夜は受け入れられなかった。

当たり前だ。受け入れてしまったら、おそらく自分は絶望してしまう。

だから、カインには否定してほしかった。

変わってないよ、いつも通りの笑顔で言っただけだった。

「キョウヤは変わったよ」

……はつきりと、その言葉は鏡夜の耳に届いた。

カインは迷いもせず、そう言い切った。

それは、決定的な一言だった。鏡夜が鏡夜でいられなくなる為の、呪いのような言葉だった。

「——ボク、先にマンションに戻ってるから」

そう言い残したカインは、鏡夜に背を向けて高く跳躍した。

まるで、千堂鏡夜という封殺者から興味を失ってしまったかのよ

うに。

除々に遠ざかっていくカインの後姿を、鏡夜はただ黙って見つめることしかできなかった。

「……あー、鏡夜くん」

振り返ると、千雨は髪を掻き毟りながら、鏡夜を見ていた。

「……結果的に逃がした形で終わったツスけど、裁我さんの戦闘力は半減したと言っても過言じゃないツス」

千雨は、ただ同情を感じさせる眼差しで、鏡夜を見ていた。

「何が鏡夜くんの行動を抑制させているかなんて、私には解らないツス。出会ってから一日で人を理解するなんて不可能ツスからね。でも——」

ゆつくりと、千雨の双眸が開かれていく。

それとほぼ同時に、彼女は鏡夜の首元に手刀を突きつけていた。

「——この瞬間ですね、貴方が躊躇いを覚えたのは。ですが、迷いが皆無な私には、そのようなモノは感じられません。

貴方の矛盾思考には、何かしらの原因が存在する筈です。まずは、それを探し求めることから始めましょう。『原因』を見出した時——貴方は、おのずと自分の『答え』に辿り着くことができる。私は信じています」

千雨は、いつもの怠けた口調ではなく、『魔術師』として、毅然とした存在感を以ってそう告げた。

突きつけた手刀が、ゆつくりと下ろされる。

再び半眼に戻った彼女は、

「まあ、鏡夜くん次第ツスけどね」

と、鏡夜に微笑みかけた。

……その笑顔に、鏡夜は少し癒された気がして、
「……努力する」

ぶっきらばうに、顔を背けて返した。

少年とレイが邂逅を果たし、三年が経った。

そして、それは突然の出来事だった。

レイが少年の観察者を辞め、本国であるイギリスに帰国することになったのだ。

星礼会本部から地位の昇格を与えられ、最高幹部に抜擢されたという事だった。

しかし、そんな事情で少年は納得できなかった。

牢の中で体育座りをしていた少年は、ただ思った。

（僕は、レイさんを抛り所にしていたんだ……）

三年の年月が経って、やっと少年はその事を自覚した。

（レイさんの笑顔がなくなっちゃ、僕は生きていくことすらできないんだ……）

レイ・ストライトが帰国する前日。独りっきりになってしまった牢の中で、少年は初めて自分以外の人の為に泣いていた。

——そして、翌日。

「お別れですね、キョウヤ」

施設の内部から外界へと続くただ一つの階段を前にして、レイは「お別れ」と告げた。

（お別れ——）

——別れてしまう。

離れていく。

僕から遠くへ。

すごく遠い国に。

もう会えない。

二度と、会えない。

「行かないで……」

ボロボロと涙を流しながら、少年はレイの華奢な腕を掴んだ。

——嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ——絶対二、嫌だ。

「僕にはレイさんが必要なんだ。僕が一人前の封殺者になるまで、ずっと僕を見ていてほしいんだ……！」

聞き分けのない子供の我侭だと解っていないながらも、少年はレイの腕を離さなかった。

しかし、そうまでして、少年はレイと共に在りたかったのだ。

……ふう、と軽い息を吐いたレイは、「では、こうしましょう」と、しゃがみ込んで少年に一つの提案を出した。

「最後の戦闘訓練です。貴方が私に勝てたのなら、私は貴方の観察者を継続しましょう。それで良いですか？」

小首を傾けながら笑顔で問うレイ。少年は力いっぱい頷いていた。

そして、闘技場で最後の訓練を開始から十分が経った。

「……………え？」

ありえない事が——あつてはならない事が起きた。

「『俺』が、レイさんに勝った……？」

いや、正確に言うならば、これは勝利ではない。

何故なら、少年はレイ・ストライトを殺害してしまったのだから。

少年は、この三年の間にレイから伝授された詠唱を実行して、ただがむしやりに戦っていただけだった。

レイの胸部から大量の体液が溢れ出している。

レイの優しかった笑みが、完全に破壊されている。

少年の右手は、レイの体液で赤色へと色変わりしている。

（——『俺』は、レイさんを殺した）

その事実が、瞬時に理解してしまい、恐怖を覚えた。それは、どうしようもない事実で、

理解してはいけない、どうしようもない真実だった。

「素晴らしい」

周囲で傍観していた施設の研究者達は、少年に拍手を送っていた。「わずか十歳で、星礼会の最高幹部に昇格した魔術師を殺せるとは封殺者にするにはもったいない逸材だ。私達が星礼会本部に、君を魔術師に認定するよう掛け合おう」

施設の所長は、この出来事を前向きな気持ちで考えていた。

——レイさんが死んだのに、俺を誉めている。

——レイさんが死んだのに、それを過去の事柄にしようとしている。

——レイさんが死んだのに。

こいつらは、嬉しそうに笑っていた。

「うるさい」

少年の殺意を込めた一言で、研究者達は拍手を止め、口を噤んだ。「レイさんは本気を出していなかった。レイさんは俺に手加減してくれていたんだ。——そうだ。あの時、レイさんはわざと俺の攻撃を受けたんだ。そうでなければ、俺がレイさんに勝てる訳がない。レイさんを殺せる訳がない。……レイさんに何を言った？ 俺に殺されろんでも頼んだのか？」

少年の詰問に、所長は一瞬だけ顔を顰めて、けれどまた薄ら笑いを浮かべた。

「そんな訳がないだろう。彼女を殺せたのは、君のじつりよ——」
「黙れ」

少年は、一瞬でその汚い笑みを破壊した。顔面に手刀が貫通し、脳味噌の感触が腕に絡みつく。

『ひっ……!!』

研究者達の表情が瞬時に強張る。

目の前にいる死を体現させた存在の理性は、既にこの時、『あるモノ』によって支配されていた。

殺す。殺す、殺す、殺す。――全テ殺す。

少年は、研究者全員を『敵』と定めた。故に――
「お前ら全員、殺害してやる」

――気がつく。

少年の周りには、人間の死体が無様に転がっていた。

首、腕、脚、胴体。人体の様々な箇所が床に散乱していて、元々白色だった闘技場の地面は、赤みを帯びた体液でその色彩を変えていった。

そんな死体の中に独り佇む少年は、先刻から一つの違和感を覚えていた。

それは、少年の内界に何かしらの変化を及ぼしたような気がして

「認識したか」

途端、そんな重く低い声が、少年の鼓膜に響いた。

声というよりも、一種の音に近いそれは、圧倒的な存在感を曝け出している。

それは、少年がレイ・ストライトと初めて戦った時と同じ感覚だった。

少年は、声のした方へと首を回す。

その男は、いつの間にか視界に入る位置に佇んでいた。

「誰だ」

少年の口調は、普段のそれと比較できない程に冷たく、感情が宿っていなかった。

……その、『千堂鏡夜』という少年が別の人間へと乖離かいりしてしまつたような感覚も、けれどすぐに、『千堂鏡夜』として受け入れた。
「天美戒。お前の元観察者と同じ存在だ」

顔とはいえないほどに何も感じられないその貌で、男は自身の名を告げた。

「——魔術師が、俺に何のようだ」

「レイ・ストライトの殺害に成功したのは、お前が『心界しんかい』を認識したからに過ぎない。そうでなければ、お前が彼女の殺害に成功する可能性は0%に等しかったのだからな」

少年の問いに答えず、魔術師は無感情の口調で淡々と語っていく。
「存在理由を自覚した先に在る領域——心界を、お前は認識した。研究所のデータを拝見したが、お前の心界は『殺害』のようだな」

魔術師は、その貌に無骨な笑みを刻んだ。

「だが、彼女が施した術は消滅していないな。あの術は、施した本人でないと解除は不可能だ。そして機会も訪れてはいない。故に、お前はその機会に遭遇するまでは殺しを継続できるということだ」

「……俺の存在理由は、殺すことなのか？」

「その通りだ。先刻、お前はそれを自覚した筈だ。心界を認識した者は、心界に従って生きる事しかできない」

心界を認識した者は、それに従うことしかできない。魔術師は、確かにそう口にした。

「星礼会最高幹部である私の権限において、今日、この瞬間から『千堂鏡夜』という人間を封殺者に認定する。本部には、私が話をつけておこう。

鬼人を殺す為だけに生きて、そして死んで逝け。——それがお前の存在理由であり、逃れられない運命だ」

そう言つて、魔術師は去つていった。

独り残された少年は、赤で変色した地面の上に佇み続けた。

「殺すことが、俺の存在理由……」

——ああ、本当はとくに気づいていたんだ。俺には、殺すこと

しできないという決定的な事実には

事実は、受け入れるしかない。

真実は、覆ることのない運命。

「なら――」

今この瞬間から、少年はそうで在るよう生きる事を誓った。

過去の断片

その日は、雨が降っていた。

豪雨に等しい激しさで降り続く雨音が、少女の耳に響く。

叩きつけられる雨滴が、容赦なく傷に染み込んで激痛に苛まれた少女は、自宅の前で倒れていた。

横たわった状態から顔を上向けると、包丁を手にした少年がいた。少年は、酷く悲しそうな表情で少女を見下ろしていた。

その顔も、除々に憎しみを含んだ、歪んだモノへと変わっていく。少女が倒れているのは、少年が持っている包丁で、背中を深く切られたからだった。

それは、誰よりも信頼していて、誰よりも大好きだった——義兄の手によるものだった。

「お前が悪いんだ……ッ！」

唸るように吐き出す少年は、今にも泣き出しそうな顔で少女を睨みつける。

「お前がッ！ お前がいつも幸せそうにしているから！ お前がいつも笑っているからッ！ オレの苦しみも悲しみも理解してないくせに、優しく接してくるから、こんな事になるんだ！」

少年の悲痛の叫びは、少女にはよく理解できなかった。

目前に佇む少年は、本当に自分の義兄なのだろうか。少女の心に、そんな疑心まで芽生え始める。

「……やっぱり、オレに家族なんてモノは不要だったんだ。施設を追い出された頃からずっと考えていた。オレは、お前みたいになれないってことにつ……！ どれだけ努力しても、どれだけ普通でいようとしてもッ！ オレがそちら側に行くなんて不可能だったんだ！」

（上手く、聞き取れ……ない……）

除々に、少女の意識は朦朧としていった。耳に取れた言葉は『普

通』、『そちら側』、くらいだった。

——義兄さんは、怒ってる。凄く、怒ってる。

それは、おそらく自分のせいなんだろう、と少女は確信した。
知らない内に、自分は義兄を傷つけた。その証拠に、自分は背中を切られた。

「……オレは、お前みたいに、なれ、ない……ッ」

少女は目を虚ろとしていた。その目に、最後に映ったのは、酷く呼吸を乱している義兄の姿だった。

カランツ、と包丁がアスファルトに落ちた音がした。

——お前みたいに、なれない——

それが、決別の言葉だった。

「だから。そうさせた、元凶を潰、す……！ 何年掛かったと、しても、必ず星礼会を……破滅させるッ！」

もう、少女の耳には何も聞こえていなかった。

そして、少年は少女の前から立ち去った。

……少女は、虚ろな瞳から涙を流した。

それは、立ち去った義兄と二度と会えないような気がして、不安だったから。

しかし、その気持ちとは裏腹に、もう会えない方が良いと思う自分もいた。

——こういうのを、矛盾っていうのかな。

そんな事を思いながら、少女は意識を失った——。

「——っ！」

遠近湊は、咄嗟にベッドから身を起こした。

「はあ、はあ……はあ」

荒い呼吸を落ち着かせる。十二月だというのに、体中は汗だくになり、パジャマはぐつしよりと濡れていた。

部屋の灯りは消えている。消灯時間が過ぎたためか、何の音も聞こえず、静としていた。

「……今の、夢」

——そうだ。あの夢は一体なんだったのだろう？　まるで、自身が経験したかのような夢だった。

——それに、あの少年は誰だったのだろうか？　まるで、他人とは思えないような言動をしていた。

湊は、あの少年が身近にいた人のような気がしてならなかった。

……夢を、夢で片付けられなかった。

——そこで、湊はある事に気づく。

「……傷」

腕をパジャマの中に潜り込ませ、背中中の皮膚を触る。

湊は、明らかに普通の皮膚とは異なる感触の部分を発見した。

……何かを、思い出しそうな気がしてきた。

『雨の日』。

『自宅の前』、『傷跡』。

『矛盾』、『記憶』、『兄妹』。

『孤独』——『千堂鏡夜』。

「あ——」

あっけなく。それは呆れるほどあっけなく、湊の記憶に蘇った。

（そうだ。私は、翔義兄さんと再会した時、不思議な力でお腹を深く切られたんだ）

そして湊は、医者と話していた、『心因性による健忘症』の意味を再度理解した。

心因性による健忘症——。過度な心的外傷を負った時や、トラウマとなった出来事を思い出してしまった事が原因となり生じる記憶障害である。

——そして、それを理解したが故に、湊の頬から涙が溢れ出した。

「……千堂、くん——」

想うと、そうなってしまうのは自然なことだった。

湊は、鏡夜の問いに「知らない」などと言ってしまった。

決別したと思っていた鏡夜が病室に訪れてくれたのに、湊は『忘れてしまっていた』。

「ああ……」

後悔するには、事は既に遅かった。

自分の一言で、全てが終わった。

——これでは、彼を拒絶したと一緒だ。

「……ひう……ひいん」

子供のように、湊はみつともなく泣いた。

だけど、今は泣きたかった。

泣いてどうなるものでもないけれど、今は泣きたかったのだ。

何故なら、湊が抱いていた夢は、湊自身で壊してしまったのだから。

鏡夜は朝方の六時半に目を覚ました。

しかし、昨日と同じく眠気が充分に残っていた。というのも寝具が変わったからだろう。押し入れから引っ張り出した薄地の毛布を居間に敷いた事が災いしたのか、床の冷たさが伝わってきて、昨日は就寝するのに二時間も掛かってしまった。

鏡夜の隣では、カインが毛布に包まって、小さな寝息を立てて気持ち良さそうに寝ていた。カインの寝顔は純粹無垢な子供を連想させた。この少年は鏡夜とは逆に、布団に潜り込んでから十分で夢の世界に入ってしまった。

「うーん、いけー、チェインー。あいつらを殺しちゃえー」

鏡夜は即座に思った事を撤回する。この少年が無垢であるなどありえない。

一方、千雨は、薄い布で居間を二つに分けた向こう側にあるベッドで寝ている。就寝する直前に、「一緒に寝ないツスカ？」と鏡夜は誘われたが、断固として拒否を示した。

鏡夜は二人を起こさないよう、静かに立ち上がり、台所の電球を

点した。

ポットで湯を沸かし、インスタントコーヒーを三人分用意する。

……就寝するのに二時間も掛かった本当の理由は、延々と考え事をしていたからだ。

（本当に、俺はどうしてしまったんだ……）

それだけを考えていたかった。

何故なら、殺す事ができなくなってしまった千堂鏡夜は、千堂鏡夜ではないからだ。

何が原因なのか、鏡夜は分からない。しかし逆に考えるならば、『原因が在ったから、殺せなくなってしまった』のだ。

それがどんな原因であっても、千堂鏡夜の存在を邪魔する要因でしかない。

「遠近、湊……」

ポツリと、鏡夜の口からそんな名前が漏れた。

しかし、たった一週間、一緒に過ごしたただけだ。それだけで、こんな風になってしまうものなのだろうか？

十七年間生きてきた鏡夜の在り方が、たった一週間で、こうも劇的に変化するなどありえるのだろうか？

（——だとしたら、それほど）

彼女を、特別な存在だと思ってしまったのだろうか。

そちら側に行けるかもしれないと、思い込んでしまったのだろうか。

——だから、殺す事に躊躇いを覚えてしまった。

殺してしまったら、そちら側に行けなくなってしまうから。

……しかし、この考えが正解だとしても、そこには矛盾が生じてしまう。

鏡夜は、昔聞いた、天美戒の言葉を思い出す。

『心界を認識した者は、心界に従って生きる事しかできない』

——七年前。『殺害』という心界を認識した鏡夜は、同じく心界に従って生きてきた。鬼人を殺し、星礼会と敵対する連中を全て殺し——殺して、殺し続けてきた。

苦悩した時期があったのも確かだ。心界に従って生きるという運命が無意味に思えて、そうである事をやめようと考えた事も幾度となくあった。

だが、心界を認識した人間に、そんな愚考が通用する筈がなかった——

「鏡夜くん？」

と、不意に布で仕切られた向こう側から、千雨の声が届いた。

布の奥からぴよこんと顔を出した千雨は、起きたばかりでも半眼無表情だった。

「悪い。起こしたか」

「どうしたんスか、こんな朝早くから？」

「……ああ、少し早く目が覚めたんだ」

言っと、千雨は鏡夜の淹れたコーヒーに視線を移した。

「——飲むか？」

「はい、頂くッス」

「思った通りッスね。やっぱり、鏡夜くんは心界を認識していたんスか」

千雨と何気ない会話をしている内に、鏡夜は内緒にしていたその事実を口にしていた。

おそらく千雨は、鏡夜が心界を認識している事に気づいていたのだろう。その上手い話術に乗せられて、いつの間にか話したくもない過去まで喋っていた。

「……どこで気づいたんだ？」

「そんなの、鏡夜くんの言動と行動の矛盾を組み合わせれば簡単ッスよ。私の考察から導き出した結論で言っと、鏡夜くんの心界は『殺すこと』に関連しているッスね」

鏡夜は素直に、その洞察力と観察眼に感服するしかなかった。

「千雨は、心界についてどれだけ知っているんだ？」

「え？ …… 鏡夜くん、心界を認識しているのに、心界の事を知らないんスか？」

「俺は、その人間の存在理由としか聞いていない」

本当の事を言った鏡夜。しかし何故か、千雨は吹き出した。

「……今の言葉で、何かおかしいところがあつたか？」

「い、いえ。そんな例を見るのは鏡夜くんが初めてだったツスから苦笑する千雨は手を振って、コーヒークップに口をつける。

そして、いつもの気怠げな表情から、少し険しい顔つきへと変えた。

「心界っていうのは、人間の思考原理、行動原理、言動原理——この三つの概念の大元を司る、人間の心に在って無いものツスね。ここで言う『在って無い』というのは、認識している人間にはその概念を理解できて、認識していない人間にはその概念を理解することが不可能っていう正逆論理ツス。現代においては、先に鏡夜くんが言った存在理由で流通しているツスね」

思考原理、行動原理、言動原理——。これら全ては、その人間の『在り方』に深く関わっている。例えば、何かしら思考を巡らせるにしても、言葉を放つにしても、行動を行うにしても——それは、その人間が培ってきた人生経験の知識を生かして行うものである。故に、その人生経験の内容が、その人間の在り方に直結するのだ。「鏡夜くんの心界は『殺すこと』。これで例えるとすれば……そうツスね、先程言っていた施設の候補者を全員殺した事によって、除々に『自分は殺す事しかできない』と思い込んでいったと、私は考えるツス」

千雨の推測に、鏡夜は黙り込む。……あの頃、生きる為に候補者を殺し尽くしていた自分は確かに在ったのだ。

「さらに、心界の認識後は自身の一人称、及び口調が変化するツス。『あたし』が『私』になったり、『僕』から『俺』になったりと。

これは、人間の成長における思考原理が完全に正しい方向へと決定されたからツスね」

「そうか……」

その言葉を聞いて、鏡夜は七年前を思い出した。確かに、レイ・ストライトとの最後の戦闘訓練を行う前までは、一人称が『僕』だった。子供さながらであつた口調も、心界の認識後は冷たく、暗いものへと変化した事も覚えていて。

「ついでに認識後のメリットとして、『精神』、『肉体』、『脳』に異常なまでの活性化が見られるツス。封殺者に例えると、魔術師の領域に踏み込む事も可能ツスね。そして、心界を認識した人間は、心界に従って生きることしかできなくなるというデメリットも背負う破目になるツス。心界を認識した人間が心界を否定すると、自身の存在理由に支障がきたして、在り方が曖昧になってしまうからツス。」

……人間っていうのは、誰しもが自分自身の在り方を用いている生き物なんスよ。認識してしまった人間がそれをうやむやにすると自分は何の為に生きているのか判らなくなる。自分が自分でないような錯覚に陥ってしまう。だから、認識した以上、私達は受け入れるしかないんスよ」

「私、達……？」

「はいツス。ぶっちゃけると、私も『考察』という心界を認識してるんスよ。幼い頃から、物事の真理に執着し過ぎたせいか、何事に関しても真実を知りたくなる性質になったんスよね」

あはは、と力なく笑う千雨。鏡夜はこの時、彼女は認識したことを後悔しているように思えた。

そうして二人で話を続けていると、淹れたコーヒーは既に冷めてしまっていた。

断ち切った迷い

午前八時。三人はテーブルの椅子に掛けて朝食を食べていた。沈黙とも取れる静寂の中に食器の音だけが響く。

「キョウヤ。のんびりしてるけど、学校には間に合うの?」

「しばらく休む。今はそんな場合じゃない」

トーストにかじりつきながら返答する鏡夜。対して、カインはコーヒーカップをテーブルに置いて、一つ鼻で笑う。

「そんな場合じゃないだつて? そういう状況にした張本人が言える台詞だと思ってるの?」

「まあ、確かにカインくんの意見は的確ツスけど、鏡夜くんは一緒に行動した方が良いんじゃないツスか? これからの事についても話し合う必要があるツスから」

行儀良く日本茶を喉に通しながら、千雨は鏡夜をフォローする。

しかし、カインは昨晩から機嫌が直っていない様子だ。

ギシギシと斜めに椅子を傾けながら、カインは「……うーん」と目を閉じて唸る。

「それはそうだけどね。でも、今日くらいは学校に行った方が良くんじゃないの? ボクとしては、キョウヤに少し休憩をあげたい。あと、考えを改めてほしいな。自分自身の在り方ってヤツをさ」

椅子に背を預けて、カインは小さくため息をついた。

鏡夜は、カインの言っている言葉の意味を理解していた。だからこそ、反論するべき言葉が見つからない。

つまるところ、カインはこう言っているのだ。――『早く答えを出せ』と。

そうでなければ、この少年はこんな言動はしない。

カイン・エレイスという封殺者は、迷いがある人間が大嫌いなのだから。

「……分かった。今日は学校に行く」

そして、カインの思惑を理解した鏡夜は、何も言う気になれなかった。

これ以上、二人に迷惑を掛けるのは嫌だから。

——少し、頭を冷やそう。

午前八時十分。鏡夜は制服に着替えて、家を後にした。

カインは、自分の考えに疑問も逡巡も持っていなかった。

今回の件は全面的に鏡夜が悪いと、心の底から思っていた。

（……でも、何でキョウヤは殺せなくなってしまったんだろう？）
事が起こるには、必ず原因というものが存在するのだ。

そしてカインの推察では、一人の少女が関係していると思っていた。

「チサメちゃん」

カインはテーブルに頬杖を掻きながら、抑揚の無い声で千雨に話し掛けた。

「なんスか？」

向かいの椅子に座っている千雨は、行儀良く背筋を伸ばして、自分で淹れた日本茶を啜っていた。

「キョウヤの矛盾行動について、チサメちゃんはどう思ってる？」

カインの問いに、千雨は一度顔を顰めて、腕を組んで考え始めた。

「……そうツスね。それは、私も気にかけている事だったんスよ。」

私の推察では、鏡夜くんが殺せなくなったのは湊さんが関係していると思うんスよね」

「やっぱり、チサメちゃんもそう思う？」

「だけど、もしそれが真実だとするなら、ここでまた矛盾が生まれるツス。」

鏡夜くんが湊さんと一緒に過ごしたのは、たったの一週間ツス。その一週間で、鏡夜くんが十七年間培ってきた思考パターンが、あれほどまでに変化するなんて論理的にありえないツス。その理由として、鏡夜くんは十七歳まで、拒絶と孤立を続けてきたからツス。

それが、たった一人の女の子に話し掛けられただけで迷いを持つてしまうのは、自己の確立された在り方を自分から破壊するのと同じツスから。

そして、この段階で私が考えているのは、外的な要因が鏡夜さんの思考原理にバグを発生させたという事ツス」

「——外的な、要因？」

「はいツス」と千雨は首肯する。

「外的な要因を、ここで一端魔術に置き換えるとするなら、施した人間に新たな記憶を植え付ける『記憶操作術』が例に挙げられるツスね。これなら、『千堂鏡夜』という一固体の人間が培ってきた、『殺してきた』というエピソード記憶に、新しく『殺したくない』という記憶をさせて脳に保持させることが可能ツス」

「……エピソード記憶って、体験、経験した出来事を一つの情報として脳に記録——記録させることだっけ？」

「はいツス。記憶操作術はその名の通り、外部から記憶情報を操作する事を指すツス。でも、この術は『禁忌魔術』として扱われているんスね。何故なら、この術を行使するには、操作する対象の記憶情報を完全に認識していなければならないからツス。ただ一度の情報操作を怠れば、その人間の記憶機能のプロセスが異常をきたして最悪の場合、記憶障害に陥ることもあるツスから」

「だけど、この推論はたぶん違っているツス」と、千雨は髪をガシガシと掻きまきり、自身の考えを否定する。

「本当に記憶操作術を外部から植え付けられたなら、過去の記憶である『回想的記憶』が書き換えられてしまうツス。そうしたら私はともかく、カインさんの事を覚えている訳がないツスから。」

ついでに言うと、禁忌魔術は『存在の破壊』を示す行為ツス。人間の道徳から大幅に逸脱した術なので、その危険性を序列で定めてもいるツス。記憶操作術は第四位に位置するツスね」

そして、それを解除——つまり、外的要因の規制を取り除くには、上位の第三位、第二位、第一位の禁忌魔術を実行して、植え付けら

れた概念をさらに上位の概念で抑圧し、消滅させるしか手段はない、というらしい。

「でも——」と、千雨は続けた。

「私は、何らかの外的要因が関わっていると確信しているんスよ」

「その根拠は？」

素朴な疑問を訊ねるカインに、千雨は珍しく焦ったように視線を泳がせた。

「い、いや、訂正するッス。確信は違うッスね。私の勘みたいなのッスよ」

「……まあ、いいけど」

明らかに挙動が不審だったが、カインは深く追求するのは止めた。内心で、紳士的なボク、などと優越感に浸りながら。

「それにしても、暇だね」

一つ背伸びをして、カインは部屋の風景を眺める。

「まったく。キョウヤもゲーム機くらい買えばいいのに」

殺風景とも取れる鏡夜の部屋を見回し、ため息を漏らす。日本の高校生だというのに、趣味に関する物が全然ない。あるとすれば、居間の隅に積んである魔道書くらいだった。

「どこかに出かける？　ボクも久しぶりにゲームセンターにでも行きたいし」

——そうだな。UFOキャッチャーでぬいぐるみでもゲットしたい気分になってきた。日本に訪れるのは久しぶりなんだし、少しくらい娯楽を満喫しても良いかな。

「別にいいッスけど、家はどうするんスカ？」

「え？」

「いや、だからこの家ッスよ。鍵は鏡夜くんが持ってるし、私達が出かけている間に泥棒でも入ったら大変なことになりそうッスけど」

「……………キョウヤの、馬鹿」

それなりの怒りを含んで、カインは呟いた。

結局、鏡夜は学校に行かなかった。

カインは休憩をくれると気遣ったが、何も得るものがない学校に行っても答えが見出せる訳がない。ただ、心苦しい環境の中で、さらに悩み続けると思ったからだ。

鏡夜は浮浪者のように、街中を徘徊していた。

そして偶然、その人物と出くわした。

「……あんた、こんな所で何をしてるんだ」

「その言葉、そのまま返そう。裁我の抹殺任務はどうした、千堂鏡夜」

天美戒は、表情一つ変えずに、鏡夜を見据えた。

「一度戦闘になったが、逃がした……」

「そうか」

やはり、感情の籠っていない口調で返す。

「……次は、必ず仕留める」

たまらず出た言葉は、明らかに偽りだった。殺せなくなってしまった自分に、裁我を仕留めることなどできない。

——沈黙が訪れた。

しかしその沈黙は、まるで想定外の言葉によって——破られた。

「お前が殺せなくなってしまった原因は『遠近湊』、そして『レイ・ストライト』が関係している」

——一瞬。

ほんの一瞬だが、鏡夜の意識は凍結しそうになった。

心臓が、どくん、どくと早鐘を打ち始める。

「……どうということだ？」

「何の因果か。七年もの間起動しなかった術が、このような偶然を巻き起こすとは。——いや、これはもはや必然なのだろうな」

目を閉じて、初めて感情を含んだ笑みを刻む天美戒。その様は、出会ってから初めて人間らしく思えた。

「——もったいぶるな。一から説明しろ」

魔術師に喧嘩を売っているようなものだが、気にしている暇はなかった。

——おそらく、天美は『真実』を知っている。俺の矛盾行動にしても、俺が殺せなくなってしまった原因にしても。

ただ黙る天美に、鏡夜は苛立ちを覚え始める。

このまま、天美が黙秘を貫くならば、鏡夜は戦っても全てを吐かせようと考えた。だが、星礼会の最高幹部に勝つなど不可能だと、理性が行動を抑えた。

——俺は、天美が応えるまで待つ。

——俺が殺せるようになるために。

——俺の体から矛盾を取り払うために。

——そして、再び存在理由を証明するために。

「——耐えたか」

実に愉快げに、天美戒は呟いた。

「よかろう。お前に全てを教えてやる。だが、その結果は自身で受け入れる」

そうして天美戒は、鏡夜に『真実』を語った。

それを知った鏡夜は、信用してやまなかったレイに初めて憎悪を抱いて。

それを知った鏡夜は、彼女に会わなければならないという衝動に駆られた。

天美の隣をかわして、鏡夜はその場所を目指し、走り出した。

「——これも運命か」

重いため息と共に、天美戒は呟いた。

走って、走って。

走って、走って、走り続けた。

そうして鏡夜は、昨日訪れたK大付属総合病院の正門に佇んでい

た。

「遠近――」

『感情はいらない。全ては終わった』

……結局、あの言葉さえも偽りだった。

偽り続けてきた鏡夜は、憎んでやまなかった存在のおかげで、やつと『答え』にたどり着いた。

後悔も絶望も、もういない。

そう思ったからこそ、鏡夜は門を潜ったのだ。

決定者への告白

——ここは静かだ。

一面が白で彩られた六畳の個室には、遠近湊しかいなかった。

静寂に包まれた白い空間に存在するのは、伽藍となった遠近湊だけ。

湊の見舞いに訪れるのは、決まって父親と母親だけだった。

——それが、酷く悲しい。

——それが、酷く空しい。

こんな時、鏡夜が傍にいてくれたら、などと夢想してしまう。しかしきつと、その機会は二度と訪れないだろう。

夢を失った湊は、空っぽだった。

事実、遠近湊には、もう『何も無い』。

叶えたい願いも、夢を夢見ることも、もうできない。

——なら、自分は存在している意味があるのだろうか。

「……もう、嫌だ」

自虐的になっても、何も変わらないという事は解っている。

しかし湊は、そんな自分自身が嫌いになった。

……治療を受けていたおかげか、腹部の傷はそれほど痛まなくなっていた。

故に、ベッドから降りて窓を開けた。

雲ひとつない青々とした空を眺め——視線を下げる。

この部屋は四階に位置している。頭から落下すると、痛まずに死ぬのだろうか。

いや、痛んでもいい。最終的に死に至るのならば、どれほどの激痛を苛んでもいい。

湊は窓から身を乗り出し——最後に、遺言としてこう言い残すことにした。

「——ありがとう。たったの一週間でも、私の心は凄く満たされた

よ

そうして、湊は窓から飛び降りた。

しかし、不意に、誰かが腕を掴んだ。

「え……？」

湊は上を見上げた。

そこには、思ってもみなかった人物が、腕を掴んだ状態で自分を睨みつけていた。

「馬鹿野郎ッ！」

吐き出す言葉に、遠慮はなかった。

——千堂鏡夜は、確かにそこにいた。

そして、憎悪とも取れる瞳が、湊を捉えている。

「俺を狂わせた張本人が、俺に無断で死のうとするな！ 死ぬなら、俺に罪を償ってからにしろっ！」

鏡夜は、湊の前で初めて感情を顕わにしていた。

片腕一本で湊を病室の中に戻し、乱暴にベッドの上に寝かせた。

「何で、千堂くんが……？」

——もう来ないと思っていたのに。

——決別したと思っていたのに。

「何で——」

「何故、死のうとした？」

湊の疑問に答えず、逆に、鏡夜は問い返した。

「……私は」

震える唇で、湊は本音を吐露する。

「……私は、もう、自分が嫌いになった。記憶を失って、千堂くんの事を知らないと言って……そんな事を平然と口にした自分が嫌になった」

「——」

「もう、傷つくのは耐えられなくなった。これ以上、傷つきたくない」

い。自分から原因を作ってるのに、それを受け入れる勇氣もない。

——だから、死のうとしたの」

「——記憶は戻ったのか？」

湊は小さく頷いた。

「——なら、俺の話を聞いてくれ。遠近の義兄にも関係している話だ」

「え——？」

——なんで、千堂くんが翔義兄さんの事を知っているのだろうか？

湊は、鏡夜に義兄の存在を話した覚えはない。話したくないという理由もあつたが、彼には無関係だと考えていたからだ。

そして、忘却したい過去だからこそ、湊は話さなかったのだ。

鏡夜はベッドに腰を下ろして、湊の方へと顔を向けた。

「俺は、今まで殺人をしてきた」

……突然の告白に、湊は頭がクラツとした。

しかし、鏡夜は気にせず話を続ける。

「この世界には、日常と非日常の境界がある。遠近が『日常』に生きる人間なら、俺は『非日常』に生きる人間だ」

「日常と、非日常……？」

「ああ。——俺は、鬼人という存在してはならない敵を殺してきた。何百回も殺して、殺し尽くしてきた。それが、俺の存在している理由だった。存在理由を認識した俺は、殺すことしかできなくなったんだ。……だが同時に、俺は矛盾した思考を持っていた。

鬼人を殺しても、そうする意味を自問する。非日常に生きる人間なのに、孤独が辛い。——そんな自虐的な思考に陥っていたところを、お前に見られた。そして、それから一週間、お前と一緒に学園生活を過ごした。——ここからが、話の本題だ」

そうして、鏡夜が紡いでいった話に、湊はただ驚愕することしかできなかった。

面会時間が終わり、鏡夜は病室の外に出た。

廊下の壁際に配置されてある長椅子には、五十代くらいの温和な顔立ちをした男性が座っていた。

「……千堂鏡夜くん、だね？」

「そうですか」

「そうか、君が……湊が世話になったね。礼を言わせてもらおうよ」
言って、男性は深く頭を下げた。

おそらく湊の父親だろう、と鏡夜は思った。

しかし、それなら都合が良い。

鏡夜は、遠近家にいた『彼』という存在の詳細を聞き始めた。

「……その話を、どこで聞いたんだい？」

驚愕する湊の父親に、鏡夜はどう話すべきか、少し考えた。

が、父親の方が、「……湊かい？」と、先に口にした。

「……ええ。あの、この事は、湊さんには——」

嘘をつくのがここまで心苦しいものなのか、と鏡夜は改めて痛感する。

しかし彼は、温和な笑みを浮かべて、「いや、いいよ」と手を振った。

「……しかし、あの子が翔の話をするとは。よほど君の事を信頼しているんだろうね。」

——翔はね。優しい子だったんだ。ウチが引き取った頃は、何かに脅えている感じがあったが、それでも、除々に家族と打ち解けていった。……湊ともよく遊んでいたよ。ちょうどこの季節には、湊と二人で雪合戦をしていたなあ」

昔を懐かしむような顔で、彼は語り続ける。

——だが、その顔が、段々と曇っていった。

「……でも、あの病気が再発してから、翔は変わってしまった。何がいけなかったのか、私でも分からない。……それが分からない」

てことは、結局、私は翔のことを分かっていなかったことと同じなんだがね」

彼は力なく笑った。

鏡夜は、裁我が幸せに育っていたことに、少し嫉妬していた。

それでも、湊の父親は、他人である鏡夜に話を聞かせた。

まるで、あの子の痛みを分かってくれといわんばかりに、『遠近翔』の話を続けた。

——鏡夜は、その話を、ただ黙って聞くことしか出来なかった。

正午になった途端、カインが「ボクが昼ご飯を作るよ！」と言い出してから一分が経過した。

「……………冷蔵庫にあるのが栄養ドリンクと牛乳と食パンだけって、どうということ……………!？」

ポツリと呟いた言葉には、明確な殺意が宿っていた。体を小刻みに震わせ、終にはバアンツ！と勢いよく冷蔵庫のドアを閉める。

「カインくん。気持ちは充分に分かるツスけど、物に当たるのは良くないツスよ。……………というより、鏡夜くんの食生活には問題がありそうツスね」

千雨は頭を抱えた。成長期の男性がこれでは、栄養不足になりかねないと危惧したからだ。

「しょうがないツスね。昼食は諦めて、これからの事に関して対策でも練るのはどうツスか？」

「そうだね。キョウヤ抜きでも、勝手に進めちゃおう！」

いきなりハイテンションになるカイン。その、喜怒哀楽がはつきりとした様に、千雨は思わず苦笑してしまった。

「じゃあ、私から質問があるツス」

「うん、なに？」

「ロウアー 観察者自らが、下者の始末を行わないのは何故ツスか？」

千雨の問いに、カインは一つ笑って、

「ああ、彼らの仕事は、文字通り『観察』するだけだからね。ロウアー 下者

のデータを星礼会に提出する。それだけだよ。まあ、観察者の大半は魔術師で、ロウアー下者なんて簡単に殺せるんだけど、それは彼らの行動に入らない。それが星礼会の定めたルールなんだ。勿論、それを破った観察者は――」

こうなる、とカインは手で首を横切らせた。

（という事は、ロウアー下者が道を誤った時、抹殺の任務が回ってくるのは封殺者か、観察者の類に属しない魔術師って事ツスカ）

納得がいった千雨は、次の質問に入った。

「じゃあ、裁我さんとの関係は？」

「――きたね」

そこでカインは、険しい顔つきに変わった。

「まあ、いつかは訊かれると思っていたからね。ボクの知っている限りの事は話すよ。」

カケルとは、二年前に星礼会の本部で初めて出会ったんだ。その頃、ボクは1階級クラスのナンバー10で、カケルも同じく、ナンバー10だった。カケルがミナト・トオチカの義兄だって事は、ボクは独自に調べ上げたんだ。彼は、施設から一般の孤児施設に預けられてそこでトオチカの夫妻に引き取られたらしくてね。彼にその詳細を深く追求すると、キレて本気で殺しにきたけど。

でね、ボクが零階級ゼロクラスの領域に踏み込んだのは、カケルが星礼会から逃走したからなんだよ。当時、ボクとカケルは、どちらが先に零階級に到達できるか競い合ってた。……まあ今になって思えば、その競い合い自体くだらないものだったんだけどね。カケルからすれば、『星礼会に従っている』っていう偽りに過ぎなかったんだから」

当時を思い出したのか、どこかカインの表情は暗い。

そして、その暗い表情を変えずに、最後にこう言った。

「……それにね。カケルは脆いんだよ」

「脆い？」

その言葉だけでは、千雨の用いている『考察』でも理解できなかった。

しかし、カインはやはり笑って、

「ま、二年も経てば、彼も変わってるんじゃない？」

と、強引に話を締め括った。

（うーん。気になるといえば気になるけど、これ以上詮索するべきじゃないッスね）

人間は、誰にでも話したくない事や秘密は持ち合わせている。千雨がカインに心界の事を隠しているように、カインにもその権利はあるのだ。

「コーヒーでも飲むッスか？ 私、淹れるッスよ」

「サンキュ！ 砂糖多めでね！」

と。千雨が台所に移動したその時、ガチャツと玄関の扉が開いた。二人が顔を向けると、そこには鏡夜がいた。

（——『答え』を見出したッスか、鏡夜くん）

千雨の心界——『考察』が、一瞬でその事実を理解させる。

そこに迷いは感じられない。いつもと同じ無表情だが、その黒瞳には確固たる意志が宿っていた。

「——答えは見出せたのかい？」

「ああ」

「そっか。結論に至ったのなら、もう、ボクも言うことはないね」

「ありがとう。心配をかけた」

その言葉に、カインはきょとんと目を瞬かせた。

「……風邪でもあるの、キョウヤ？ 君から『ありがとう』なんて言葉、初めて聞いたけど」

「風邪は引いてないが」

「……ま、いいけど。それよりキョウヤ」

と、カインは鏡夜に詰め寄って、顔を近づけた。

「なんだ？」

「冷蔵庫の中。あれ、どういうこと？」

「なにが？」

「栄養ドリンクと牛乳と食パンだけしかなかったから、昼食が作れ

なかったんだよっ！」

「勝手に人の家の冷蔵庫をあさるな。それより、二人に話す事がある」

「なんスか？」

「さつき偶然、天美と会ったんだが、裁我の本拠地を特定したらしい。」

裁我は、先日俺が鬼人の始末に立ち入ったオフィス街の、今は使われていない廃ビルに身を隠しているらしい。今日の夜には潜入して潰しに行くぞ。そして、裁我が星社会に反逆する理由も全て話す」
鏡夜の存在感は、昨日のそれとは比べ物にならないほど、凄まじく、堂々たるものだった。

しかしこの時、カインと千雨がその『答え』の意味に気づいていれば。

——あんなことには、ならなかったのかもしれない。

午後五時を過ぎた夕刻。

薄暗い廃ビルの地下で、一日にも及ぶ情報整理を行った結果、裁我はその真実に辿り着いた。

「……やっぱり、か」

千堂鏡夜の矛盾した思考と行動。遠近湊との関わり。施設のデータ。そして、鏡夜の元観察者——レイ・ストライト。

これだけの要素が揃えば、答えが出るのも当然といえば当然だった。

「って事は、鏡夜はどうあってもオレを殺せないって訳だな」

裁我は、自身の右腕を見る。

肘から下はもう何もない。しかし右腕が無くとも、鏡夜にもカインにも勝てると確信していた。

元より、裁我はカインとの戦闘で負けたことは一度も無い。『個別戦闘論理』は、データが完全ならば、動作、行動を一瞬で把握し、百手先まで相手の戦闘思考を読むことが可能なのだ。

「……だが」

そう。危険因子は、あの女だ。

おそらく、あの女の魔術師は、鏡夜やカインよりも数段実力が上だろう。それに加え、あの女のデータはゼロに等しい。

封殺者が魔術師に敵うなど絶対にありえない。それが、星礼会の定めた法則であり、絶対的な両者の関係である。

「まあ、その為に用意したんだけどな」

ニヤリと笑い、背後にある大型のカプセルの中に入っている『それ』を見た。

「二年間かけて造ったんだから、少しは役に立つてもらうぜ？」

カプセルをトントンと叩き、『それ』の起動準備に取り掛かる。

裁我は白いロングコートを羽織り、すでになくなった右腕を隠した。

行く場所など、とうに決まっている。

「鏡夜を正常に戻すには、アイツを消せばいい」

そして、今度こそ後腐れなく殺るのだと決意をした。

——彼は歩き出す。

過去と決別する為にも、そして、自分が自分である為にも。

裁我は、廃ビルを後にした。

存在理由

——ある日。

『あの持病』が再発し、以後、少年は病院で寝込みっきりの状態が続いた。

——やっと幸せになれたのに。昔の事を、思い出してしまったからだろうか。

しかし、少年が苦難に苛まれているというのに、少女は元気に学校へ通っていた。

自分が辛く苦しんでいるのに、少女はずっと笑っていた。

——なんで、アイツばかり幸せなんだろう。

——なんで、アイツばかり恵まれているんだろう。

少女が少年の病室を訪れたとき、学校での出来事をたくさん話していた。

幸せそうに、色々な事を、少年に聞かせた。

——ホントウに、幸せそうな笑顔で。

それは、自分には手に入らない笑顔だと、少年はやっと気がついた。

三人がテーブルに着き、少しの沈黙。最初に切り出したのは、カインだった。

「さて。議論の内容は決まっていることだし話してもらつよ、キョウヤ」

今回の議論は、カインが仕切りに回ることではない。話の内容を語るのはあくまで鏡夜だ。故に、カインと先雨は、聞き手に回ることになる。

「まずは、裁我自身のことだ」

鏡夜は、それが一番重要視すべき事柄だと考えて話し始める。

「裁我は感情を持っている。だが、それ自体が不可解な事なんだ」
封殺者とは、感情を殺さなければならぬ人種である。

幼い頃からの地獄のような殺人訓練により、身体、精神を完全に破壊され、ただ『殺す』ことだけを糧に、生きていく。

「裁我の感情変化は、見た限り異常をきたしていた。それは封殺者としてあつてはならない事だ。そして、それは俺にも当てはまる」
はつきりと、鏡夜は自己の在り方を否定した。

しかし、そこに迷いはない。まるで、それを完全に受け入れたかのように。

「でも、ボクにもまだ感情は残っているよ。気に食わないけどね」
カイン自身、それは自分にも当てはまると解っていた。

カイン・エレイスは、喜怒哀楽がはつきりとした封殺者だ。それは、感情が豊かだという証拠なのだ。

捨て去りたいモノだと解っていても、それを捨てることができない。――否、捨てる方法が見出せないのだ。

「施設の連中から感情を捨てろつてずっと教えられてきたけど、それが、どんな事柄において捨てるのかは教えてくれなかったからね、未だに感情が残っていても不思議じゃないんじゃないの？」

喜怒哀楽という感情の中から、どの部類を捨てれば良いのか、鏡夜も、カインも、施設の研究者から一切教わっていなかった。

つまり、教わった意味を理解できていないから、捨てることが不可能なのだ。

「……殺すことだけを考えていれば、おのずと感情は無くなるとでも思ったのかな。それとも――」

「俺達が、例外なのかもしれないってことになる」

鏡夜の言葉に、カインと千雨は同時に視線を向ける。

結論を言えば、感情を失った封殺者は完成作で、カインと鏡夜――そして裁我は、失敗作という仮定がここで生まれた。

「そして、裁我が星礼会に復讐しようとしているのは、それに直結

する。感情が有ったから、星礼会に憎悪を覚えた。過去に刻まれた傷が蘇ってしまい——そうさせた張本人である星礼会を潰すことにしたんだ」

「それはあくまで推論でしょ。それが本当かどうかは解らないよ」
確かに、鏡夜の話はあくまで推論、彼自身の考えでしかない。

しかし、鏡夜はそうであると確信していた。

自分が昔そうであつたから。感情を持ち合わせていたが故に、何度も裁我と同じ答えに辿り着いたのだから。

だから、裁我はこう言つたのだ。

『オレの事を、唯一理解してくれる仲間をさ。この瞬間を、ずっと待ちわびていたんだ……！』

『お前だけは、オレを理解してくれると思つていたのに……！』

『お前も、星礼会を憎んでいるんだろ？ だったら、オレ達は同類じゃねえか！』

あの言葉は、全て鏡夜に向けられたものだった。

つまり、彼は解つていたのだろう。

鏡夜が、星礼会を憎んでいるという事を。

鏡夜が、未だ感情を持つているという事を。

そして、鏡夜が自分と同じ心境にあつたという事を。

（だが、それでも——）

そう。それは現在の鏡夜に当てはまらない。

鏡夜は、もう決めたから。

答えを見出したのだから。

——だからもう、鏡夜と裁我は違ふのだ。

「話は変わるツスけど」

と、千雨は手を上げて初めて口を開く。

「私は、感情を排除できる魔術なら知ってるツスよ」

その言葉に、鏡夜とカインは同時に顔を向けた。

「『想像心界』^{そうぞうしんかい} っていう術なんスけどね。最初に、二人とも心界については知っているツスカ？」

千雨は鏡夜を一瞥する。認識している事をバラすなというアイコンタクトだろう。

「知っているが、俺はまだ認識していない」

「ボクも同じく、だね」

「まあ、それでも話に支障は出ないから大丈夫ツスよ。簡単に言うと、想像心界というのは、心界を認識した人間のみが扱える術ツス。禁忌魔術での総順位では、第一位に値しているツスね」

想像心界——。心界が『存在理由』ならば、想像心界は『存在の証明行為』に部類される。

自身の存在理由を完全に認めたときのみ、これを起動することが可能になり、発動後の一分間、己の内界に宿る存在理由——心界が、存在を証明させる為だけに身体を無意識的に活動させてくれる。

しかし、この術を起動できるのは一度きりであり、心界の証明行為は一分間が上限とされている。そして、その時間の上限を超える^と心界が消滅してしまうと千雨は語った。

「……って事は、施設の研究者達は、その想像心界っていう術の存在を知った上で、ボク達に感情を捨てろって教えてきたつもりなのかな？」

カインの推測に、鏡夜は「いいや」と首を横に振った。

「それが真実なら、研究者達は直接的にそう言えばいい。わざわざ遠まわしな言い方をする必要はないと思うが」

仮に、想像心界という術を研究者達が認知していて、それを踏まえた上で『感情を捨てろ』と教えてきたとしても、その話の本質を語らない以上、鏡夜やカインがそれを理解できる訳がない。

「まあ、これは私の憶測ツスけどね。今は、真に受けない方が懸命かもしれないツス」

千雨は、チラッと掛け時計を見る。現在、午後六時半だった。

「奇襲時間まで、残り二時間を切ったツスよ。そろそろ準備を始め

の方が良いんじゃないツスカね」

「そうだね。キョウヤ、ボクのアタツシケース取ってくれない？
チェインの調整をしたいから」

「ああ」

言つて、鏡夜は部屋の隅に置いてある大型のアタツシケースに
手をやるうとするが――

『ッ！？』

瞬間、三人の表情が凍りついた。

理解できない訳がなかった。彼らは、それ程までに感知能力は低
くないのだから。

「――行くぞ」

「うん」

「はいッス」

だが、それも一瞬だ。行動すべき事柄を判断したからこそ、動揺す
ることはなくなった。

危機感も、焦燥感も――そんなものを用いてしまわない為に存在す
るのが封殺者なのだから。

『彼』は、K大付属総合病院のロビーに足を踏み入れた。

堂崎市に存在する数ある病院の中で、『彼』が最初にこの場所を
訪れたのは、無意識的にこの病院が頭に思い浮かんだからだ。

何年前か前、『彼』もある症状が悪化し、ここに入院していた時期
があった。

心中、嬉々とした様子で『彼』は歩き続ける。

ロビーには、それなりに人がいた。

これから医師に診断を受ける人間。

車椅子を漕いでいる患者。

だが、そんなことは今の『彼』にとってどうでも良い事だ。

歩みを進め、入り口の真正面にある受付に行く。

「悪い。ここに、遠近湊つていう患者はいるか？」

『彼』は受付の女性に、出来うる限り『普通』を装って話しかけた。
…… 苛立ちは感じるが、今は耐えるしかない。

受付の女性は、朝に同じく面会に訪れた男性がいた為か、すぐに病室の番号を思い出した。女性は、礼儀正しく、『彼』の質問に答える。

「はい。第三棟の402号室に入院されております。ですが、面会時間はすでに終わっております——」

しかし受付の女性は、最後まで言葉を言い切れなかった。

否。

すでに彼女は、言葉を放つことは不可能だった。

何故なら、彼女は笑顔を保ったまま首をなくしてしまったのだから。

ゴトンツ、という鈍く重たい音は、床から発した。

一拍遅れて、首の切断面から噴水を思わせるように、大量の血液が噴き出す。

その光景に気づいた者達は、おそらく、思考を停止させられたことだろう。

しかし、即座に現実へと引き戻される。

——人間の首がなくなつたという、ただ一つのリアルへと。

吐き出した本音

マンションの屋上に着いた三人は、状況を確認する。

「方角からして、裁我はK大付属総合病院に向かった。目的は、おそらく湊だ」

その推測に、カインと千雨は同意見だった。

「俺は病院に向かう。詠唱を連続使用すれば、二分程度で着く事が可能だ。」

カインと千雨は、さっき教えた廃ビルに向かえ。あの場所から、強大な魔力反応を感じる。おそらく、性質変換された鬼人だ」

「オツケー」

「了解ッス」

二人が承諾すると、鏡夜は病院の方角に向き――

「SPEED UP」

その意味の通り、鏡夜は一瞬で姿を消した。

「さて、ボク達も行くよ」

「はいッス」

病院とは逆方向にある廃ビルに向かって、二人は高く跳躍した。

景色が高速で流れていく。

空気抵抗を無にした移動は、繁華街の上を通っても、一般人の視覚力では視認できない。

しかしそれでも、鏡夜は移動速度が遅いと感じた。

今、移動している間に、どれだけの人間が殺されているかと思うと気が狂いそうになる。

――そして、それ以上に。

（湊――）

彼女がくれた言葉。

それを無にしてしまうのは嫌だったから。

彼女がいないと、自分は駄目になってしまっから。

——だから。

「絶対に、生かす」

鏡夜の全てを知った湊は、数分間黙り込み、顔を俯かせた状態でした。

その表情からは、絶望以外感じられなかった。

だけど、鏡夜は——こう思う。

彼女と対等になる為には、こうするしかなかった、と。

嫌われるかもしれない。二度と近づくな、なんて言われるかもしれない。

だけど、彼女には聞いてほしかった。

自分を、知ってほしかった。

自己満足のかもしれない。——だけど、それでもいい。

彼女を知ってしまったが故の、必然の行動だと鏡夜は思う。

それ程までに、千堂鏡夜は遠近湊に惹かれていたのだから。

「……千堂くん」

およそ十分間の沈黙を、湊の小さな呟きが破った。

俯いていた顔を上げ、鏡夜と向き直る。

——そこに、迷いはない。

在るのは、真実を知りたがっている顔だけだった。

「千堂は、これから殺していくの？」

「……」

「千堂くんは、本当に殺すことを望んでいるの？」

「……俺は」

核心を突かれ、鏡夜は少し目を逸らす。だが、それが未だ迷って

いるという決定的な証拠だった。

……理不尽に生まれ、理不尽に生きて——そして、理不尽に死んでいく。

そんな生き方を、自分は、本当に望んでいるのだろうか？

今までは、心界を認識したせいだ、という一言で済ますことができた。

——だけど、これから先は、そうはいかない。

自分は、答えを見出したからこそ、彼女に会いに来たのだから。

ここで迷ってしまったら、それこそ自分は滑稽だ。

殺すことでしか、存在を証明できない。

殺すことでしか、生の実感を得られない。

だけど——この少女と出逢って、一週間だけの付き合いでも自分は変わることができたから。

それなら、これから先、まだ可能性は残っているのかもしれない。

「俺は……」

本能が告げる。

本当の気持ちを。

嘘偽りのない気持ちを。

——彼女に伝える、と。

視線を戻す。

そして、口を開いた。

「俺は、殺したくない」

存在を否定するけど。

「俺は、普通になりたい」

自分には、そんな事を言う権利はないけど。

「俺は、お前と一緒にいたい」

そんなくだらない事よりも、彼女と共に在りたかった。

——瞳から、涙を流した。

これで、後戻りはできない。

これで、全てを失った。

でも、そうまでして、普通になりたかったから。

そうまでして、そちら側に行きたかったから――。

鏡夜の出した『答え』に、湊は笑顔で彼の頭を優しく撫でた。

「――泣くことはないよ。千堂くんは、異常なんかじゃないんだから」

掌は、温かい。彼女の温もりは、今の鏡夜にとって必要なものだった。

「何度も殺めてきたとしても、千堂くんは泣くことができるんだから。それを間違いだと解っているんだから。それが、何よりの証だよ。――それにね、千堂くんの涙が見られて、喜んでいる自分がいるんだ。……今、気づいた。千堂くんは、私と一緒にいてことに。」

夢くらい、見てもいいんだよ？ 私達は、夢を見るために生まれてきたんだから」

……一緒。という言葉に、鏡夜は溢れ出す涙で顔を歪める。

これで彼女と対等になれたのだと思うと、さらに涙が溢れてきた。それほど、彼は嬉しかったのだ。

夢なんて、叶わないと思っていた。

夢なんて、幻想だと思っていた。

――だけど。昔、彼女と邂逅した時に教わった、あの言葉を思い出す。

『キョウヤ、夢を見なさい』

自分には無価値だと思っていた言葉。

だけど、その言葉だけは覚えていた。

鬼人を殺した後、いつもその言葉を告げていた。

あの言葉は、自分自身に向かって言っていたことなのだと、今の彼は思う。

鬼人には、『何も無い』から。

だから、それを自分に重ね合わせていたのかもしれない。
それに気づかせてくれたのは、一週間限りの付き合いで終わった少女だった。

「じゃあ、気分を入れ替えようか！」

突然、湊はテンションを上げて、温かな笑みを浮かべた。

「私達、これから名前で呼び合おうよ」

「名前……？」

腕で涙を拭い、鏡夜は聞き返す。

「私は、鏡夜くんって呼ぶから、私のことは湊でいいよ」

「……別にいいが」

「……もしかして、不満があるの？」

頬を膨らませる湊。だけど、そんな彼女も、彼女らしいと鏡夜は
思い、苦笑する。

「わかった。今後はそう呼ばせてもらう」

「うん！」

彼女はこれ以上とない満面の笑顔を見せた。

鏡夜が病院に着いた頃には、事は既に遅かった。

ロビーの中は、人間の死体で埋め尽くされている。鼻を突く異臭
が充満する中、鏡夜は一言だけ呟いた。

「——すまない」

自分があと少し早く着いていれば、こんな大事にはならなかった
のだろうか……。

しかし、今そんな事を考えても仕方がない。この者達への哀れみ
は覚えなかった。

鏡夜が哀れんだ対象は、ここまで墜ちてしまった『遠近翔』だけ
なのだから。

消灯された部屋で布団に包まり、湊は『二人』の事をずっと考えていた。

遠近翔は、自分と同じ『封殺者』だと、千堂鏡夜は言った。

鏡夜は、全てを語った。

封殺者の存在意義。鬼人を殺す為だけに生き、死んで逝くという絶対的な運命。

（義兄さんも、苦しんでたんだ……）

六年前の遠近翔は、現在の千堂鏡夜と少なからず似通った部分があった。

孤独という苦痛を背負って生きていたところも、日常に行くことが不可能だと考えていたところも。

そして、日常に行きたいと想っていた本心さえも。

鏡夜は本心を聞かせてくれた。ならば、遠近翔の本心も聞きたかった。

遠近翔と再会した時、何故、畏怖を覚えてしまったのだろうかと自己嫌悪してしまう。

……湊は、六年前を思い出す。

遠近家に引き取られた時の彼は、少なからず、家族と距離を置いていた。

それは、鏡夜が語った言葉に当てはまる。

『「日常」に生まれた人間と「非日常」に生まれた人間では——考える事も、想っている事も、在り方さえも異なっている』

今なら理解できる。あの雨の日、遠近翔が吐露していた言葉の意味が——理解できる。

日常に行きたいと願っていても、過去に自身の在り方が決定してしまったが故に、最終的には家族になる事を拒んでしまった。

（——でも、まだ遅くない）

鏡夜の話によると、遠近翔はまだこの町に滞在しているらしい。
自分はまだ満足に動けない状態だが、鏡夜は遠近翔の探索を了承してくれた。

近い内に、また会えるのだろうか……。

でも、会えた時には、ちゃんと向き合って話をしようと、湊は心に決めていた。

そう思うと、湊の心は弾んだ。

だから、高揚感があるのだ。

「なに笑ってんだよ」

……不意に、そんな感情を抑えた声が聞こえた。

湊はベッドから身を起こす。

「なにが嬉しいんだよ……！」

『彼』は、湊が笑っているだけで、それが罪だと思った。

「なんで、そんなに幸せそうなんだよッ！」

『彼』は、ついには感情を吐き出した。

「翔、義兄さん……」

『彼』は、湊のベッドに歩み寄り、唐突に首を絞めた。

「あっ……かはっ……！」

彼女は目を見開いて、目に涙を浮かべた。

口元から唾液が垂れる。その苦しんでいる表情を見た『彼』は、どくんつと鼓動が早まった感覚を覚えた。

『彼』はさらに握力を籠める。圧迫し、圧迫し、圧迫する。

——だが、その前に。

ヒュンッ

首を絞めている側の『彼』の首元に、手刀を突きつけられた。

「……鏡夜、くん……」

彼女の涙で滲んだ瞳に映ったのは、いつも通りの、無表情の顔だった。

『彼』は握力を緩め、首から手を放した。

湊は極度に首を圧迫されたことにより、気を失った。

——しかし、彼にとって、そんな事はもうどうでも良かった。

口元が吊り上がる。

心臓が早鐘を打ち始める。

「……オレの思ってた通りだ……！」

歓喜の——それでいて、高揚による震えた声で、『彼』は呟く。

「やっぱり、お前はこちら側の人間なんだ。そうだよなあ？」

『彼』の背後には、憎悪を込めた貌をして佇んでいる千堂鏡夜がいた。

壊れた心

「やめろ」

鏡夜は静かに言った。静寂な暗い部屋に、その一言は確かに響き渡った。

首筋には一振りの手刀。裁我が少しでも動けば死は確実に訪れるだろう。

しかし、動きはしないものの、裁我には余裕が窺えた。

「随分と甘くなつたな、鏡夜。コイツが影響を及ぼしたからか？」

「……………」

「ああ、お前の考えている通りだ。この女がお前を狂わせたんだよなあ？ コイツと関わった十時間後に、レイ・ストライトが施した『言語抑制術』が起動したんだろ？ 大方、抑制言語は『夢』つて所か」

『言語抑制術』——。それは、『記憶操作術』と同じ『禁忌魔術』であり、序列では第二位に値する。

呪文として発した『言葉』を対象の脳に植え付ける。そして、その言葉を信じようとする『キツカケ』が遭遇すると同時に、言語抑制術は起動する。そのキツカケは、植え付けられた本人でも認識できない。さらには、矛盾しながらもその言葉を肯定してしまうという思考混乱に陥ってしまうのだ。

そして、術者が解除しない限り、起動は永遠に続いてしまうのだ。「その術者も、お前が殺しちまったがな」

そう。鏡夜がレイ・ストライトを殺した時点で、言語抑制術の解除は不可能となった。

……鏡夜にとっての『キツカケ』は、二種類存在した。

起動のキツカケとなつた一つは、自虐的思考に陥り、その時に遠近湊が現れたという事だった。

『日常』に生きる人間と接し、遠近湊と『普通』に会話をしてしま

ったが故に、彼女を『一緒』だと思ってしまった。

自分でも、『日常』に行くことができるのではないかと、矛盾しながらも肯定してしまった。

これが、『キツカケ』の一つ目であり、矛盾思考の始まりだった。そして、二つ目。『キツカケ』の最大要因は、遠近湊と出会った二日後に、ある言葉を聞いてしまったからだった。

——『夢』を見続けるためには生き続けるしかないって答えに辿り着くんだ——

その『夢』という単語によって、鏡夜に植えつけられた抑制言語が完全に体へと感染してしまった。

鬼人を殺したら、『日常』に行けなくなるから。

敵を殺したら、『普通』になれなくなるから。

——そして、夢を見られなくなってしまうから。

故に、『殺害』という鏡夜の心界に、『言語抑制術』の抑止力が働いてしまった。

…… 日常に戻り、『普通』になること。それが、レイ・ストライトの『夢』であり、千堂鏡夜が無意識的に憧れていた『夢』でもあった。

しかし、裁我はそんな真実に納得する訳がなかった。

「こんな……。こんな、いつも幸せそうにしているヤツのせいでお前は殺せなくなっちゃった……！　こんな理不尽な真実があったてまるかッ！」

手刀が頸動脈に食い込む。しかし、裁我は死ぬなどとは思わなかった。

だからこそ、彼はこう言える。

「お前はオレと共に在るべきなんだ！　……そうさ、星礼会の連中を全員ブツ殺して、オレ達は自由になるんだっ！　……だからさあ、オレの仲間になれよ！　言語抑制術は、オレがデータを調べ上げて、絶対に解除してやるから……！　お前が星礼会を怨んでいることは解ってたんだよ！　……はあ、はあ……オレ、は、お前、が、必要、

なん、だよッ！」

先日の過呼吸と、今のそれは酷似していた。

裁我は、それ程までに鏡夜が『同類』であると思ったのだ。
『一緒』だと、『仲間』だと、同じ傷を持つ『同類』だと——自分達は『似た者同士』だと、思わなくてはいられなかった。

「俺は、お前とは違う」

しかし、鏡夜は一言で、彼を切り捨てた。

鏡夜は、裁我を完全否定した。

そして今回、その言葉は裁我の感情に大きな変化を齎した。

「俺は『普通』になる。そう、湊と約束したんだ。俺はもう、封殺者じゃない。星礼会の人形でもない。——俺はもう、湊と一緒にんだ」

ピシリと、裁我は脳に亀裂を起こした感覚を覚える。

——一緒。その言葉を向けられたのは、自分ではなく憎んでやまない遠近湊だった。

……ギリツと、裁我は砕ける程に歯を軋ませる。

「……そう、かよ。なら——」

裁我の左手に、強大な体内魔力粒子が収束し始める。

——鏡夜が仲間にならないのなら、手段は一つだ。

「ブツ殺すしかないよなあッ！」

頸動脈に食い込んでいた手刀を強引に払い除けて、鏡夜の胸部を狙い、刺突を繰り返す。

鏡夜は体を左に開き、刺突を捌く。

チラツと、鏡夜は気を失っている湊を一瞥した。

「……ここじゃあ殺しにくいだろ。場所を変えるぞ」

「ああ、乗ってやるよ！ テメエはもう仲間じゃねえ。殺すべき対象だからなあッ！」

鏡夜から教わった廃ビルを目指し、ビル街で跳躍を繰り返していたカインと千雨は、尋常ではない魔力反応を感知した。

「くるよ」

「了解ッス」

カインはアタツシケースからチェインを取り出す。千雨も半眼を見開き、闘いにおいての自己暗示をかけた。

進行方向から高速でこちらに向かってくる『それ』は鬼人だった。フォルムは人型。体は漆黒の色で覆われている。眼球は赤色。これだけで言うならば、通常の鬼人と判断できる。

しかし、体格だけが明らかに異なっていた。三メートルはある巨軀。カインにも劣らない蓄積魔力量。

（……コアが複数埋め込まれているのか？）

カインは咄嗟にそう思った。性質変化を施す魔石といっても、その石につき込める魔力の量には限度がある。

この鬼人の魔力反応からして、コアが二つ、三つ埋め込まれていると考えて良いだろう。

鬼人と二人の距離が十五メートルほどに縮まった時、カインは行動を開始した。

「チェインッ！」

カインの精神硬質が、チェインと同化を成す。意思を持った銀色の鎖は、不規則な動きで鬼人の体に絡みついた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

突然の咆哮。体に食い込んでいくチェインを、鬼人は両腕で強引に振り払った。

「なっ！？」

ありえない自体に、カインは驚愕の声を漏らす。

チェインに流し込んだ体内魔力粒子イナの量は、この鬼人の魔力量を上回ったとカインは確信していたのだ。たかがコアを二つ三つ埋め込んだだけで、自身の体内魔力粒子イナを超える筈がないと思っていた。

しかし現に、チェインと同化したカインの精神硬質が——強引にはいえ——振り解かれたことから、この鬼人に宿っている魔力量は、チェインに流し込んだ体内魔力粒子イナの量を上回っているという

事実を証明していた。

カインは未だ中空にいた。予想外だった。体内魔力粒子^{イナ}を流し込み強化したチェインを、鬼人ごときが振り解くことは不可能だと彼は慢心していたのだ。

鬼人はカインに迫る。空を翔る鬼人の動きは、もはや物理法則など完全に無視していた。

「チッ！」

カインはチェインに意思を伝達させ、咄嗟に鎖を引き戻す。その時には、鬼人は右腕を巨大な鎌に変態させ、三メートルの距離に迫っていた。

（防——！）

カインの前方で、銀色の鎖が蜘蛛の巣を思わせるように幾重にも張り巡らされた。

振り下ろされた大鎌が、一種の『壁』と化したチェインと拮抗する。

ガギギイイイツ、と軋みを上げるチェイン。イナで強化されたにも関わらず、鎌は鎖に微細な罅を与える。

「意志力、100%ッ！」

後方から奇襲を開始した千雨が叫ぶ。最大の意志を以って、首を断ち切るために朱風を疾らせる。

「——ッ！？」

しかし、閃光の如く神速で放った一閃は、左腕であっけなく防がれた。

（100%でも斬れない——！？）

カインと同様に、あつてはならない事態に千雨は動揺する。朱風に宿る殺人意志という精神^{ハードメンタル}硬質が、この鬼人の魔力量に劣っているともいうのだろうか？

そして、驚くべきはそれだけではなかった。この鬼人は、左腕に魔力を収束させ、腕の硬度を上昇させていたのだ。

それは昨日この目で見た、千堂鏡夜の詠唱に似通った業だった。

つまり、それが意味しているのはただひとつ。

この鬼人に埋め込まれているコアには、鏡夜の戦闘理論を組み込んでいる可能性があるということだった。

（考察開始——！）

この時、千雨は心界の活用を開始した。異常なまでの思考速度をもつて、脳内で様々な情報を駆け巡らせる。

（体格は三メートル弱。カイン・エレイスの精神硬質を勝る。チェインへの微細な罅。通常ではありえない巨大形状の鎌。朱風、100%状態による意志力の攻撃を防ぎきる。

解1。カイン・エレイスと工藤千雨の用いる精神硬質を上回っている。追加要素。千堂鏡夜の戦闘データをコアに融合。考察終了まで、残り0・3秒——）

思考を始め、一秒が経過する。考察結果は——

（この数は——！）

その事実には、千雨はただ驚愕の表情を表した。

「カインくん！ この鬼人には、コアが十個埋め込まれています！」

「ええ！？」

軋み、悲鳴を上げているチェインを解き、千雨と共に近辺のビルの屋上に着地するカイン。

「十個つて、じゃあ、その短刀でも斬れない程の魔力量を持つてること！？」

「先ほど100%の意志力を解放しましたが斬れませんでした。あの鬼人に埋め込まれているコアの数は、陽性意志力で言うなら、私達の精神硬質^{ハードメンタル}をも上回っています——」

千雨が言い切る前に、鬼人は二人の眼前に現れた。移動中に魔力が残留せず、また、二人が移動を認識できなかったのは、鏡夜の詠唱——『SPEED UP』を使用したからだろう。

鬼人は両腕を振り上げ、大鎌を倍の速度で振り下ろす。

『チッ！』

二人は同時に舌を打ち、チェインと朱風で防御を取る。

最後の殺し合い

病院の屋上で、鏡夜と裁我は向かい合って佇んでいた。

殺意を剥き出しにしている裁我とは反面、鏡夜は冷静に辺りを見回す。屋上には誰一人いなかった。

「ここなら邪魔は入らない。お前が望む通り、存分に殺し合えるぞ」
この状況で平静を装う鏡夜に、裁我は鼻で笑った。

「殺し合うだ？ お前は言語抑制術の抑止力でオレを殺せねえだろうが。オレも右手を失ったとはいえ、お前のデータは全て把握している。お前の勝率はゼロだって事が解らねえのかよッ！」

的確な言葉を、がなり声で指摘する裁我。

しかし、鏡夜は答えなかった。

そんな事は、何度も体験した鏡夜が誰よりも知っているのだから。裁我を殺せる訳がないというのも、すでに理解の範疇だ。

「そうだとっても、俺はお前を殺す必要があるんだ」

…… たった数時間前の事を思い出す。

—— 殺したくないと言っただけ。

—— 普通になりたいと言っただけ。

(…… 最後の最後まで、偽ったな)

己を嘲るように、鏡夜は薄く笑った。しかし、それもすぐに無表情へと戻る。

—— 自分を狂わせ、自分を救ってくれた遠近湊。

その彼女を幾度となく傷つけた『敵』の罪を赦す気などさらさらなかった。

裁我と湊の過去など、もはやどうでも良い。

鏡夜が裁我を殺すのは、封殺者としての責務ではなかった。

ただ、湊には死んでほしくないという自己満足に過ぎない。

—— それでも。この時、千堂鏡夜は他人の為ではなく、紛れもない自分の意思で行動を起こそうとしていた。

彼女がいなくなれば、自分は駄目になってしまふのだから。

——それ故に。

「これが、俺の最後の殺人だ」

殺せなくとも、殺さなければならないと悟ったのだ。

鏡夜が詠唱を口にする。刹那——裁我の眼前に現れた鏡夜は、首の頸動脈に狙いを定めて、右の魔刀を疾らせる。

「お見通しなんだよッ！」

裁我は身を屈め、いとも簡単に魔刀を回避した。そのまま足を払い、鏡夜の体が宙に浮いた。体が反転して頭から地面に激突する前に、鏡夜は両手を地面に密着させ、逆立ちの状態から右足を振り下ろす。

右足に収束した体内魔力粒子という物質的凶器が、裁我の頭蓋骨を襲う。

（確率、正の解——！）

振り下ろされた右足に対して、裁我は左腕を体の前にかけて防いだ。

両の体内魔力粒子が衝突した。不安定な体勢にあった鏡夜は、両腕の腕力に力を籠めて、バアンツと後方に退く。

しかし裁我は、その戦術を予測していた。

体内魔力粒子を脚に収束し、脚力を上げる。一瞬で鏡夜の懐に入った裁我は、左の魔刀で顔面の破壊を実行する。

鏡夜は首を仰け反らすことで、それを回避した。

顔の上を通った手刀を右腕で掴んで、裁我を宙に浮かせる。

後は、無防備な胸部を穿てばいい。鏡夜は左手の魔刀で刺突を繰り出す。

（——ッ！）

しかし、この瞬間『言語抑制術』が発動した。裁我の胸部を狙った魔刀が、脇を通り過ぎて失敗に終わる。

「馬鹿野郎がッ！」

一瞬の迷いを、裁我が見逃す訳がない。右膝で顎を蹴り上げられた鏡夜は、宙を浮いて後方に五メートル吹っ飛んだ。

「く……ッ！」

顎を蹴られたせいか、脳がシェイクされた感じだった。目眩まで襲ってきて、視界がぼやけて見える。

と、不意に誰かが馬乗りに乗ってきた。

それは裁我以外の誰がいるであろうか。

今にも殺したがっている裁我は、黒い瞳で鏡夜を見つめていた。

「——オレの仲間になる筈だったのに、凄く残念だ」

歪む顔は、憎悪からきているのだろうか。——それとも、本心故の悲哀からか。

「本当に、残念だ。オレは、おま、えが……！ 必要だった、のに……！」

言葉が途中で途切れるのは、呼吸が荒くなってきたからだ。

（クソッ！ こんな時に……！）

鏡夜を殺せるのに。自分に歯向かう敵を殺せるのに。こんなタイミングで、持病の『過呼吸症候群』が襲ってきた。

この持病のせいで、裁我は、星礼会から「使い物にならない」と捨てられ、施設からも追い出された。

理不尽に魔力を認識させられたというのに、封殺者として決定した生き方すら、理不尽に破壊された。

脆い身体、脆い精神——脆い心。

不安なのだ。鏡夜を殺してしまったら、自分はまた独りになってしまう。

同類を殺してしまったら、自分の拠り所がいなくなってしまう。

こんな事になる筈じゃなかったのに……。どこで計画が狂ってしまったのだろうか？

（こんな筈じゃなかったんだ……！ こんな——）
そつだ。こんな事態にした原因は——

「翔義兄さんっ！」

パンツ、と勢い良く屋上の扉が開いた。

（湊……！？）

腹部を押さえながら、乱れた呼吸をした遠近湊が、二人の前に姿を現した。

「もうやめて、義兄さん！ 鏡夜くんを殺しても、何も変わらないよ！」

私が義兄さんを傷つけたのなら、謝るから、だから、鏡夜くんだけは傷つけないで！ 鏡夜くん、殺したくないって言ってたんだよ！？ 普通になりたいって言ってたの！ 義兄さんだって一緒でしょ！ 六年前、泣いていたじゃない！ オレはお前みたいになれないって！ なら、これから『普通』になろうよ！ 三人で一緒に、『普通』になろうよ！」

「……はあ、はあっ……」
裁我は答えない。荒い呼吸を繰り返しながら、ただ湊を見据えていた。

その瞳にあるのは——再び蘇った憎悪と怒りだけだった。
「そうだ。テメエ、が、鏡夜を狂わせた、原因だったな……」

裁我は立ち上がる。

鏡夜は、未だ目眩と、一時的な脳の損傷に苛まれていて立ち上がれる状態ではなかった。

だが、声だけは発することが出来る。

「逃げろ……湊ッ！」

出る限りの声量で叫ぶが、湊は動かなかった。今にも倒れそうな足取りで歩み寄る裁我に動じず、ただ、弱弱しい表情で裁我を見つめていた。

距離が一メートルに迫り、裁我は歩みを止めた。

「——お前が、鏡夜を、狂わせた」

「うん……」

「お前が、オレを、傷つけた……」

「——うん」

「お前は——死ぬ、べきだッ……！」

瞬間。裁我は手刀で湊の胸部を切り裂いた。

——鏡夜の目には、その光景がどう映っただろうか。

服が破れ、鮮やかな朱色が宙を舞った。花が折れる様に倒れ行く湊は、最後に、鏡夜へと視線を移した。

鏡夜は、目を見開いたまま愕然としていて。

最後に、湊は何かを呟いていたようで。

——鏡夜は、その言葉を聞き取ってしまった。

カインは、ビルの屋上で鬼人の猛撃をひたすら防いでいた。

既にチェインは限界が迫っていた。体内魔力粒子で強化したとはいえ、尋常ではない重さを持った鬼人の連撃が、確実に鎖へとダメージを与えている。

鎖が断ち切れるのも、時間の問題だった。己の一部といっても良いチェインが断ち切られてしまうと、カインの戦闘手段はなくなってしまう。

（あと三十秒ッ……！）

千雨が言った『時間稼ぎ』まで、残りわずかだった。それまでにチェインが断ち切られないことを願い、カインは戦闘に集中する。

（信じてるよ、チサメちゃん——！）

たった一つの希望に、カインは全てを委ねた。

千雨はビルの屋上で、両の瞳を閉じて佇んでいた。

短刀——朱風を両手で握り、ただひたすら念じる。

——殺、殺、殺、殺、殺、殺。

たった四年間では、まだ足りない。あの鬼人の魔力量は、それを

も上回っていたのだから。

余分な雑念はいらない。今、必要なのは殺人意志だけだ。

（上回った——）

朱風に籠めた殺人意志と、あの鬼人に宿っている精神硬質の質量を『考察』した結果、前者が確実に上を行ったことを確認する。

（……申し訳ありません、当主。使用します）

千雨は、この世界に満ちている大気魔力粒子に呼び掛ける。ただ純粹に、『集まってくれ』と。

万物の霊長である人類が、古より魔を滅するために行使してきた物質。

万物に支障をきたさない為に存在する大気魔力粒子を使用するということは、逆に言えば、万物に何らかの不要要素が存在している際に、大気魔力粒子が意思を持つて一時的に力を貸してくれるという事だった。

金色の粒子が、朱風の刀身に集まり始める。銀色だった刀身が、次第にその色彩を変えていった。

朱風の刀身が、黄金色に光輝く。それは、大気魔力粒子の根源とも称されている色だった。

「カインくん！ 離れてください！」
叫ぶ。

「オッケー！」

チェインを網状にして防御を取っていたカインは、咄嗟に鎖をフエンスに絡み付け、移動を行った。

鬼人は瞬時に追撃をかけようとする。しかし、自身よりも数十倍の魔力反応を察知したが故か、その方角に顔を向ける。

鬼人が眼を向けた先には、千雨がその構えをとっていた。

「終わりです」

腰を限界まで捻り、充分なタメを作っていた千雨は、まさしく刹那の動作で刺突を繰り出し、それを解き放つ。

「魔穿・終の理——ッ！」

放たれたのは、殺人意志を物質化させた、黄金色に輝く巨大な槍だ。直線上に存在する全てのモノを虚無へと返す、滅殺の一撃だった。

「――！！」
断末魔の叫びすら聞こえず、鬼人の本体と十個のコアは、存在そのものが消滅した――。

「ふう……」

千雨は、その場で大の字に寝転がった。殺人意志に集中し続け、さらには大気魔力粒子^{マナ}を使用したことにより、精神的にも肉体的にも限界が訪れていた。

「おつかれ。チサメちゃん」

上を見上げると、そこにはカインが自分を見下ろしていた。ニコリと笑い、千雨の隣に方膝を立てて座る。

「……凄かったね。さすが『魔術師』だ。ボクなんかとは格が違い過ぎるって実感したよ」

珍しく皮肉を口にせず、カインは自分の本音を吐露した。

「カインくんが時間を稼いでくれたおかげッスよ。私もいい加減、脳負荷に耐えられないッス」

「脳負荷？」

「朱風を扱う際、使用するのは殺人意志のみッスけど、反面、集中力が限界を超えると頭が痛くなるんスよ。先も100%を超える集中状態を維持したせいか、目の前がぼやけて見えるッス」

それは本当だった。人間が深い集中状態を持続できる時間には必ず限度がある。千雨は時間という概念に体性をういている仙人ではないのだ。持続時間は、保って三分程度だった。

「……ボクも、楽しめたことは事実だけど、もっと修行しないといけない――」

途端、カインの言葉が途切れた。

何故なら、先刻の千雨を超える純粋な『殺人意志』が、二人の身体に伝ってきたからだ。

「この殺気……まさか、キョウヤ!？」

ありえないことだった。鏡夜が向かった病院は、このオフィス街から二十キロメートルは離れている。こんな長距離において、魔力でもないただの『殺気』を感知できる筈がないのだ。

だが、逆に言うならば――

「それだけ、鏡夜さんの殺気が異常って事ッスね……」

千雨は身体を起こして、その方角を見る。間違いない。これは紛れもなく、千堂鏡夜の殺人意志に他ならなかった。

「カインくん、急いで向かうッスよ。何かヤバい感じッスから」

「――う、うん」

戸惑いを隠しきれないカインも、千雨が高く跳躍した後、それを追った。

想像心界

遠近湊は、ピクリとも動かなかった。

ただ、斜め一文字に斬られた胸部から大量の血液を流しながら倒れ付している。

千堂鏡夜は、ピクリとも動かなかった。

その小さな少女を見つめながら、ただ言葉を失っていた。

「……はあ、はあ……はあ——くくッ！」

乱れた呼吸が除々に治まり始め、裁我は満足そうに唇の端を吊り上げた。

「これで——これでよかったんだ……！　オレと鏡夜を狂わせた原因が死ねば、オレ達は元に戻る！　もう過去に囚われることが無くなったッ！　何が『普通』だ！　そんなモノになれる訳が無えだろうがッ！　なあ、鏡夜！」

歡喜に震えながら背後を振り返ると、既に鏡夜は立ち上がっていた。

顔は俯いている。表情は読み取れない。

「……ああ、お前の言う通りだ。俺は『普通』になんかなれない。お前が今、それを証明した」

——湊が死んだのなら、『普通』になっても意味がない。

——湊が死んだのなら、『普通』になっても未来はない。

彼女は、最後にこう呟いた。

『義兄さんを、殺さないで』

幾度となく自分を傷つけた相手なのに、何故、そんな綺麗事が言えるのだろうか。

——答えは、簡単に出た。

「……やっぱり、馬鹿だな」

鏡夜は呟いた。

『普通』の世界で生きてきた遠近湊にとって、何度傷つけられても、血が繋がってなくとも——遠近翔は『家族』だったから。

日常と非日常なんかどうでも良い。おそらく、彼女はそう想っていたのだろう。

彼女は、きっと三人は解り合えると最後まで思っていたのだろう。

それを信じていた彼女は、殺されてしまったというのに。

「夢を見せてくれた本人が夢を失うなんて——馬鹿としか言いようが無い」

……鏡夜は、その日々を回想した。

——思えば。夢は、放課後の教室から始まった。

「そうだろ？ オレ達は『日常』なんかに行けはしない！ 六年前、コイツ自身が気づかせてくれた。礼を言わなくっちゃなァッ！」

『遠近翔』は、歪んだ顔で涙を流しながら、遠近湊の頭部を蹴り上げた。

——何で泣いてるのって、自分を心配してくれた。

「湊が笑っていると、俺はどんどん狂っていったんだ」

——彼女はいつも笑っていた。その心に、誰よりも孤独を抱え込んでいながらも。

「それでも、湊は笑っていたんだ」

——笑顔は絶えなかった。雪の降る日、彼女はこう問った。

「俺は湊を否定していた。だけど、俺は湊を肯定していた」

——楽しかった？ 嬉しかった？ 哀しかった？

「——ああ、今でも思う。全部だ」

——楽しくて、嬉しくて、哀しかった。

「だけどな。俺にとって、それは夢を叶える為のカケラだったんだ。だから、俺は——」

それを奪った奴を、どうしても殺したくなったのだ。

裁我は、目の前に在る光景を疑った。

前方に佇んでいる千堂鏡夜が、千堂鏡夜とは思えなくなってしまうのだ。

純粹な殺人意志は、無垢であるが故に封殺者の宿すモノとは思えなかった。

——こんなのは、鏡夜じゃない。

「どう、なってやがる……！？」

齒がガチガチと軋む。見てはいけないと解つていても、その存在感から目を離せない。

死ぬ。死は直前まで迫っている。

背筋に強烈な悪寒が走った。『千堂鏡夜』という人間のデータでは、このような存在感を醸し出すことは不可能だった筈だ。

このままでは、自分は破滅する。裁我はそう直感した。

故に、裁我は鏡夜を殺す為——疾走した。

工藤千雨は、こう言った。

『存在理由を完全に認めた時のみ』、と。

カイン・エレイスは、こう諭した。

『答えを出せ』、と。

天美戒は——最後に、こう告げた。

『抑止力が解ける時間は、起動開始から一分だ。だが、解放したら最後——お前は「終わる」だろう』、と。

「——ああ、夢は終わりを告げた。俺の夢は、この瞬間に消え去った」

裁我が迫る。その疾走に、『個別戦闘論理』を使用しているようには見えなかった。

何もしなかったら、鏡夜は死ぬだろう。でも、鏡夜は何かをする事にした。

それは、子供の頃から教えられてきた行為。逃れられない絶対の運命。

だけど、最後だけはそうで在りたかったから。

「だから、認めよう」

故に、鏡夜はこう口にした。

「想像心界」

——体が異常なまでの活性化を始める。

自分が自分でなくなるような圧倒的な畏怖が鏡夜に襲い掛かる。考える事柄が一つに定まり、しかし鏡夜はそれに全てを委ねた。結局、自分はこうすることしか脳がない存在だった。

湊と過ごした一週間も、封殺者として確立された年月も失う事に

なるけれど。

今は、今だけは。

——この存在を証明しよう——

鏡夜を殺そうとした裁我は、逆に鏡夜によって殺された。

魔力も収束してないただの手刀。だというのに、その手刀は裁我の胸部を勢いよく穿った。

その動作は、ただ流麗で——ただ、美しかった。

鏡夜の右腕が、赤色を帯びていく。

『何も無い』鏡夜は、胸部を突き刺したままの裁我を、フェンスの外に投げ飛ばした。

……何も、感じない。

今の鏡夜は、慈悲というものを覚えることすらできなかった。

——悲哀も、憎悪も。

遠近翔の味わってきた苦痛も。

遠近湊の背負ってきた孤独も。

そして——自分の存在している意味さえも。

感情が無くなれば、それを感じることができなくなるのも当然だった。

『何も無い』鏡夜は、夜空を仰いだ。

月は、キレイだった。

でも、どんなに神々しい輝きでも、こうなってしまった自分を癒してくれることは決してありえない。

——最後に。

——夢は、叶わないから夢っていうんだな——

意識のか、無意識のかは定かではないが、そう思えた鏡夜は、地面に倒れた。

エピローグ

再度重傷を負った遠近湊は、二週間後に予定されていた退院が取り消しになり、次いで三ヶ月の入院生活を余儀なくされた。

胸部を斜めに斬られた傷跡は、一生の痕になるらしい。

これで、湊が負った傷は三つになった。

あれだけの大怪我を負ったのに、まだ生きている自分も相当しぶといな、などとベッドの上で考える。

その三ヶ月の間、両親の他に二人の見舞い人が病室に来た。

最初に訪れたのは、銀髪に碧眼、湊より少し身長の高い、外国人の少年だった。

「来る予定はなかったんだけどね。帰国する前に、ちょっとだけ言い残したかっただけだよ」

いかにも不機嫌そうに言う少年は、名前を名乗らなかった。

「君がキョウヤにどんな影響を齎したかなんて、ボクは知らない。だけどね、あんな風になった彼を支えられるのは、唯一、キョウヤが心を許した君だけだとボクは思った。だから、一生をかけて癒してあげて。ボクから言えるのはそれだけだ」

そう言って、少年は病室を後にした。

その二日後。今度はポニーテールに半眼無表情の少女が訪れた。

「……あー、なんていうんスカね。まあ、事は全て終わったんスけど、終わり方が苦々しいというか」

面倒臭そうに頭を掻き毟る少女は、名前を名乗らなかった。

「一般人である貴女に語れる事は限られているんスけどね。今の状況を簡単に説明すると、鏡夜くんは生きている意味を失ってしまったんスよ。それと同時に、存在理由というモノが消滅したため、思考、言動、行動が行えなくなってしまうたんス。脳は活動しているけど、この三つが行えない——有り体にいえば、昏睡状態に陥って

しまったッス。鏡夜くんを止められなかった私達にも責任はあるん
スけど……もう、全てが遅いッスね。でも、貴女にだけは希望を捨
ててほしくないッス。これからは、貴女が鏡夜くんの拠り所になっ
てほしいッス。鏡夜くんの夢を、簡単に終わらせないでくださいッ
ス」

深く頭を下げ、少女は病室を後にした。

三カ月後。――冬の趣が消え去り、春の趣が見え始めた三月の終
わり、遠近湊は退院した。

とはいっても、まだ負った傷跡は完治していない。「過度な運動
は禁止」と主治医にも告げられ、しばらく通院もしなければならな
い。学園に通うようになるのも、まだまだ先のようだ。

その間、湊は彼のお見舞いに通っている。花屋で香りの良い花を
購入して、週に三回、その病室を訪れる。

病室の扉を開ける。

鏡夜は、ベッドで目を閉じて静かに眠っていた。

「こんにちは、鏡夜くん」

笑顔で挨拶をするが、返事は返ってこない。

「今日はね、香りの良い花を買ってきたの。後で、花瓶の水を替え
ておくね」

笑顔で話し掛けるが、返事は返ってこない。

「私ね、また学園に通い始めたら、友達を作ろうと思うんだ。皆で
笑いあつて、楽しい学園生活を送ろうって決めたの」

千堂鏡夜は、何も無い顔のままだ。

「……今更だけどね、私、鏡夜くんが好きだったの。あの一週間は、
私にとってかけがえのない宝物だったんだよ。」

――私、信じてるよ。鏡夜くんが、また学園に来てくれるって。
前みたいに孤立しても、私が話し掛ける。私が鏡夜くんの拠り所にな
る。それが、あの人達から受け取った言葉だから。

だから、私はそれを裏切らない。何年経っても、おばあちゃんに

なつても、私は鏡夜くんの傍にいる。約束する」

出来うる限りの笑顔を見せながら、湊は泣いていた。

鏡夜は、もう三ヶ月も眠り続けたままだ。

生きているのか、死んでいるのか判らないほどに、彼は全てを失った。

何故、遠近翔を殺したのかも、湊には判らない。

そして、どんな事を想って、どんな決断をして、あの様になったのか湊は知らない。

しかし、湊は最後まで彼の傍にいて、彼を想い続けると、そう決めた。

その決意が、現在の遠近湊を突き動かしていた。

辛いことも、悲しいことも、これからたくさんあるだろう。

しかし最後まで、湊はその時が訪れるのを信じ続ける。

こんなところで終わってしまったはいけないから。

夢の続きは、きっと存在すると信じたが故に――。

突然の来訪者

——今日は、黒堂学園の卒業式だ。

とおちかみなと

遠近湊は、内心高揚感を覚えながら、今直面している問題と向き合っていた。

自室で母親に購入してもらったスーツを着てみたのだが……似合わないと思えてならなかった。

元より、身長が低い所為か——それでも二、三センチは伸びた——百五十センチにも満たない身長である自分がスーツなど着てもおかしく見えて仕方がない。一番小さいSサイズのスーツでも裾も袖も長いのだ。これでは、卒業式で笑い者になるのではないだろうか。高揚している反面、不安さえも感じながら湊は鏡をじっと見つめていた。

「やつぱり、おかしいよね……」

と、無意識にため息を漏らしてしまう。自分はもう十八歳になるなのに、何故こうも子供っぽい外見が変化しないのか。日課として牛乳瓶を一本飲んできた成果は全く現れていなかった。

「湊、そろそろ時間よー、……ってあらあら」

とおちかみこと

自室に入ってきた湊の母親——遠近美琴は、娘のスーツ姿を初見すると微笑を浮かべた。

「似合ってるじゃない。私服だと子供っぽいのが拭えなかったけど

——うん、大人っぽく見えるわよ」

「……お母さん、あからさまなお世辞に聞こえるんだけど」

「そんなことないわよ？ スーツっていうのはね、例えば身長が低くても大人っぽく魅せる効果があるの。私だって、湊くらいの歳では百四十五センチしかなかったもの」

「そうなの？」

初めて耳にする母親の暴露話に、湊は内心喜びを覚えた。

「ええ。それでね、学校でお父さんにその姿を見せると、『似合っ

てるじゃないか』って言ってくれたの。今思えば、あの言葉で私はお父さんに惚れたのよねえ」

昔を懐かしむように、美琴は遠い目をする。

(……そっか。お母さんは見せる相手がいたんだ)

反面、湊はその話を聞いて、多少ナイーブな気分になった。ちゃんと感想を言ってくれる相手がいることが羨ましくてならなかったからだ。

そんな湊の思惑を察したのか、美琴は思案した後、こんな提案を出した。

「湊、化粧とかしてみない？」

「え？」

「子供っぽく見られるのが嫌なら、化粧で勝負するしかないわ。大丈夫、お母さん、自信あるから！」

「でも、見せる相手なんて——」

と、そこで湊は、その『見せる相手』の顔が頭に思い浮かんだ。すぐに美琴と向き合い、「やる。お願い！」と肯定した。

黒堂学園の卒業式は、長く思えて短い時間だった。

卒業証書を手に、湊は校門前で二人の学友達と話をしていた。

「でも、こう見ると湊も大人っぽくみえるよね。うん、普通に美人に見えるよ」

「というか、元々素材が良いからね。これで身長さえあれば文句なしなんだけどなあー」

「そ、それは言わない約束でしょ！ 大丈夫だもん、これから伸びるから！」

この一年で親交を深めた友人達。その最後となる会話を、湊は大事に、心に刻みつけていた。友人達からしたら他愛のない会話かもしれない。しかし、遠近湊にとってはかけがえのない、大事な親友達だった。

——だからだろうか。その笑顔が段々と曇り、ついには涙を流し

てしまったのは。

「……って、湊！？ 何で泣いてるのよ！」

「だ、だって……これでお別れだと思うと、凄く悲しくて」

「何言ってるのよ。お別れなわけじゃないじゃない。そりゃあ、これから皆で会える機会は少なくなるけど、最後の別れって訳じゃない……って、湊が泣くから、私まで泣きたくなってきたじゃない！」

「あはは、おかしいな。私もちょっと……」

気づけば、三人共涙を流していた。しかし湊はそれが嬉しかった。

——良い友達を持ったな、私。

自分の為に泣いてくれる人がいる。

自分を想って泣いてくれる人がいる。

——だから、湊は人との関わりを持って良かったと心の底から思ったのだ。

友人達と別れて、湊は堂崎市の中枢からバスに乗車した。

行く場所はただひとつ。——K大付属総合病院だ。

湊が化粧をした本当の理由は、大人っぽく見られたいからではない。

——ただ、彼に、彼だけに見せたかっただけなのだ。

彼は一年経った今でも、まだ目を覚ましていない。一面が真っ白な色彩で覆われた病室で、ひとり眠っている状態だった。

湊は週に三回、彼の病室を訪れていた。

部屋を訪れては、色々な話を彼に聞かせてきた。

友人が作れたこと。僅かに身長が伸びたこと。料理が上手になったこと。

色々な話を、眠り続けている彼に聞かせてきた。

その話が、彼に伝わっていないと知っていながらも。

『……一年前、ある出来事をきっかけに昏睡状態に陥った『千堂鏡夜』。』

自分は非日常に生きる人間だと吐露した、誰よりも孤独を抱えて

いた一人の少年。

一度、自分と決別し——そして、最後には分かり合えた一人の少年。

そして、彼が昏睡状態に陥った後、湊はある二人から言葉を授かった。

『一生を賭けて彼を癒してあげて』

『鏡夜さんの投げり所になってほしいッス』

その言葉を胸に刻みつけ、湊は今日まで生きてきた。

辛いことは沢山あった。

鏡夜が不在した学園生活。

鏡夜の存在しない毎日。

精神的に病みそうになったことも幾度となくあった。しかし、それでも、湊は下を向いてはいけなかった。

それは、鏡夜を狂わせた彼女の罪であり、責任であったが故。

鏡夜の存在理由を破壊してしまったのは、紛れもない自分自身なのだ。

だから、湊は前を向かなければならない。そうで在れなければならない。

（よし、今日は面会時間ギリギリまでお話ししよう）

バスの中で、湊はぐつと拳を握り締めた。

K大付属総合病院に到着し、湊は千堂鏡夜の病室を訪れた。

コンコン、と二回ノックをして、笑顔で室内に入る。

「こんにちは、鏡夜く——」

しかし、その言葉は途中で途切れた。

その理由は二つあった。

それは、今まで誰も鏡夜の見舞いに訪れる人物がいなかったのに、鏡夜の寝ているベッドの隅に、一人の少女が座っていたからだ。

「——ああ、遠近湊か」

鏡夜を眺めていた少女は、首を回して、湊に視線を定めた。

湊はただ愕然とした。それは、この少女が千堂鏡夜だと思えてならなかったから。

それが錯覚だと理解してしながらも、この少女と鏡夜を重ねてしまった。

絹のように流麗な長い髪。墨で彩られたかのような漆黒の瞳。身長は女性にしては高く、百六十五センチほどはあるだろう。

——そして。何より印象的なのは、その表情だった。

何も感じさせない、何の感情も抱かせない無表情は、千堂鏡夜と似通っている。

——否、全くの同一だった。

故に、湊は少女という存在から目が離せない。それ以上に、鏡夜が目覚めたなどという混乱状態にも陥りそうになる。

「お前が来る前には帰るつもりだったんだが、そう上手く事は進まないな。私としても、お前とは会いたくもなかった」

独り言のように呟く少女。その、感情が籠っていない口調まで、鏡夜と瓜二つだった。

少女は鏡夜に視線を戻し、独り言を続けた。

「視た限り、鏡夜は心界を失っているな。一年前の殺し合いで『想像心界』を使用したのなら、そうなってもおかしくはない。……心界の消失によって昏睡状態、か。あれを実行するには相応の覚悟が必要とされる。それを実行させた根源とも言えるのが、お前というわけか」

ジロリ、と扉の前に立ち立ち尽くしている湊を睨み付ける少女。

「だが、お前を殺すわけにはいかない。鏡夜が信じ、拠り所として認めたのは紛れもない遠近湊——お前らしいからな」

少女はベッドから腰を上げ、静かな足取りで湊に歩み寄る。

「あなた、誰……？」

気づけば、湊はそう口にしていた。

少女は湊の前で立ち止まると、無関心げに返答した。

「封殺者、千堂裏魅^{せんだつりみ}」

千堂裏魅

千堂裏魅と名乗った少女を、湊は愕然とした表情で見上げた。内に沸き起こる感情は、言葉では言い表せない程の混乱。

そんな湊の様子を、無愛想な顔で見下ろしている裏魅は、一つ、眉を顰めた。

「そんなに驚く事か？ お前は非日常の世界に関しての情報は鏡夜から聞いている筈だ。封殺者、鬼人、施設。そのどれも、お前は認知していると思っただけだ」

湊の心境を理解していないような——それとも、理解していてワザとはぐらかしているのか——は判らないが、裏魅は素朴な疑問を抱いたかのように言った。

対して、湊は未だ混乱状態の思考を安定させるように小さく頭を振った。

「あ、あの……あなた、今、千堂って言いましたけど——」

消えそう声で問いかける湊。裏魅はああ、そういう事か、湊の心意を悟ったかのように呟いた。

「私は、鏡夜の妹だ」

「妹——」

しかし、湊は裏魅の発言に疑念を抱いた。

千堂鏡夜という封殺者は、物心が付いた頃には、既に施設で暮らしていたはずだ。彼自身、妹がいると口にした事はなかった。

鏡夜がそれを明かさなかったという可能性も考えられる。しかし彼は——

「鏡夜くんは、女の子と話した事が全然無いって言ってました」

そう。鏡夜と邂逅した翌朝の事だ。彼は、自分との会話の際、異性を話した事が殆ど無いと口にしていた。

この千堂裏魅という少女が妹という存在ならば、接する機会などいくらかでも在った筈である。

ならば、鏡夜が嘘をついたのか。

ならば、この少女が偽っているのか。

しかし、湊の言葉に、裏魅は面倒臭げにため息を漏らした。

「それは当然だ。鏡夜は、私の事を忘れているから」

自然すぎる口調で、裏魅は言った。

「鏡夜が施設に入っただのは五歳の頃だな。それと同時に、鏡夜はそれまでに培ってきたエピソード記憶の全てを消去させられた。だから、私の事を覚えていないのは必然なんだ」

口調は変わらず自然だが、裏魅の顔には、どこか悔やむような感情が窺えた。

「鏡夜は千堂家の事、私の事——五歳までの全ての記憶を抹消された。禁忌魔術、第四位である『記憶操作術』によってだ」

理解が追いつかないが、湊はその話を黙って聞いていた。

「その後、施設に入っただ鏡夜は、レイ・ストライトによって思考原理に矛盾を植え込まれ、殺害という心界を認識し、鬼人を殺し続けてきた。だけど——」

と、裏魅は扉をバァンツと叩いた。

「お前の所為で、鏡夜の全てが狂った。お前が現れなければ、鏡夜は殺し続ける事が出来た。お前が現れなければ——鏡夜は、こんな事にならずに済んだ」

それは、本心ゆえの憤慨。

鏡夜の存在理由を知っていた者だからこそ、内から発生する純粋な怒りだった。

「だけど——」

裏魅はため息と共に、昂り続ける怒りを抑えた。

「さっきも言った通り、鏡夜がお前を抛り所とした以上、殺すわけにはいかないんだ」

それは、どれ程辛い真実だっただろうか——。

湊は何も言えず、ただ立ち尽くしている。

湊は何も返せず、ただ過去を思い返していた。

（私は、鏡夜くんを、狂わせた）

そんな当たり前の事実を、裏魅の激昂の言葉によって再認識する。

（でも、私は――）

そう、それでも。

「私は、鏡夜くんの傍にいろって決めました」

それは、自身への誓い。

千堂鏡夜を狂わせてしまったが故に、責務として認識した真理。

「あの二人の伝言でもあるけど、私自身、鏡夜くんが目覚めるのを待つつて、一年前に決めました」

真っ直ぐな眼差しで。

嘘偽りの無い口調で。

湊は、自分の本心を述べた。

「――そうか」

裏魅は、その幼さの残る眼差しを受け入れた。

「……鏡夜の選択は間違っていなかったようだな。お前がその逆の言葉を言ったら、殺してやるつもりだったか」

そうして、裏魅はその口に薄い笑みを刻んだ。

まるで、その言葉を待っていたと言わんばかりに。

「その答えを聞けただけでも、来た甲斐があつた」

そうして、裏魅は湊を押し退けて扉を開けた。

「――近い内、また会う事になりそうだ」

そう言い残して、千堂裏魅という封殺者は病室を後にした。

初めての未知

三月二十八日。午前十時三十分。

工藤千雨は、一年半前まで住んでいた工藤家の屋敷の縁側前の廊下で、気怠げな表情をしながら大の字で寝転がっていた。

「うーん、この太陽の眩しさが何とも言えない快適さッスね。眠くなってきたッスよ」

顔を緩ませて、半眼状態のまま呟く。久々の休暇で屋敷に帰ってきた千雨は、存分に日向ぼっこを楽しんでいた。

「おい、千雨」

傍らで、そんな怒気の籠った声がした。

千雨が視線を上向けると、そこには彼女の父であり、工藤家の宗主である工藤王弦が立っていた。

「なんスか、宗主。人の日向ぼっこを邪魔して。久々の休暇なんスから、一人にしてくれないッスか？」

「お前はいつでも休暇状態であろうが。この一年で星礼会の任務を担った事があったか？」

「一年前に担ったじゃないッスか」

「一度だけだろうが！」

太い眉を吊り上げ、がなり上げる王弦。

そう。千雨が星礼会に所属して、任務を承諾したのはたったの一度だけだった。一年前の、あの出来事以来、彼女は任務はおろか、鬼人の一体も殺してはいないという不始末だ。

「千雨。何の為に、私がお前を星礼会に所属させたと思っておる？」

「世界の為に働け、じゃなかったッスか？ 何回も聞いて、既に耳ダコッスよ」

大の字に寝転がったまま、うーんと両手両脚を伸ばす千雨。

「大体、世界中にいる他の封殺者が鬼人を殺してくれてるんスから、私の出番なんてないッスよ。というか、面倒すぎてやってられない

ツス」

千雨は心の底からそう思っていた。自分が戦いに赴いても、わずか十秒で鬼人一体を殺せるだろう。ならば、未だ成熟していない『未完成』の封殺者に鍛錬として戦わせるのが一番だ。

「――ほう」

その言葉を聞いて、王弦は少し口元を吊り上げた。

「なら、星礼会の任務ではなく、私からの任務を授ける」

「はい……？」

思いもしなかった言葉に、千雨は思わず半眼を少しだけ開いた。

王弦は一つ咳払いをして、

「堂崎市へ行け」

命令を下す者の顔つきになり、そう言った。

その瞬間、千雨から気怠げな表情が消えた。いつのも無表情ではない。

それは、その言葉の真理を見抜いたが故の無表情だった。

「――鏡夜くんは、何かあったんスか？」

尋ねる口調は、ただ冷淡だ。

「お前も知つての通り、千堂鏡夜は昏睡状態に陥り、K大付属総合病院に入院している。そして、昏睡状態である隙を狙って、彼の中』に有る物を奪取しようと目論んでいる存在がいる」

「『王』の一人ってわけツスか……」

千雨は腰を上げながら、頭をガシガシと掻き毟る。

「……鏡夜くんも難儀ツスね。まあ、彼が死ぬのはいただけないツスから、別に良いツスよ」

そうして、千雨は立ち上がり、王弦の隣を静かにかわした。

その表情は、既に魔術師の持つ面構えだ。

立ち去って行く千雨の様子を見据えていた王弦は、小さな笑みと共にため息を漏らした。

「……まったく。昔から、彼の事になると真剣だな、千雨よ」

三月二十九日。午後十時半。

遠近湊は、大学の入学式まで暇を持て余している時間が続いていた。

家に居ても退屈という理由があり、現在、湊は繁華街を一人で散歩していた。

この時期、同じく高校を卒業した若者や、春休みに突入している学生の姿も見受けられる。誰もが友人と共に行動している中、一人で散歩している自分がどこか恥ずかしく思えてくる。

そして、それ以上に、湊の心は憂鬱な状態だった。

（千堂、裏魅さん……）

二日前。鏡夜の病室で邂逅した、一人の封殺者。

千堂鏡夜が目覚めたと錯覚させた、一人の少女。

「妹……」

彼女は、鏡夜の妹だと言った。

鏡夜が施設に入る以前の記憶を失くしているとも——言った。では何故、彼女は今になって姿を現したのだろう？

湊は、K大付属総合病院の看護師に、この一年で自分以外に千堂鏡夜の見舞いに訪れた人物がいるか尋ねた。しかし、自分の他に見舞いに訪れたのは二日前——千堂裏魅^{せんどうりみ}だけだと言っていた。

ならば、彼女が鏡夜の元に姿を現した理由は何なのか。

一年間も実の兄を放っておいて、今になって現れた意味は何なのか。

（うーん、全然分らない……）

そもそも、彼女が話していた事が真実なのかどうかすら疑問に思えてくる。

でも、存在感が千堂鏡夜と瓜二つだったし、病室で激昂した姿は、

本当に鏡夜を心配したが故の表れだった。
そして、去り際に残したあの言葉。

『——近い内、また会う事になりそうだ』

……あの言葉は、何を意味しているのだろうか。

「あー、もう、気になって仕方がないよ……！」

訳の解らない事を考えすぎたせいか、除々に苛立ちが積っていく。
と、そんな湊の様子を不審に思ったのか、周囲にいた人々から多くの視線を向けられた。

「あ……」

視線を向けられた事により、気づき、湊は赤面させた。
そして、恥ずかしさのあまり、逃げるように繁華街を後にした。

「はあ、恥ずかしかった……」

人気の無い河川敷公園に着き、傾斜のある芝生に体育座りをする。
そして、何の意味もなく夜空を仰いだ。

今夜は月の姿が無く、空は暗雲で覆われていた。どこか不快感を感じさせる夜空。湊はそれを呆、と見つめながら、一時の間何も考えずにいた。

——しかし、だけど。

それが現れたのは、突然すぎた。

「え——」

何か、得体の知れない感覚を胸の内に覚え、彼女は何の意味もなく左右を見渡した。

しかし、それには明確な意味が在った。

「なに……あれ？」

黒い。ドス黒い色彩をした人間が、赤色の眼でこちらを静かに見

据えていた。

体格は成人男性と同一。しかし、あれは人間ではない。湊は直感的にそう感じた。

「あ、あ——」

そして、右腕が死神の持つ鎌を象っていた。それは、一般人である湊を危機的心理に追い込むには十分な代物だった。

湊は立ち上がってその場から逃げようとしたが、足が竦んでその場に転んだ。

その一瞬後に、その漆黒色の存在は湊の前に居た。

そして、漆黒色の存在は右腕の鎌を振り上げた。

（あ——）

死ぬ。死は直前まで迫っている。

一般人である湊でも、そんな当然の事が理解できた。

鎌が振り下ろされる。

湊は両目を強く瞑った。

しかし——痛覚は襲ってこなかった。

鎌によって体を貫かれた痛みは、無かった。

「——全く。自分から死に行くな。遠近湊」

傍らで、そんな細い声がした。

湊はゆっくりと両目を開いていく。

そこには、一人の女性がいた。

それは、二日前に出会った、一人の少女だった。

たった一本のナイフで、鎌を防いでいる千堂裏魅が——そこにいた。

遠近湊を形作っているモノ

一振りのナイフは、巨大な大鎌を受け止めていた。——いや、いなしたという表現の方が適切だろう。

大鎌が振り下ろされたとき、すでに千堂裏魅は湊の隣に佇んでいた。そして、自身の握っているナイフも大鎌と全く同じ速度で振り下ろした。

速度を緩めず、しかし除々に大鎌にナイフを接近させていき、ナイフの刀身に大鎌の刃が触れた瞬間、数センチだけナイフを逆に振り上げた。つまりは、『大きく振り下ろした大鎌』に蓄積されていた運動量、質量を、『ナイフの刀身を少しだけ振り上げる』という一瞬による運動量によって無効化したのだ。

それは、武術の世界においても通ずるものがある。相手の大きな力を、一瞬の動作によって利用するというのは、合気道の技ではかなりの種類が存在する。

しかし、この技は合気道ではないし、武術でもない。

千堂家において開拓された、新しい剣術であった。

「——遠近湊、少し離れてろ」

未だ茫然自失としている湊に、裏魅は後退の命を告げる。

「あ、あ——」

しかし、湊の両足は完全に竦んでしまっていた。未知なる生物と遭遇し、さらには殺されそうになっているのだ。一般人である湊にしてみれば、恐怖心が心を侵すのは当然と言っても良い。

「……仕方ないな」

そう、ため息混じりに呟いた裏魅は、ただ一言、こう口にした。

「——動作超越・Level 1」

瞬間、いなした状態で硬直していたナイフが、大鎌を一刀の元に両断した。

瞬間的——いや、刹那的に振り上げられたナイフ。その動作速度

は人間に視認させることさえ許さない。もはや音速に近い動作だった。

「一つ」

裏魅が呟く。

その一瞬後。

「え——？」

湊は、鬼人の身体が綺麗さっぱりと消失した事に気づいた。一瞬前までは確かに自分達の前にいたのに、今では存在そのものが消え去っていた。

——しかし、やはりその一瞬後。

ぐちゃっ、という無気味で奇怪な音は、湊の背後から聴こえたものだ。

……ゆっくりと振り返る。

そこには、バラバラに成った鬼人の肉片が転がっていた。切断面からは黒い粒子のようなものが噴出しており、それは夜の空へと消えていく。

「終わり」

裏魅の冷たい声で、背筋に怖気が走る。

「……もしかして、鬼人を見るのは初めてなのか、遠近湊？」

小首を傾げ、素朴な疑問を問うように裏魅は尋ねた。

「——こ、これが鬼人……なんですか？」

鏡夜の話である程度の知識は知っていたが、彼はずっと、こんな生物と戦ってきたのか？

こんな、断じて人間と言えない無気味な生物を、殺して、殺して、殺し続けてきたのか？

（なら、これが……）

湊は実感する。

そう、きつと、この状況こそが。

鏡夜の言っていた、『非日常』だ。

「お前が襲われたのは偶然だぞ、遠近湊」

鬼人の残骸を直視して言葉を失くしている湊に、裏魅はそう言った。

「——この町に来るのは初めてだけど、どうもこの河川敷公園はおかしい。『質』が狂っているともいえるな」

刀身を仕舞ってナイフをポケットに突っ込んだ後、裏魅は「立てるか？」と湊に手を差し出した。

「あ、ありがとうございます」

どこか顔色が優れないが、湊は裏魅の手を握って立ち上がった。

「それにしても——」

と、裏魅は訝しげな視線を湊に向ける。

「お前、本当に一般人か？ 初めて鬼人を見て、残骸まで直視してよく平静を保てていられるな」

「そ、そんな事ないですよ。凄く怖かったです」

「マトモな声を発している事自体、平静を保ててるって証拠だよ」
ふん、と小さく鼻を鳴らした裏魅は、湊に背を向けた。

「お前は早く帰れよ。一般人なら、一般人らしく平和に生きる」

「り、裏魅さんはどうするんですか？」

「私はここを見張る。というか、ここが私の家だし」

「……………はい？」

意味の解らない言葉に、湊はかなり間をおいて返した。

「だから、ここで野宿してるんだよ。金銭は電車でこの町に来る際に全部使っちゃったし、ホテルの宿泊代もないし、この公園で寝泊りしてるんだ。けっこう芝生の感触が柔らかくて、よく眠れるしな」
「……………え、えーと。つまり、さっき助けてくれたのは——」

「ああ、寝てる最中に鬼人が顕現して、さっさと殺そうとしたときにお前がいた。それだけ」

「——」

何かもう、非日常に生きる人達の思考は、自分とは本当にかけ離

れているんだと思う。

こんな公園で野宿して何の不満も覚ええないのは、一種の才能かもしれない。

しかし、たとえ他人であつても『知り合つた』という点において、湊が彼女を放つておけるはずもなかった。

「――裏魅さん」

「なんだ？」

すでに、裏魅は芝生の傾斜に横たわつて眠りに着こうとしている。返つてきた声もどこか柔らかい口調だ。

「私の家に行きましょう」

それは、湊にとって、そして裏魅にとつても突拍子のない言葉である事に過ぎなかった。

裏魅は首だけを湊に向ける。完全に予想外な発言だったのか目を瞠つていた。

湊は続ける。

「こんな所で寝たら風邪引いちゃいます。それに、さっきみたいに鬼人が現れたら――」

「鬼人なんて『今の敵』に値しない。顕現したら即行で殺すし、問題視する事じゃないよ」

「で、でも――」

言い淀む湊に、裏魅は腰を上げて芝生の草をブチブチと引き千切り始める。

「――遠近湊。お前さあ、今まで何度後悔してきたんだ？」

「え――？」

突然の質問は、心の奥底を覗かれた気がしてならなかった。

「義兄である遠近翔に背中を包丁で切られたこと。鏡夜に決別されたこと。それすら一時的に記憶として失ったこと。まだまだありそうだけど、お前は後悔するのが好きらしいな」

……なにが言いたいんだろう、と湊は率直に思った。

裏魅が言いたい事の本質が解らない。だからこそ、湊は返答さえできなかった。

「後悔して、後悔して、後悔して。もう充分なんじゃないのか？」

お前は後悔という概念に憑かれていたみたいだ。私がお前の家に行つて、そこで敵が現れたら、お前の父や母がどうなるか解つていてそんな発言しているのか？」

「——それは」

「結局、お前は後悔することになる。選択肢なんて限られたものだけど、その中で私という選択肢リフトを選ぶのはかなりの危険リスクを孕むぞ。

——私なら大丈夫だから、大人しく家に帰れ」

最後の方だけ、自分を氣遣つてくれているように聞こえた。

「——解りました。あと裏魅さん、食事とかはどうしてるんですか？」

「人間は五日くらいなら食べなくても死なない。それまでには全て終わらせるつもりだ」

（終わらせる……？）

その言葉が何を意味しているのか、湊には全く解らなかった。

でも、自分にできる事くらいしても良いだろうと思った。

湊は裏魅に「明日、朝ごはんと昼ごはん持つてきますね」と言い残して、公園を後にした。

「ただいま」

湊は自宅に帰ると同時に、玄関口で妙なことに気づいた。

「……下駄？」

古めかしい下駄が玄関の靴置き場にあった。そして、すぐそこにあるリビングからは明らかに談笑の声が聞こえてくる。

一つは母親の声だ。そしてもう一つは――

(……あれ?)

どこかで聞いた事がある声だった。確か、この声は――
……リビングの扉を開ける。

――そう、一年前の、あの日。

「あ、お邪魔してるッスよ。湊さん」

半眼、無表情、黒い流麗なポニーテール。

そこには、確かに一年前に一度だけ出会った、

――工藤千雨がいた。

王鬼

状況が全く理解できないというのは、この事を言うのだろう。

リビングに配置されてあるテーブルの椅子に座っている湊は、右隣に座っているポニーテール少女がなぜこの家にいるのか理解しきれていなかった。

ポニーテール少女の名前は工藤千雨というらしい。

湊の母親である美琴は、彼女が帰って来る前に工藤千雨と親交を深めていたらしく、穏やかに談笑していた。

そんな時でも、千雨は一年前の病室で出会った時と変わらず半眼無表情だ。気怠げに腰まで曲げている。それでも美琴は千雨の姿勢や無表情を気に掛けることなく話を続けている。

これまでの話を傍観していた湊が認識した事。それは三つあった。

一つ。千雨が湊の高校時代からの友人であること。

二つ。湊と同じ大学に進学するようになったこと。

三つ。千堂鏡夜とも親交が深く、三人はよく遊んでいたこと。

前二つは完全な偽りだが、最後の一つは嘘でもなく本当でもない、といったところか。一年前の会話を想起すると、工藤千雨が千堂鏡夜と少なからず接点を持っている事は理解していた。

（というか……）

なぜ、千雨は自分の家にいるのだろう。そんな根本的な理由がさっぱり解らなかった。

そして、なぜ再び自分の前に現れたのだろうか。

一年前のあの時で最後だと思っていた。この一年間、自分の前に一度も現れなかった彼女が、突拍子もなく自分の前に現れたその理由^{わけ}。

（……でも、鏡夜くんを知ってるんだよね）

一年前に出会った時、千雨は千堂鏡夜の事を認知している言動をしていた。あの時は伝言の事しか頭に無かったから他の事を考えら

れなかったが——おそらく、本当に憶測に過ぎないが、彼女は自分よりも鏡夜の事を知っていると思う。

「湊？」

「え——？」

「どうしたの？　せつかく工藤さんが来てくれてるんだから、少しは話くらいしなさいよ」

「え、あ、うん……」

「別に良いッスよ。湊さんが会話下手なのは知ってるッスから。いやー、高校時代から変わってないッスね。友達一号の私としては、もう少し社交性を持ってもらいたいんスけど」

その言葉は、少なからずとも湊を憤らせる要因となった。

「……工藤さん、ちよつと来てください」

「ん？　どこにッスか？」

「私の部屋です！」

と、湊は強引に千雨の腕を引っ張ってリビングを後にした。稀有に等しい湊の行動に呆然とする美琴だったが、すぐに微笑を浮かべながら「仲が良いのねー」と頬に掌を当てて口にしていた。

湊は千雨と自室に連れ込むと、少し呼吸を荒くしてベッドに腰を掛けた。

「けっこう強引な所があるんスね、湊さん」

「誰のせいですか」

「私のせいって言いたいんスか？」

言いながら、千雨も湊の右隣に腰を下ろした。

「……先に言っておきますけど、私の最初の友達は鏡夜くんです」
ため息混じりにそう口にすると、千雨はきょとんと目を瞠った後、吹き出すかのように苦笑した。

「あー、その事で怒ってたんスか。それは訂正しないといけないッスね。ええ、湊さんの初めての友達は鏡夜くん。それは紛れもない事実ッスね」

貶しているような軽薄な口調だった。湊は千雨を静かに睨みつける。

「そんなに怒らないでほしいッスね。これでも褒めた言動をしたつもりッスから。あの遠近湊が、非日常に生きる種族と友達になる事に成功した。これは私達側からすれば結構な驚きだったんスよ。よもや千堂鏡夜という日常から一番遠い位置にいた封殺者が、湊さんと関わったんスから」

そこで、千雨は初めて笑った顔を見せた。半眼を維持しているからか、無気味な笑顔だった。

「鏡夜くんが張っていた心の壁に唯一踏み込んだ人物——それが湊さんッス。普通なら賞賛するところッスけど……まあ、今はそんな状況じゃないんスよね。」

湊さんには喋っても問題ないからまず先に名乗っておくッスけど、私は魔術師——非日常に生きる人間ッス」

それは湊も想定していた事だ。

鏡夜が昏睡状態に陥った理由。その訳を知っていた彼女が、鏡夜側の人間だという事は一年前から薄々感じていた。

「それで今現在、鏡夜くんが危機に陥っているんスね」

「——どういう事ですか？」

湊が怪訝に尋ねると千雨は頭を掻き耑りながら、顔を顰めた。

「まあ簡単に言えば、鏡夜くんが敵に狙われてるんスよ」

「え——」

「それも、魔術師と互角に戦える敵。ひいては、封殺者なんかでは到底敵わない存在。湊さん、鬼人っていう存在は既に知っているッスよね？」

尋ねる千雨に、湊はこくりと首を縦に動かした。

「人間の持つ負の感情の集合体って鏡夜くんから聞きました。でも、あんな存在、本当にありえるんですか？」

逆に問いただす湊。

しかし、その言葉で千雨の表情は一変した。

無表情は変わらないが、どこか険とした厳しい顔付きだった。

「湊さん。鬼人と遭遇した事があるんスか？」

「——え、えつと……」

「鬼人を知識として知っていても、人間は実物に出遭わない限り『あんな』という表現は使わないツスよ。遭ったことのない存在なら、普通は『そんな』という言葉を用いるはずツス」

これ以上とない的確な指摘に、湊は口ごもった。

「第一の質問ツス。鬼人と遭遇したのはいつツスか？」

「……さつき、家に帰って来る前です」

「ふむ。では第二の質問ツス。その鬼人を始末したのは誰ツスか？」
畳み掛けに問う千雨。どこか取り調べを受けているような気がしないでもない。

「——千堂、裏魅さんです」

「……………ほえ？」

正直に言ったのだが、なぜか千雨は破顔しながら素っ頓狂な声を発した。

「鏡夜くんの妹さんです。この町に来て、河川敷公園で寝泊りをしているらしいです」

「……あー、えつと。裏魅さんがこの町にいるんスか？」

「？ 裏魅さんを知ってるんですか？」

逆に問い返す湊。

千雨は気まずそうな顔をして、少し視線を泳がせた。

「知ってるというか……」

はあ、と重いため息を吐く千雨。

「……ぶっちゃけると、私と鏡夜くん、裏魅さんは幼少期を共に過ごしてきた幼馴染なんスよ」

「ええ！？ そうなんですか！？」

「はいツス。五歳までは鏡夜くん、裏魅さんとよく遊んでいたツス」

「五歳——」

そつえば以前、裏魅が言っていた言葉によると、鏡夜は五歳に

記憶を失ってしまったらしい。それが原因で自分の事を忘れていたとも言っていた。

その言葉が、今になって信憑性を増してきた。

「あー、裏魅さんがこの町にいるんスか。これは厄介な事になってきたツスね」

「厄介な、事……？」

「私一人で片付けるつもりだったんスけど……まあ、彼女の性格からすれば、鏡夜くんの危機に駆けつけてくるのは当然といえば当然ツスね。良いツスカ、湊さん。私がこの町に来た理由は、『王鬼』^{おうき}を抹殺するためツス」

いきなり話の筋道が変わったような気もするが、湊は千雨の言葉に耳を傾けていた。

「『王鬼』は、先も言った通り封殺者では到底敵わない圧倒的な強者ツス。封殺者を束ねる組織——星礼会も、今回の事件を危惧してはいるんスけど、使える人員は限りなく少ない。だから今回工藤家の当主を通じて私がその任務を承ったんスよ。そして、『王鬼』の目的は、おそらく鏡夜くんの心^{なか}に有る物ツス。あれを奪取されると鏡夜くんは昏睡状態から死亡してしまうツス」

「な——」

絶句する湊。しかし、千雨は気にせず話を紡いでいく。

「裏魅さんがこの町に来たのも、おそらくそれが理由ツスね。私にここに来たのも湊さんに忠告を促すためツス。良いツスカ、湊さん。明日から、何があっても鏡夜くんの病室に近づかないこと。私との約束ツス」

「……それは、本当の話なんですか？」

「本当だからこそ、湊さんに話してるんスよ。湊さん、私、一年前に言ったツスよね。鏡夜くんの抛り所になってほしいと。だから、湊さんが巻き込まれて死ぬのは絶対に頂けないんスよ。——それは、きつと裏魅さんも同じツスから」

千雨は真剣な顔で話を締め括った。

そして、千雨の言い分は、言葉は違っだろうが裏魅と一緒に意見だった。

——自分は、いつも守られてばかりだ。

——自分は、逆に誰かを守れないのだろうか。

後悔。それは湊が今になっても抱く正しい感情。

だけど、今はそうする事しかできなかった。

……自分には何もできない。それは、この一年間で立証された事実だ。

だから、湊は唇を噛み締めながらも、頷くことしかできなかった。

十二年という歲月

湊の家を後にした千雨は、町の中枢からは離れ、河川敷公園にやってきた。

——宵闇の最中。既に深夜十二時に差し掛かろうとしている時間帯。

その河川敷公園は、やはりこの町では『異質』というべき空気を漂わせていた。

「——やっぱり、大元はここツスカ」

千雨は変わらず抑揚のない声で呟いた。

一年前から解っていた事だった。あの日、遠近翔が作り出した二体の鬼人との殺し合いにおいても、彼女は感じていたのだ。

ここが、近々降臨する場所であると。

シンとした、物音一つ聴こえない静謐な夜。暗雲が立ち込める夜空には円形を象った満月が在った。

昔、父親である工藤王弦から聞いた話によると、月は『正のエネルギー』を地上に散発しているとの事だ。古においての月という存在もまた同論。正のエネルギーはこの穢れた地を癒し、人々に安息を与えている。

「……まったく、『見張り』まではまだ早いツスよ」

眼前にある、芝生の傾斜に横たわって眠りにについている一人の少女を半眼——さらに細めて——で見据える千雨。

「千雨か」

ゆっくりと開かれた黒瞳が、千雨の視線と交錯する。

「これはまた懐かしいヤツが現れたな。およそ十二年ぶりか？」

「正確には十二年と三日ツスね。鏡夜くんが施設に入ってから三日間を共に過ごしたツスから」

「そんなくだらない過去はどうでもいいよ」

静かに腰を上げて、裏魅は夜空を呆と眺める。

その黒瞳の中にはどのような感情が籠っているのだろうか。

千雨も同じく夜空を見上げる。

「——この河川敷公園がおかしいというのは、既に認知済みか、千雨？」

「ええ、一年前から薄々と。データによれば、鏡夜くんがここに訪れたのはたったの二回。イナしか扱えなかった彼にしてみれば、気づかないのも当然ッスね。——一応、結界を張っておくッスか？」

尋ねる千雨に、裏魅は「好きにしろ」と小さく欠伸を掻きながら返答した。

「結界を張ろうがどうしようが、そんなモノ簡単に突破される。一般人を被害に遭わせないというお前の危惧はけっこうな事だが、私がこの町に来たのはそんな理由じゃないからな」

「鏡夜くんッスね。……まったく、口調は変わっても兄離れは全然できてないッスね、裏魅さん」

千雨は呆れ気味にため息を吐いた。

「それで、コードナンバー03の裏魅さんからして、王鬼を始末できる確率は？」

「——確率論で言えば五割といったところか。Level3まで向上させて何とか殺せると私は推測している。このナイフを付加要素とするなら、七割、かな」

そう言つて、裏魅は穿いている男物のジージパンのポケットから一振りのナイフを取り出す。柄は黒色。刀身は六寸といったところか。「私は正統継承者じゃないから上手く扱えていないけど、鏡夜だったら完璧かつ、完全な制御ができていただろうな」

自嘲気味に笑う裏魅。その笑みはどこか彼女の愚かさを感じさせた。

「鏡夜くんは仕方がないッスよ。——千堂家の異端として生まれ、記憶を封じられてあんなに弱くなってしまったんスから」

千雨は一年前を思い出す。遠近翔の放った二体の鬼人相手に——言語抑制術が施されていたとはいえ——一秒未満で殺せなくなつて

しまつほどの弱者へと成り下がってしまったのだから。

「結局、鏡夜くんはこの運命に敗北した。心界を失い、昏睡状態に陥り、封殺者ではなくなった。それは、殺したくないという夢の通りの運命へと成立したツスけど——まだ、鏡夜くんには果たすべきことが存在するツス。そうさせるためには——」

「——心界の復活。ひいてはこのナイフの正統継承者になるしかないって事だろ？」

横目で問う裏魅に、千雨は同意するように頷く。

「そう成ってもらうためにも、まずは王鬼の始末ツスね。私は今日から五日間の内に終わらせるつもりツスけど、裏魅さんは？」

「同じく、だな。私も五日以内で終わらせる」

「気が合うツスね。じゃあ、私はホテルに戻るツスけど、本当に野宿で良いんスカ？ 何なら、私の部屋使っても良いツスけど」

それなりに気を使って言葉にしたのだが、裏魅は首を横に振って拒否した。

「私は私で、この場所を気に入っている。けっこう気持ち良いからな、ここの芝生」

「そうツスカ。じゃあ、私は帰るツスね」

そう言つて、ゆっくりと踵を返すが、

「——千雨」

不意に、裏魅の真剣そのものの口調で発せられた言葉によって、千雨は歩を止めた。

「なんスカ？」

「気に掛かっている事があるから、先に尋ねておく。——お前、その口調はなんだ？」

……………沈黙。

「あー、えっと——それは神のみぞ知る……………」

「もついい。答えるつもりがないなら帰れ」

自分で尋ねておきながら、無慈悲に言い捨てる裏魅だった。

——此処は暗い。

——心を喰らう。

絶無となった彼の魂は、ソレによって咀嚼されていく。

世界の根源を宿している彼の大元を、ソレは喰らい、喰らい、喰らい尽くしていく。

意識が無い事がせめてもの救いといえた。肉食獣に食われる事と同一の激痛を彼は覚えないのだから。

意識が無いが故、この世界に浮遊していられる。

絶無の世界に存在する、絶無となった存在。

不在した心には、世界の根源が存在している。

その、矛盾で構成された海に浮いている彼という存在。

彼は、まだ知らなかった。

そう——知らなかった。

自分を取り巻く世界が、こんなにも矛盾で満ちているという事を。

目覚めまで……

三月三十日。午前八時十分。

今日は久々の曇天だった。覆う暗雲は空の向こう側まで続いている。今にも雨天へと変わりそうな天気。朝の繁華街を歩いている人々も、よく見れば大多数が傘を持ち歩いていた。

遠近湊は、コンビニで朝食を何にしようかと腕を組んで思案していた。しかし、これは自分の朝食ではなく、裏魅への朝食である。

「……裏魅さん、どんなご飯が好きなんだろ」

思案顔のまま、湊はコンビニ弁当やサンドイッチを見比べている。元より彼女の事は何も知らないのだ。無論、どんな朝食を好むかなど、つい最近出会ったばかりの湊が知るはずもない。

「……うーん」

さらに難しい顔になって、様々な食品を観察する。

「和風弁当、かな」

脳内で裏魅の外見を思い出し、直感的にそう判断する湊。――静かな雰囲気の人だから和風弁当が好きそうだ、という完璧な憶測による判断だった。

コンビニで和風弁当を購入した湊は、駆け足で河川敷公園へと足を運んだ。

この時間帯、公園で娯楽を楽しんでいる者は限りなく少ない。しかし、行き交う人々の中には散歩をしている老人や、ランニング中の青年などが見受けられた。

この河川敷公園は、一般道路が傾斜の上にあり、川沿い付近の遊び場は傾斜下の敷地となっている。敷地、そして石畳の大きな階段

の両サイドの傾斜は整えられた芝生で出来上がっている。

芝生で整えられた傾斜には、両腕を枕代わりにして、仰向けになつて寝ている千堂裏魅がいた。

湊がすぐ近く――距離にして二メートルの範囲まで歩みを進めると、裏魅はゆっくりと双眸を開いた。

「遠近湊か」

と、小さく欠伸をしながら口にする裏魅。

「おはようございます、裏魅さん」

「こんなに早い時間から何の用だ？」

「昨日言つた通り、朝ごはん持つてきました」

と、湊は笑顔で右手のコンビ二袋を差し出す。

「――」

裏魅は訝しげにそれを見据え、はあ、と深いため息を漏らした。

「……お前、鏡夜からお節介つて思われてるだろうな」

そう言いながらも、裏魅はコンビ二袋を貰い、中身を取り出す。

そして、和風弁当が顕わになったわけだが――

「意外と気が利いてるじゃないか」

和風弁当をじつと見つめ、口元に微かな笑みを浮かべる。

その様子を見て、湊はぱあつと顔をほころばせた。

「和風弁当、好きなんですか？」

「ああ。逆に洋風の食事は大嫌いだ」

（……サンドイッチ選ばなくてよかった）

内心、胸を撫で下ろしながら、湊は裏魅の隣に座り込んだ。

そして、昨晩から思っていた疑問を尋ねる。

「あの、裏魅さんって、何で私が来たって分かるんですか？」

「どういう意味だ？」

和風弁当の封を開け、割り箸を二つに折りながら裏魅は返す。

「だって、昨日も私が鬼人に襲われてた時、すぐに駆けつけてくれましたし、今も私が来た瞬間に目を覚ましたみたいに見えましたから」

「私達側の人間なら、そんな簡単な事だよ」

焼き鮭に割り箸をつつきながら、裏魅は淡々とした口調で言う。

「簡単に言うなら、人間に宿っている生命^{オド}魔力粒子同士の反発機能だな。遠近湊、魔力って言葉は知っているか？」

「言葉では知ってます。ファンタジー小説とかでよく出てきますし」
「まあ、それもあるけど、言語的には心理学に近いかな。魔力っていうのは、どんな存在でも、必然的に体内に内包している『原初の源』だ。精神、肉体、脳を働かせる為に有る、『人間としての機能を動かす装置』とも言っかな。生命が機能する。それは即ち、機能する為の装置が備わっているからこそ可能な事象だ。それが三種の魔力の一つ、生命^{オド}魔力粒子だ。

生命^{オド}魔力粒子を持つている魔術師はその能力を極め、自身に生命^{オド}魔力粒子が宿っていると完全に自覚する。その後は容易な事で、他^{オド}者の生命^{オド}魔力粒子の質も見極めることができる。つまり、他人の生命^{オド}魔力粒子がどんなモノであるか解るんだ。ここまで理解できるか？」

「えっと……とりあえずは」

「そうか。で、生命^{オド}魔力粒子同士の反発機能っていうのは、一方の存在が生命^{オド}魔力粒子を自覚していて、かつ一方の生命^{オド}魔力粒子の質を自分の脳に記録^{データ}として記録した時初めて事象とし成り立つ。インターホンを想像してみる。自分が自宅にいて、家の前に来訪者が来た。それだけで、お前は『来訪者という存在に気づく』事ができるか？ かなりの聴覚を持っていて、足音のみで家の前まで誰かが来たということを認識しない限り、それは不可能だ。

つまりだ。来訪者がインターホンを押すからこそ、自分は来訪者に気づくことができる。生命^{オド}魔力粒子の反発機能っていうのは、それを応用化させた技巧みたいなものだ。自己の脳内で知っている生命^{オド}魔力粒子の保持者のデータを記録し、反発機能をセッティングしておく。あとは、その者が接近した際に自動的に反発機能が働いて、データとして記録した存在を察知できる。まあ、簡単に言えばこん

なところかな」

……全然簡単な気がしないが、インターホンの喩えで湊はそれなりに理解した。

つまりは、自分の知っている存在が接近すると、体内に有るインターホンという装置が自動的に活動し、『その存在が来た』という事を自分に知らせてくれる、という事だろう。

眠りに堕ちていても、インターホンが鳴ることによって目覚めるという論理だ。

「理解はできましたけど、魔力って他に二種類もあるんですか？」

「ああ。大気魔力^{マナ}粒子と体内魔力^{イナ}粒子がある。前者はこの世界の大気に満ちている魔力で、これを扱えるのは魔術師だけ。後者は人為的に体内の魔力を認識した者——封殺者のみが扱う魔力」

「……人為的って、どういう意味ですか？」

「そうか、お前が鏡夜から聞いたのは施設に入っただ後の話だけか。簡単に言えば、魔術師達が、生まれてきた乳児を魔術儀式場に連れて行って、儀式によって強制的に魔力を認識させるんだ。生まれてきた乳児の意思も、未来も尊重せずにな」

五目ごはんを口に入れながら、裏魅は言う。

湊はその事実には愕然とした。それが本当ならば——

「じゃあ、裏魅さんと鏡夜くんも——」

「いや、私は儀式を受けてない。受けたのは鏡夜だけだ」

「え？ でも封殺者は体内魔力^{イナ}粒子だけを扱うって——」

「ああ、説明が足りなかったな。封殺者は儀式を受けた者が名乗れるんだが、例外もあるんだ。私みたいに、自分から志願した者も、星礼会の許可が下りれば封殺者という存在になれる。

反面、鏡夜は根本的に封殺者に成った理由が異なる。あいつが封殺者になるよう儀式を受けさせたのは、千堂家の現当主が決めたこと。私は女だから判断から除外されたけど、あいつは男に生まれたから、そういう運命に立たされた。——あいつは、この世界で唯一『全てを認識しなければならぬ』存在だからな」

どこか険とした表情で口にする裏魅。

「まあ、千堂家の次期当主の座は鏡夜にあっただけど、お前との邂逅で昏睡状態になったから、父上はかなり激怒してたぞ。その者を連れて来い、殺害決定とか言ってたな」

「え——」

青ざめていく湊の顔を見て裏魅は「冗談だよ」と小さく苦笑した。

「確かに怒ってたけど、父上は一般人を殺しはしない。まあ、非日常側の人間なら、容赦なく殺すけどな」

「も、もう、脅かさないでください！」

頬を膨らませて怒鳴る湊。

裏魅はやはり苦笑しながら、

「本当に純心だな、遠近湊。鏡夜も稀に見る良いヤツに好かれた。鏡夜を起こした後は仲良くやれよ」

不意の言葉に、湊の思考が止まった。

「お、起こしたら……？」

「勘が良いな。二日後に千堂鏡夜という存在を目覚めさせるつもりだ。私が敵の足止めをしている間に、千雨が覚醒させる。千雨とはもう会っただろ？」

「——ほ、本当に、鏡夜くんが起きるんですか？ 本当にですか！？」

詰め寄って問い詰める湊。

これが冗談だったら、頬の一発でも叩いてやる。それ程の真剣さを内に秘めながら、湊は問うた。

「本当だよ」

裏魅は動揺の素振りも見せずに返答した。

「言葉を選ぶことくらい私にもできる。二日後の深夜、鏡夜の病室で覚醒の儀式を行うが、お前は病室に行くな。この事も、もう千雨から聞いたな？」

「で、でも——」

「お前の気持ちは解る。誰よりも鏡夜の目覚めを願っていたはずだ

ろうからな。だけど、儀式の終了と共に、鬼人の王——王鬼は、鏡夜の中に在るモノを奪取しにいく。その場にお前がいたら、お前は完璧に殺される。鏡夜は絶対にその結末を許容しない。だから、お前は家で大人しくしてろ。——大丈夫だ。王鬼を殺した次の日には会わせてやるから」

——いつの間にか湊は頬に涙を伝わせていた。

——この一年間。何があっても泣かないと決めていた彼女が、泣いていた。

「——分かりました」

だけど、泣きながらも湊は笑った。

嗚咽を漏らす事もなく、ただ静かに泣いて、笑っていた。

「——やっぱり、お前は純心だな」

そう言つて、裏魅は湊の頭を優しく撫でた。

「大丈夫だ。絶対に実現させてやる」

裏魅は言葉として、はっきりと言った。

そう、実現させる。

——千堂鏡夜と、遠近湊の再会を——

現れた王鬼

二日間はあるという間に過ぎていった。湊はその間、一度だけ鏡夜の病室を訪れていた。

——四月一日の午後十一時過ぎ。

千堂裏魅は河川敷公園の一角に佇んでいた。双眸を閉じ、右手には一振りのナイフを握り、静かにその気配を探っている。

宵闇の最中。先刻からこの公園に収束を開始している負邪は、普通の負邪とは断じて言えない。もっと高い密度を備えた……言うならば、根本的に『レベル』というモノが異なる負邪であった。

収束の場所は、裏魅が佇んでいる場所から前方に向けて二十メートルの位置。それは大気中の一点においての収束ではなく、天を突くかのように負邪が上空に舞い上がっていった。

（——千雨が張った人払い、ひいては空間断絶の結界の範囲は半径百メートル。それを突破されれば終わり、か）

結界を張っても、あの存在ならばそれを打ち破るなど容易である。しかし、思い返せば千雨の危惧は正解なのかもしれない。

結界によってただの一秒でも食い止められれば、儀式の成功率は上がる。千雨は今頃、病室で儀式の前準備をしている最中だろう。

ならば、今は——

「止めるしかないか」

ふう、とゆっくりと吐息を吐きながら、裏魅は前方を見据えた。

——突然。夜空から地上に向かって一直線に光が射した。

この周辺は街灯一つない。故に、その光は河川敷公園を照らした。

しかし、光というには好色とは断じていえないだろう。

薄暗い、見ているだけで嫌悪感を抱いてしまうような灰色の光。

裏魅は率直にそう思った。

一直線に射している灰色の光に交ざりあうように、その存在は天空から地上へと降りてきた。

……ゆっくりと。地上に降りる前に自己の存在を誇示するように両手を広げながら、その存在は降りてくる。

裏魅はそれを冷めた目で見据えた。

地上に足を着いた存在は、裏魅と同じく冷然とした視線を向けた。

「——この地に降りるのは三百年ぶりか。そして、最初の遭遇者は千堂家の嫡子とは」

長い白髪に、黒色のスーツを羽織った長身の男性は言う。

感情すら籠っていない、ただ言葉を放つだけの行為。

外見からして四十代後半と推測されるが、彼はすでに五百年は生きている。その歳月が作り出した貫禄というべき威圧感が彼の周囲から放たれていた。

ピシッと。

裏魅も殺気を放ち始めた。

それは、純粹な殺気。この男と殺すという事だけを意志に、体から散发している正しい方向性を保った殺意。

「千堂鏡夜に会いに行くためにこの場所に降りたが、すでに違和感に気づいていたか」

黒色のスーツを羽織った男は表情を変えず、抑揚もない声で問うた。

「感づいたのはこの公園に初めて来た時だな。お前が自分から顕現するって言うていたようなものだ。」

——先に訊くけど、お前が王鬼で間違いはないな？」

「いかにも。第六位の王鬼、セラ・ロイデスだ。この世界では『鬼人の王』と呼称されているらしいな。そのような呼び名もまた、懐かしい」

負邪が収束し、一個体の形となり顕現する存在が鬼人と称されている。

しかし、王鬼はただ負邪が収束した存在ではない。

「知つての通り、私達王鬼は、負邪をその体に取り入れ、同化を成した存在だ。負邪の力を制御し、かつ開放できる力を持った者とも言うな」

負邪の起源は、人間が無意識的に散発している負の感情の粒子だ。その内に在る負の感情が生命^{オド}魔力粒子に支障をきたし、生命^{オド}魔力粒子が負の感情で塗り潰されて初めて負邪が出来上がる。

それを外界に散発させる。それは、呼吸による二酸化炭素の排出と同じ時だ。『負邪となった生命^{オド}魔力粒子』が外界に洩れる。

その、人間である限り当然の行為が、負邪を生み出す要因となるのだ。

そして、それを吸収することが可能な王鬼とは——極論で言えば、元は人間だった。

「なんという因果か。下界に降り、早くも魔術師との戦を始める事になるとは」

「お前が言える台詞か。お前だって、元は魔術師だったんだろ」
裏魅は間髪いれずに返した。

そう。負邪を吸収し、その概念を操れるのは普通の人間では決してありえない。

——王鬼の起源的な存在とは、非日常に属する魔術師だと定められているのだから。

「貴様の言つた通り、私は魔術師としての道を外した者だ。だが、道を外した理由というものは存在している」

王鬼のランク——第六位に値するセラは、裏魅の言葉に同意を示しながらも、否定の言葉を付け加えた。

「魔術師であつた頃の五百年前は、私自身、魔術と負邪の探求を行つていた。しかし、探求成果はどれもくだらないモノだった。私の最優先的に探求していたのは負邪の解明であつたが、探求すればす

るほど、さらなる未知で溢れ返っていった。ならば――」

「自分が負邪を吸収して、負邪っていう概念そのものを理解しようとしたのか。ふん、魔術師を外れた外道にありがちな答えだな」

裏魅はナイフを構えた。

王鬼――セラは一步前に足を運んだ。

「しかし、探求成果というべき答えは開けた。負邪が生命魔力粒子オトの侵食による散発のみで発生するものではないという事も」

セラはゆっくりと、単調な足取りで裏魅との距離を縮める。

「私は王鬼となったが、負邪の解明は未だ継続している。私は魔術師であり王鬼だ。どちらの部類にも属するが、私という根本的な存在理由は負邪の解明にある。その為にも、千堂鏡夜に会わなければならない」

「――『会う』じゃなくて、『奪い取る』だろ」

間違いを正すように、裏魅は言う。

「だけど、簡単にやらせるわけにはいかない。鏡夜の目覚めを待っているヤツがいるからな。だから――ここで殺してやるよ。セラ・ロイデス」

そうして、魔術師と王鬼の殺し合いは開始された。

「始まったツスカ」

工藤千雨は、鏡夜の眠っている病室に入った直後、それを察知した。

強大な力が衝突を始めた。河川敷公園から十キロは離れているこの病院にいても、その力の衝突があまりにも強すぎたが故の察知だった。

それは言うまでもなく、王鬼と千堂裏魅による殺し合いの他になかった。

「さて。準備は終わったツスけど……」

と、千雨は鏡夜の眠っているベッドを病室の中心まで移動させ、周囲に描いた六亡星の陣を再度確認する。

（――陣の乱れ、誤差はなし。後は儀式の詠唱を唱えるだけツス）
と、千雨は病室の脇にある置物に置いてある『物』を一瞥した。
「大丈夫ツスよ。絶対に成功させるツス」

誰に言うまでもなく、千雨は確信を持って呟いた。

彼の者

力の衝突。それはセラ・ロイデスが放った負邪という負のエネルギーと、千堂裏魅が大気魔力粒子を掌に収束させ、物理的な攻撃と化したものの拮抗に他ならなかった。

光の渦と黒色の渦。両が放った対極のエネルギーは二人が佇んでいる位置の中間地点で拮抗し、闘ぎ合い、結果的に相殺へと至った（これくらいの大気魔力粒子じゃあ効果はなし、か）

裏魅は小さく舌を打って、ナイフを逆手に構える。

一般的に、負邪を浄化させる役割を担っているのが魔力である。術者の精神硬質^{ハードメンタル}が高ければ高いほど、魔力を使用した際に現れる効力は増幅していく。

しかし、負邪が魔力によって浄化に至ることが一般論であるにも拘らず、セラは相殺に成功した。

それは、セラの操る負邪が、一般的な負邪とは異なる上位概念であることに他ならない。

鬼人の王——王鬼が行使する負邪は、自身の魔力と混合状態にある。

セラ・ロイデスは、元は魔術師であった存在だ。その存在が負邪を吸収した時点で、生命魔力粒子が変質^{オド}を遂げてしまう。

普通ならば、負邪を体内に取り込んだ時点で生命魔力粒子に異常をきたすのは当然といっても過言ではない。対極なるエネルギー。それは制御以前に暴力的なまでの負のエネルギーによる侵食によって、体は破壊されてしまう。

しかし、セラは五百年にも渡って負邪を探求し続けてきた王鬼だ。その五百年という年月の過程において制御、そして自身の魔力と混合させての解放という技巧を身に付けていてもおかしくはない。

「魔力と負邪の融合、か。随分と堕ちたものだな、王鬼」

裏魅は、皮肉混じりな口調でセラを罵倒した。しかし、当の本人

は眉一つ動かさない。

「これは私自身が望んだ結果である。そして、この技巧が一つの探求成果である以上、誇るべきことでもある」

「そうか。なら、その探求成果を無に還してやるよ」

裏魅は逆手に握ったナイフを前に構え、その言葉を唱える。

レベルモーション
「動作超越・Lebel2！」

瞬間、裏魅が姿を消した。それは最早瞬間移動に等しい移動術だ。セラの背後に移動した瞬間、裏魅は背中に袈裟斬りを行う。

「ふむ——」

しかし、裏魅の瞬間移動にセラは動揺もせず、冷静に状況を分析する。

裏魅の斬撃は、虚空を切り裂いたように手ごたえが皆無だった。まるでセラが大気そのものに化し、空を切り裂いただけの感覚だけが手元に残った。

裏魅は、自分の攻撃が失敗に終わったと認識すると、即座にセラから距離を取った。

0・五秒にも満たない速さで十メートル後退。それは最早人間に行える行動速度から大幅に逸していた。

しかし、常識の範疇に収められない行動速度を目にしても、セラの顔に変化は窺えない。

「——動作超越レベルモーションか。この時代でその技巧を扱える者が存在していたとは。しかし、その技は反動に耐え切れるものではない。身体面での過負荷は絶大なるものである」

実際、セラの言う通りだった。

レベルモーション
動作超越は魔力を両脚に収束しての移動法ではない。

レベルモーション
その実、動作超越とは呪術の類における『身体自己暗示』のことを指す。

自己暗示とは、端的に言えば自身に課す呪術だ。呪術は魔術の分類に属する中でも、その危険度の高さから疎遠されがちな術として確立されている。

魔術が起動手順を踏み、結果的に神秘を引き起こす技であることに對し。

呪術は起動手順なしで神秘を引き起こすことの代償として、自己の身体部位に何かしらの損傷を受ける。

そして、その呪術における最上位の技巧が動作超越レベルモーションとされていた。

「一時的とはいえ、身体に呪術を課すのは禁忌とされている。呪術は生命魔力粒子オトを侵食し、機能停止へと至らせるが故。そうまでして千堂鏡夜を守りたいか」

セラの問いに、裏魅は若干呼吸を乱しながら、笑って答えた。

「当然だ。言っただろ。あいつの目覚めを待っているヤツがいるつて。鏡夜が目覚めるなら、私なんてどうなっても構わないよ」

それが、千堂裏魅の究極的な真理。

——二人が再会を果たせるなら、この体なんてどうなっても構わない。

「お前こそ小癩な手を使うじゃないか。身体を負邪に変換して思念に戻るなんてな」

裏魅は、先ほどのナイフによる一閃を無効化させた術を見抜いていた。

「物体としての機能を成立させていたにも拘らず、存在を負邪という思念に変換させた。負邪はカタチが無く、負の思念でしかない。確かに、それなら物理攻撃を無力化させられるな」

「これはセラ・ロイデスという王鬼が確立させた技術である。小癩と罵られる筋合いはない」

言いながら、セラは裏魅の方に向き直り、握った右の拳をゆつくりと前に突き出した。

「貴様の相手をしている暇は毛頭ない」

開いた掌から、黒色の粒子——負邪が放出される。

しかし、それは攻撃ではなかった。放出された負邪はセラの周辺に蔓延して行き、除々にカタチを保った一個体の生物へと変貌を遂げる。

（鬼人か……）

具現化された十体の鬼人。しかし、そのどれもが普通の鬼人とは思えなかった。

刹那。十体の鬼人が眼前に現れた。

「な——」

裏魅は愕然とし、動作^{レベルモーション}超越を使用して咄嗟に二十メートル後退した。しかし、それと瓜二つの疾さで、鬼人は追いついてきた。

（ちッ——！）

この時。千堂裏魅は本能からこの鬼人達に畏怖の感情を認識した。十体の鬼人は統率の取れた動きで、四方から攻撃を仕掛ける。すでに腕の形状は大鎌へと変態している。

……しかし、四方からの奇襲だからこそ、裏魅は多少の安堵を覚える。

これならば、このナイフに内包されている力を解き放てる。

「——解放！」

裏魅は逆手のナイフを持ち直し、円を描くように一回転を行った。三百六十度に一閃したナイフが虚空を斬り裂き、十体の鬼人、その全ての胴体が真つ二つに両断される。

ただそれだけで、十体の鬼人の上下身体が爆ぜた。それはまるで、上下の部位に仕掛けられた爆弾が起動し、爆発したかのような光景だった。

「くっ……！」

しかし、それだけで裏魅は地面に方膝を着き、荒い呼吸を繰り返す破目となった。……やはり選定者ではない以上、生命^{オド}魔力粒子の減少は免れなかった。

「そのナイフ——」

セラは悠然とした歩調で裏魅に歩み寄りながら、そんな言葉を溢した。

「——なるほど。見覚えがあるかと思っていたが、千堂家の家宝であつたか。しかし、貴様は扱いきれいなようだな。貴様の生命^{オド}

魔力粒子の消費が目に見えるぞ」

その刻、^{とき}彼の者は河川敷公園に近づいていた。

裏魅はどうか立ち上がり、再びナイフの力を解放しようとした。しかし、いつの間にか眼前に佇んでいたセラの威圧的な眼光を目にして。

彼女は本能から、どんな手段を使ってもこの男を殺さなければならぬと思えた。

「^{レベルモーション}動作超越・Level3ッ！」

裏魅は畏れていたわけではない。この王鬼を殺すには、身体に『最大自己暗示』を課すしか手段はないと判断をするしかなかった。裏魅は弾けた。それは音速に達した移動速度。ナイフの切っ先をセラの胴体に固定しての特攻。そして――

刹那の速度で、裏魅はセラの胴体を穿った。

「く……があ！」

それは無謀ともいえる特攻だった。一瞬の隙が生じれば逆に殺されるというのに、自身の最大の呪術、Level3を使ってまでセラを殺そうとした。

裏魅は初めて使用したLevel3によってまともに着地ができず、無様に地面を転がった。

全身の筋肉が麻痺した感覚だった。身体面における全ての機能が

衰えていくような、そんな感覚。

「見事」

……背後から、そんな声が届いた。
咄嗟に振り向く。

そこには、裏魅の特攻によって胸部に大穴が空いたままのセラ・ロイデスがいた。

しかし、彼は消滅していなかった。

「胸部周辺を思念に変換していなければ、私の敗北であっただろう。しかし、動作超越——呪術を起動させる言霊を放ったことが失敗の要因である」

その刻、彼の者は両者の姿を認識した。

「では、貴様を排除し、千堂鏡夜の元に向かうとしよう」
セラの掌が裏魅へと向けられる。

負邪と魔力の融合に成功し、負のエネルギーが物質と化した消滅への一撃。
しかし。

それが放たれる直前、誰かがセラの腕を？んだ。

「止める」
一言。彼の者はそう言った。
感情が籠っていない声音。しかしこれ以上とない憎悪の念を貌に表し。

千堂鏡夜は、二人の前に現れた。

千堂鏡夜

セラは腕を千堂鏡夜に腕を？まれたまま、歡喜に興奮していた。

——この時のためだけに、何百年という年月を過ごしてきた。

——この時のためだけに、自分は王鬼になることを決意した。

「千堂、鏡夜……！」

セラの無表情が変化を遂げる。この者に出会えた喜悅、歡喜、喜び。その感情が爆発しそうになりながら、鏡夜を見据える。

「第六位、セラ・ロイデスカ」

鏡夜は無表情のまま言った。

「地上に降りたのは、俺の内界ないかいに在る物を奪うためか？」
投げる視線すら、何の感情も抱かせない。

鏡夜の在り方は昏睡状態に陥る以前と変わっていないかった。

「この日をどれだけ待ちわびたことか。貴様が用いているモノを奪えば、私の探求成果は完全に確立する……！ その為にも、貴様を生かしたまま連れて行かねばならん！」

これまでのセラ・ロイデスとはあまりにも違う、感情の昂りだった。彼はそれほど、千堂鏡夜の内^{うち}に在るモノを欲していたのだ。

セラは？まれている腕を振り払って、ハメートルほどの距離を取った。

「鏡夜——」

地面に腰を着いたままの裏魅は、眼前に佇んでいる兄を見据えた。
十二年ぶりの再会。

十二年ぶりの兄の姿。

その姿はあまりにも変わりすぎていて、だけどこの男を鏡夜あにだと正しく認識できたのが嬉しかった。

「心配を掛けたな、裏魅」

鏡夜は視線をセラに向けたまま、素っ気無く言った。

「言語抑制術、記憶操作術は千雨が行った儀式で解除できた。新し

い心界の内蔵にも成功した。——だから、お前はもう戦うな。後は俺が引き受ける」

言って、鏡夜は裏魅の傍らに転がっているナイフを手に取った。それを手馴れた動作で逆手に握り、鏡夜は尋ねる。

「千堂家の家宝、『穿理』^{せんり}で間違いはないな？」

「——ああ」

「なら問題はない」

そう返して、鏡夜は超然とした佇まいでセラと対峙を開始した。

セラ・ロイデスは鏡夜を殺すつもりではなかった。

彼が欲しているのは、鏡夜の^{ないかい}内界に宿る一つの概念。しかし、それは鏡夜が生きているからこそ活動しているものであった。

故に、鏡夜を殺すという選択肢は彼の頭には無い。生かしたまま、あちら側に連れて行く。それを成すためには、一時的な気絶状態へと陥らせる必要がある。

その為には、まず千堂鏡夜を戦闘不能にさせなければならない。ハメートルの距離を保ち続けるセラと鏡夜。

しかしいつしか、その距離はほぼ零に縮まっていた。

「な——！？」

セラが驚愕に目を見開く。瞬刻、鏡夜が右腕をナイフで切断していた。

その移動速度は、認識が追いつかないものだった。千堂裏魅の^{レベ}ルモーション作超越、その最大自己暗示であるLevel3は辛うじて認識できたが、これはその比ではない。

事実、鏡夜の詠唱の前では、全ての認識速度が無力化される。

『SPEED UP』——。それは亡きレイ・ストライトが鏡夜に^{レベ}ルモーション伝授した詠唱の一つ。この詠唱は千堂裏魅の動作超越とは比較すべきではない。

千堂裏魅レベルモーションの動作超越が、人間個体の瞬間的な移動ならば、千堂鏡夜の『SPEED UP』は次元に干渉する移動とされている。

その移動速度は、もはや音速を超越し、『光速』の領域まで達していた。

そして、その本質が解放されたのは、レイ・ストライトが施した言語抑制術が解除された今であった。

一年前、裁我との戦闘では解放されなかった本質が、今まさに体現されていた。

「くッ！」

セラは初めて危惧を覚え、眼前にいる鏡夜の右脚目掛けて、左の掌から負邪を放った。

しかし、鏡夜はその場で低く跳躍、中空で前回転の勢いをつけ、セラの頭蓋骨に踵落としを食らわせた。

「が——！？」

さらに、食らわせた右足を自分から弾き、鮮やかに中空を舞う。着地した瞬間には詠唱を口にし、さらなる追撃を仕掛ける。

「な——舐めるなあッ！」

セラは防御として鬼人を十体召喚させる。そのどれもが上位個体として成立した鬼人だ。

大鎌、槍、刀。一瞬にして両腕を様々な凶器へと変態させた鬼人は、

解放、という鏡夜の言葉で一斉に爆散した。

そして続け様に詠唱を口にし、強く握った『穿理』で、セラ・ロイデスの胸部を穿った。

「たわけが！ 胸部は思念に変換を行っている！ そのような攻撃が——」

と、言葉が続ける前に、セラは一つの違和感に気づいた。

——なんだ、これは？

それだけしか思うことができない。

何かがセラ・ロイデスという存在を壊していく。

何かがセラ・ロイデスという存在に侵食していく。

それは、五百年という歳月を生きてきた彼にとって初めての未知であり、魔術師として体感する初めての恐怖。

「封殺^{ふうさつ}」

鏡夜はポツリと口にした。

「この世界に存在する全ての概念は因果関係によって生まれる。『存在の因』、『消滅の果』の二つを内包する生命の根源的な部位は様々だ。だが、俺の心界——『封殺』は、その箇所を視ることができる。そこに『全ての理を穿つ』ことが可能な『穿理』を接触させることで、存在の因と消滅の果を『封』じ『殺』すことができる」

セラ・ロイデスは憎々しげに鏡夜を睨みつけ、呼吸を乱しながら言った。

「……『殺害』は仮初めの心界だったというわけか……。なるほど、実感した……。貴様は確かに、この世界において不必要な人間に他ならない……」

「——」

「……いずれ、貴様は封殺という心界を認識したことを後悔するだろう。……いや、貴様は生まれてきた時点で、この世界に支障を生じさせているのだからな」

「——遺言はそれだけか」

鏡夜の声は冷たかった。

「——最後に。禁忌を認識した貴様に忠告しておこう」

ひゅーひゅー、と息を切らせながら、セラ・ロイデスは死の直前に、こう言い残した。

——貴様の矛盾は、世界を壊すであろう——

それが王鬼——セラ・ロイデスの最後の言葉だった。

エピソード

四月四日。午前十一時半。

鏡夜は自分が一年間眠っていた病室を後にしようとしていた。

早朝、この病室に入ってきた看護師は、鏡夜が目を覚ましたことに驚愕し、すぐさま担当の主治医の下に駆けつけ、涙目で報告を行ったそうだ。最初、主治医はその報告をタチの悪い冗談だと考えていたのだが、看護師に病室へと連れて行かれ、ベッドに座ったまま窓の外を呆と眺めている鏡夜を見た瞬間、歓喜の表情を見せていた。それほど、鏡夜は目覚めるわけがないと思われていたらしい。

それは置いておき、いつまでも病室で寝泊りしているわけにはいかない。意識が回復したのだから、病室は他の患者に譲るべきだろう。そんな考えに至った鏡夜は、早々に退院することにした。

退院手続きはすでに済ませているので、あとはこの病院を去るだけだった。

そして、外に出て正門の前まで歩くと、二人の少女が自分を待っていた。

「おはようッス。鏡夜くん」

「おはよう、鏡夜」

千雨と裏魅だ。

「おはよう。千雨、三日前は世話になった」

鏡夜は礼と同時に頭を下げる。

「いいッスよ、そんなこと。それより、裏魅さんと話をしてあげるべきじゃないッスか？ 久々の兄妹の再会なんスから」

「——そうだな」

鏡夜は顔を上げて、裏魅と向き合う。

「——改めて、久しぶりだな、裏魅。大きくなった」

「十二年も経ったんだから、当然だろ」

頬を赤くしながら、そっぽを向く裏魅。

「それで、全部思い出したんだよね？」

裏魅の問いは、施設に入る前——五歳以前の記憶のことを指しているのだろう。

「ああ」

「じゃあ、千堂家に戻るつもりは？」

「それはない」

鏡夜ははつきりと自分の意思を述べた。

「俺の住む場所はこの堂崎市だ。この町で、俺の全てが始まったんだからな」

——そう。ここで彼女と出会い、決別し、最後に解り合えた。その日々を忘却したくはない。

彼女と過ごした日々を、無にするわけにはいかないから。

「——そうか」

裏魅は目を閉じて微笑を浮かべた。

「なら、早く会いに行つてやれ。私と千雨はもう帰るけど、何かあったらこの番号に電話してくれ」

そう言つて、裏魅は携帯電話の番号が書かれた紙切れを鏡夜に手渡した。

「じゃあ、私も渡しておくッスね」

千雨も同様に、番号が綴られた紙を渡す。

「鏡夜くん。一つだけ言っておきたいことがあるんスけど」
「なんだ？」

鏡夜は首を傾げながら返した。

千雨は、どこか恥ずかしげに笑つて、

「私と裏魅さんと過ごした幼少期を、忘れないでください」
それは、心からの願いだった。

五歳の頃を境に、異なる人生を歩み始めた幼馴染と妹。

その過程に、どのような日々を過ごしてきたのか鏡夜は知らない。でも、あの楽しかった日々を思い出せたから。

「当たり前だ。絶対に忘れない」

そう答えるのは当然だった。

「ところで、千雨」

「なんスか？」

「お前、その口調は何なんだ？」

「……」

「そういえば、私も前にはぐらかされたな。答えろ、千雨」

「え、えーと、それは神のみぞ知るってやつスよ！」

結局、千雨は遊び半分出来心で使い始めた口調だと言えなかった。

鏡夜は自宅に帰る前に、ある場所に立ち寄ることにした。

そう。自分が変わるきっかけとなった場所。

自分が壊れ始める原因となった場所。

自分が矛盾思考に感染する原因となった場所。

一年前なら憎悪を抱く場所であったのに、辿る足取りが軽く思えた。

程なくして、その場所に到着した。

——黒堂学園。

入学式前であったことが幸いしたのか、校内には誰もいなかった。

そして、あの教室に近づくに連れて、心臓が早鐘を打ち始めた。

別れ際、千雨は言っていた。

「再会はある場所がいつて、本人からの希望なんスよ」

（……全く、決別した場所で再会するなんてな）

でも、それも自分達らしいだろう。

そして、鏡夜はその教室に辿り着く。

——二年A組。

ゆつくりと扉を開けると、そこには机の上に座って、窓の外を眺めている少女がいた。

久しぶりだな、と鏡夜は声を掛けた。

少女は机から降りて、うん、久しぶりだねと返答した。

鏡夜はジューパンのポケットから一通の手紙を取り出し、少女に見せた。

……これは、千雨が儀式に訪れる以前に病室に置かれてあったものだ。

『四月四日。黒堂学園の二年A組で待ってます』

それにしても相変わらず小さいな、と鏡夜は苦笑した。

これでも少しは伸びたんだよ！と少女は頬を膨らませて怒った。再会は、両者とも自然に振舞えた。

鏡夜が目覚めたこととか、少女がどれだけ辛い思いをしてきたことは、両者の会話には無かった。

そんな些細なことはどうでもいい。二人は本心からそう思っていた。

ただ、今は。今だけは。

こうして二人だけであることを、大切にしていたかった。

だから、二人の間に悲しみや哀しみはない。

二人だけの時間が、ただ幸せだったから――。

エピローグ（後書き）

まず初めに。

第二章のエピローグまで付き合ってください、誠にありがとうございます。

これにて第二章は終わりとなります。

第三章に関しては、ただいま構想を練っている途中なので、掲載には少し時間が掛かるかと思われます。

それでも、処女作であるこの作品は最後まで書き上げたいと考えています。

第二章のエピローグまで書き上げられたのも、読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

それでは、第三章でお会いしましょう。

織宮征でした。

闘技場にて

イギリスのロンドン。星礼会本部、地下五十階の闘技場にその少年はいた。

右手に握っている漆黒の柄から、十五メートルにも及ぶ長い銀の鎖が伸びている。その先端は凶器として造形された鋭利な刃。先ほどまで地面に着いていたその鎖が、不規則な動きを現し始め、空中に浮く。

「――」

少年は無表情のまま、体内魔力粒子を精神硬質^{イナ ハードメンタル}によって増幅させていく。銀の鎖は、少年の体を包み込むように螺旋を描いていく。まるで大蛇のそれだ。少年を守護する壁と化し、その動きが止まった瞬間、

銃声が響き渡った。

マシンガンや機関銃による連続射撃。闘技場の外壁に設置されてある自動式の銃^{オートタイプ}が、八方から少年に向けて弾丸を発射した。

しかし、少年の表情に変化は無い。その貌はただ無機質で、迫り来る幾多の弾丸など気に掛けていなかった。

「動」

少年は一言呟いた。

それだけで、およそ百にも及ぶ弾丸が銀の鎖によって弾かれ、地面に穴を穿つ結果となった。

「次」

少年はそう指示を出す。今度は体を覆っていた鎖を解放し、天を突くように一直線に伸ばす。

それはまさしく剣そのものだった。体内魔力粒子^{イナ}によって高質化され、絶対的な強度を保った長剣。

再度銃声が鳴り響く。先刻と同様に八方からの一斉射撃だ。

少年は銀の長剣を軽い動作で斜め下に構える。剣術という居合いの構えだ。

そのまま、刹那にも満たない疾さで振り抜く。舞を舞うように一回転した頃には、全ての弾丸が真つ二つに切り落とされ、地面に落下した。

「ふう……」

少年は一つ吐息を漏らし「休憩！」と頭上に向けて言い放った。それだけで銃声は放たれることはなくなり、自動式オートタイプの銃は外壁の内部に戻っていった。

闘技場の隅に腰を下ろし、少年は乾いた喉を潤すためにスポーツドリンクを飲んだ。ごく、ごく、と大きく喉を鳴らしながら、栄養補給を行う。

「簡単だねえ、弾丸の軌道を読むっていうのも」

どことなく落胆したように眉を落とす、少年は呟く。先ほどの訓練での技は、決して常人に成せることではないのだが、少年にしてみれば楽すぎる訓練という認識でしかなかった。

こんな訓練をするより、実戦に赴いて殺しを行う方がはるかに実力は上がる。日本で購入した携帯ゲームでも、戦闘の方が経験値が高くなるという設定だった（現実とゲームをごちゃ混ぜにしているが）。

「とは言っても、鬼人なんか殺しても実力が上がるわけでもないしなあ……」

気分が乗らないとは、このことを言うのだろう。少年は今、確かに憂鬱だった。

この一年間で鬼人を二百五十三体も殺したというのに、少年は全く満足しきれていなかった。

——もっと強くなりたい。もっと強者に。

——もっと殺したい。殺して殺して、殺し尽くしたい。

それが少年の心からの願望だった。元々、少年は殺す為だけに生ま

れてきた存在だ。故に、殺しを行うのは彼の存在意義であり、存在理由でもある。

（……まだ認識できないしなあ）

少年の最高到達地点。それは心界の認識だ。

自分にはどんな心界が眠っているのだろうか。早くそれを認識して、自己が存在している理由を証明したい。

心界を認識するというのは、魔術師の領域に踏み込むことと同一だ。精神、肉体、思考の三つが飛躍的な活性化を遂げ、常人では決して手に入らない最高の力が宿ることとなる。

（……でも、彼より先に認識するのもなあ……）

自分が目指していた存在。

自分が憎んでいた存在。

自分が殺しかつた存在。

封殺者の最上位の階級、コードナンバー01の座に君臨していた圧倒的な強者。その者は、今は昏睡状態という有様だ。

少年も、この一年間でコードナンバー06から04に階級チェンジしたとはいえ、目指していた存在が昏睡状態ならば、その昇格は何の意味も成さない。

少年は、彼と一緒に戦い、彼と一緒に上を目指し、彼と殺しあうことに人生の価値を見出していたのだ。

「もう、全部力ケルのせいだあ！」

ブンブンと両腕を振り回す。先ほどのクールっぷりはどこへやら、スーパードお菓子をせがむ子供のような姿だった。

と、鬱憤を晴らすように両腕を振り回している少年の前に、一人の男性が現れた。

その男性は足音もなく、いつの間にか少年の前に立っていた。

「……いつも思っただけど、気配くらい見せようよ」

少年はジトツとした目で男性を見上げた。

「そうは言ってもね。気づかない君に非があると思うよ」

身長百七十センチほどの細身の男性は爽やかな笑顔を浮かべる。

二十代前半ほどの顔立ちに、黒いスーツを身に纏っている。どこにでもいる会社勤めのサラリーマンを想像させるが、この男性は少年の観察者だ。

「訓練はどうだい？」

男性が尋ねると、少年は「楽すぎてつまんない」とふてくされたように唇を尖らせた。

「実戦で経験値積みたいよ。レベルアップしたい気分だね。ラスボスと戦って勝つ感じ」

「……君は、日本のゲームと現実をごちゃ混ぜにしている節があるね」

呆れたようにため息を漏らす男性。

「まあ、そんな風だと思っていたからこそ、任務を授けに来たわけなんだよ、僕は」

「え、ホント!？」

男性の言葉と同時に、少年はキラキラと顔を輝かせた。

「うん。でも、これは星礼会最高幹部——『フォースリフト四殺解』からの任務だから、失敗は絶対に許されないよ」

そして一拍後、少年の笑みが無表情に戻った。

『フォースリフト四殺解』——星礼会における最高幹部四人で構成された絶対者だ。一年前にその一人と偶然出会ったが、他の三人と面識はない。

しかし、あの殺人狂と言われている四人から、他でもない自分に任務が回ってきた。

これは好機だ。星礼会に自分という存在を認めさせるチャンス。

(——ゼロクラス零階級とはいえ、フォースリフト四殺解が封殺者に任務を回してきた理由も気に掛けておかないといけないな)

そう思案し、考慮の内に入れた少年は「それで——」と、男性を見上げた。

「任務の場所は？」

尋ねる少年に、男性は笑みを崩さずに、

「日本だよ」

そう言った。

「君にとつては苦痛を伴う場所かもしれない。でも、君が喜ぶ情報も入手しているから、あとで地上に上がっておいで」

そう言い残して、男性は悠然とした足取りで少年の前から立ち去った。

一人残された少年は、早鐘を打ち始める心臓の鼓動を抑制できず、ただ歡喜に口元を吊り上げた。

「日本、か——」

そして、自分が喜ぶ情報——それは、彼に関係している話の他にありえない。それくらいの心理は、観察者の男性は見抜いている筈だから。

「よし、行こうか」

少年——カイン・エレイスは立ち上がる。

再び赴く場所。

それは、日本の関東地方——堂崎市。

間もなく、その殺し合いは幕を上げることとなる。

それは、悲劇とも喜劇とも取れない物語。

千堂鏡夜とカイン・エレイスの物語である。

前触れ

五月十四日。今日は大学の授業が休みだった。

まだ大学という環境には慣れていないが、遠近湊は確かにスクー
ルライフを楽しんでいた。新しい友人も何人かでき、高校二年から
卒業するまでの一年間の時のように、充実した毎日を送っていた。

昨日にはレポートの提出も完了し、今日は時間が空いたため一人
の友人と一緒に大通りに来ていた。

隣を歩く男性の名前は千堂鏡夜。つい一ヶ月ほど前に一年間の昏
睡状態から回復した少年だ。歳は湊と同じ十八歳。通っていた高校
も同じ黒堂学園だ。

彼は湊とは違い、今でも高校に通っている。出席日数と取得単位
が足りなくなり留年したからだ。

鏡夜は、五百人はいる全校生徒の中でも異質と呼べる存在だった。
彼は誰とも接することはせず、一年生の頃から自分の周囲に壁を
張り、他の生徒を否定していた。それが意図的なものであるのが性
質が悪く、誰かに話しかけられても無視を決め込むという行いをし
ていた。唯一口を開くのは授業で教師に指名され、教科書の音読を
する時くらいであった。

授業以外の時間では一人で小説を読み、窓から空を眺めるといっ
た行動しかなかった。

それは、普通の高校生にしては確かに異質であり、稀に見る希少
種とも言える。

否。事実、彼は普通の高校生ではなかった。

その実、彼は人間の負の感情が生み出す思念体、鬼人を殺す為だ
けに生きる封殺者という存在だった。

その在り方は異常と言っても過言ではない。鬼人を殺すことが彼
の存在している理由であり、同時にそれが生きている価値だったの
だ。

そして、鏡夜の在り方を変えるきっかけとなったのは遠近湊という少女に起因していた。

その出会いのせいで、鏡夜は確立していた自己の在り方を狂わされ、一度の決別へと至ってしまった。

しかし、鏡夜が昏睡状態に陥る前に解り合うことができた。それは互いに望んだ結果であり、互いにとって本心からの願望でもあった。

そして、解り合えた結果、皮肉にも鏡夜は一年間の眠りに堕ちた。そのように、彼らには多くの出来事が齎され、現在ではこうして歩幅を合わせて共に歩くことに成功していた。

「鏡夜くん。最初はどこに行く？」

湊は鏡夜の顔を見上げて、そう尋ねる。元々鏡夜の方が頭一つ分身長が高いためか、彼に話しかけるときは決まって頭を上げることになっていた。

鏡夜はただ前を向きながら、昔と全く変わっていない無表情で湊の問いに答えた。

「どこでもいいぞ。湊が行きたい所に行けばいい」

抑揚のない、淡々とした口調で彼は言う。その無愛想な性格も高校時代から改善されていない。しかし、湊はそんな彼の無表情を眺めるのが好きだった。

「でも、今日は鏡夜くんの好きな物を買うために来たんだから、鏡夜くんが行きたい所に行こう」

今日の目的は、鏡夜の趣味を模索することの他にない。一ヶ月前に目を覚ました後、湊は彼の部屋に訪れたことがあったのだが、彼女は愕然とし、驚愕した。

部屋は殺風景としか言い様がなかったからだ。

必要最低限の生活用品は揃っているのだが、趣味で集めている物が殆ど無く、冷蔵庫の中を拝見しても栄養ドリンクと食パンだけという始末。

曰く、彼は一日の食事は全て食パンだけで過ごしていたそうだ。

まあ、バターやマーガリンなどを塗って味を変えていたらしいが、大した差はない。

唯一、部屋の隅には少しの書物が詰まれているだけであり、よく思い出すと高校時代に学園で読んでいた本と同じ物だった。

ともあれ、趣味は置いておくとして、食生活を疎かにしているのは疑いようなない事実だった。そんな経緯があり、今では湊が週に三回、夕食を作り部屋に訪れている。

余談だが、鏡夜は一年前まで封殺者を育成する機関である施設から生活費や家賃を払ってもらっていたのだが、一ヶ月前にマンションに帰宅すると、大家が保護者——偽名を使った施設の研究員だが——から一千万円ほどの大金を預かっていたらしい。彼らの意図はまだ掴めないが、貰える物は貰っておくという考えに至り、鏡夜はその大金を受け取った。

そんなこんなで、その大金の少しを財布に入れて、こうして趣味を模索するために大通りに来ていた。

「鏡夜くん、高校の時、結構な頻度で小説読んでたよね？」

突然の質問に、鏡夜は過去を振り返ってみた。確かに、授業以外の時間は本ばかり読んでいた気がする。

「そうだな。それがどうかしたのか？」

「じゃあ、まずは本屋に行ってみよう。好みの小説が見つかるかもしれないし」

手を合わせてそんな提案を出す湊。

鏡夜も、反対する理由が無かったため、同意するようにゆっくりと頷いた。

二人は大通りを進み、つい最近開店したばかりの新しい本屋に立ち寄った。内部はジャンル別に漫画や小説、エッセイ、専門的な参考書、その他にもそれなりに多くの書物が棚に並べられていた。

「鏡夜くん、普段はどんなジャンルの小説を読むの？」

小説コーナーで足を止め、湊が尋ねると「特に決まったジャンル

はない」と鏡夜は返答した。

「本を買うのも稀だけど、冒頭で興味を惹く文章や世界観を表現していると感じた場合、購入することになっている。まあ、面白くなくても一応最後まで読むが、二度読むことはないな」

「そうなんだ。私も小説は読むけど、ジャンルは決まってる感じがな」

「どんなジャンルだ？」

棚から色々な文庫本を手に取り、パラパラと頁を捲りながら尋ねる。

「基本的には恋愛小説かな。ファンタジックな世界観に恋愛を織り交ぜたのが好きなの」

と、そう聞いた途端、頁を捲る手の動きが止まった。

「どうしたの、鏡夜くん？」

怪訝に思ったのか、湊は小首を傾げた。

「——湊。それ、面白いのか？」

「うん。個人的には」

「……」

「もしかして、興味あるの？」

「……」

首を下ろして黙りこむ鏡夜。

その様子を見て、自分の言葉が当たっていたと確信した湊は、にっこりと笑って、

「よし。じゃあ、選んであげるね！」

向かいのティーンズ向け小説の棚にある恋愛小説を模索し始めた。

「五百九十円になります」

結局、鏡夜は湊に薦められた恋愛小説を購入することにした。

鏡夜から金銭を受け取った女性の店員——外見からして二十代前半——は、レジから小銭を取り出し、レシートと一緒に鏡夜に渡すと、

「今日は兄妹でお買い物ですか？」

と、営業スマイルを浮かべながらそう尋ねた。

「兄妹じゃありませんよ」と湊は笑いながら手を横に振って、

「ああ」と鏡夜も同意するように無表情で頷く。

「では、恋人同士ですか？」

「え、ええ!？」

「いえ、違います」

今度は全く違う反応を起こした。

(はつきり言われると、ちょっとグサツとくるかも……)

湊はしゅん、と眉を落とした。

しかし、鏡夜の言葉には続きがあり、

「湊は大切な友人です」

と、はつきりとした口調で言った。

「鏡夜くん——」

「行くぞ、湊」

釣銭を財布に仕舞った鏡夜は、我先にと歩き出し、

「う、うん!」

湊も弾み脚で、その後を追った。

大通りの中枢には大規模なスクランブル交差点がある。平日休日問わず、多くの人々が行き交う場所だ。この近辺はアウトレットモール街や繁華街もあり、幾多の若者達で繁盛している。交差点の前にある三十階を有に越えるビルの外壁には街頭ニュースを報道する大型モニターが設置されており、今この時間帯でも様々なニュース速報が流れていた。

そして、交差点の信号を渡ろうとして、鏡夜は不意に足を止めた。
「どうしたの、鏡夜くん？」

一歩前にいる湊は振り返ると、鏡夜は街頭ニュースが流れている

大型モニターを見上げていた。

それに習って、湊もモニターに目を移した。

『昨日の深夜二時頃、西区の住宅街で殺人事件があった模様です。被害者は腹部辺りを刃物と思われる物で刺され、病院に搬送されましたが、今日早朝七時に死亡が確認され——』

ニユースキャスターの女性は淡々とした口調で事件の概要を説明していく。

「殺人事件……」

これだけの概要ならば、鏡夜が険しい顔付きでニユースに集中する理由はない。ならば、なにが彼をニユース速報に釘付けにしているのか——

（まさか——）

湊は思い至り、鏡夜に尋ねた。

「もしかして、鬼人が現れたの？」

「いや、昨日は負邪を感知しなかった。あの時間帯は寝ていたが、負邪が気配を現し始めると体内魔力粒子の反発機能が働いて、瞬時に目を覚ますはずだ」

魔力の反発機能。それは一ヶ月前に鏡夜の妹、裏魅から教わったことだ。

二人は信号が赤に変わる前に足早に交差点を歩く。

「でも、裏魅さんは魔力同士の反発機能って言ってたよ？ 負邪って……えっと、鬼人を形作っている物質だよね？ 魔力じゃないのに反発機能は働くの？」

「封殺者は、魔力の反発機能以前に負邪の反発機能を働かせる訓練を積む。魔力同士の反発機能を学ぶのは二の次だ。鬼人を殺すことが存在理由なんだから当然だがな」

「……鏡夜くん、その、今でも鬼人が現れると——」

言い淀む湊に、鏡夜は「安心しろ」と先に返答した。

「鬼人が現れても、俺は殺しに向かっていない。確かに、この一ヶ月の間に二、三度は負邪の気配があったが、他の誰かが殺している

みたいだ」

「——そっか」

そう聞いて、湊は安堵するように胸を撫で下ろした。

「俺が殺すと思ってたのか？」

視線も向けずに、鏡夜は言う。

「俺はもう殺さない。一年前、お前とそう約束したからな」

「——うん。そうだね」

その言葉が、凄く嬉しかった。

必然の再会

午後七時十分。今日の趣味模索を終えた鏡夜は、自宅に戻りベッドで疲れを取っていた。

元より、鏡夜は退院して一ヶ月しか経っていない。昏睡状態の時は、筋肉が衰えないために担当の看護師がリハビリケーションをしてくれていたのだが、それでも一年間という月日において、鏡夜の体は確実に鈍っていた。

しかし、それがどうしたというのだろう。

もう殺しを行う必要はない。自分は封殺者であることを止めたのだ。きつと、一年間の昏睡状態で星礼会や施設も、自分は用無しと判断されてるはずだ。

これからは日常に生きることができる。それは願ってもやまない、心からの願いだったはずだ。

（だけど……）

そう。新しい心界を内包したことによって、それが視えてしまう。今日、町に出かけた時もそうだった。

封殺という心界によって、全ての人間の『存在の因』と『消滅の果』が視えてしまう。

だから、今日も湊を直視することをできるだけ避けたのだ。

——存在の因。

——消滅の果。

この二つは、その存在によって内包されてある箇所は様々だ。しかし、この二つは二箇所ある訳ではなく、二種が混合して一つの箇所定められている。

一ヶ月前に消滅させた第六位の王鬼、セラ・ロイデスの箇所は心臓であった。

存在の因、そして消滅の果は、『存在因果』として成り立っている。

物事が生まれるには必ず原因が在り、そしてその物事の消滅が訪れるのもまた理である。これを一般的には因果関係ことわりという。

そして、これを生命を宿した存在に例えると、『その生命が始まった原因（存在の因）』、そして『その人間が消滅する瞬間（消滅の果）』が、その人間の存在因果として成り立つ。

そして、この二種を観測することできる心界——それが千堂鏡夜の持つ『封殺』だ。

存在の因と消滅の果の両の概念を眼が捕捉し、眼球神経を通じて脳が理解する。しかし、それだけでは存在の因と消滅の果を視認できるだけの能力で終始する。

……鏡夜は、ジャケットの内ポケットからそのナイフを取り出した。

銘なは『穿理』。千堂家の家宝にして、存在の因と消滅の果を『封じ』『殺』すことができる凶器だ。

鏡夜は考える。

千雨が行った心界復活儀式。それによって得た封殺という心界。

そして、存在因果を消滅することができるナイフ——穿理。

いくらなんでも出来過ぎていた。自分の根源的な心界が封殺であるのは良いとして、穿理は千堂家という家系が始まった頃——初代当主が用いていた神器だと、幼少期に現当主である父親から聞いた。そして、鏡夜が封殺という知識を用いているのもまた同一。

千堂家の初代当主の心界が、封殺だったのだ。

ならば、血筋によって同じ心界を宿したのか？ そう鏡夜は推測するが、それは違うと即座に否定する。

千堂家という家系が始まったのは千年以上も前だ。それまで、封殺という心界を宿している家系の人間は存在しなかった。

それに、気に掛かっていることはまだ在る。

そう。自分が始めて認識した心界は『殺害』だった。

だというのに、なぜ、復活した心界が『殺害』ではなく『封殺』だったのか？

鏡夜の人生は殺しによって成立していた。心界とは人生経験によって生じる『在って無いモノ』だ。では、自分の人生経験の中で封殺することが存在理由に確立する過程があっただろうか？

答えは否だ。千堂鏡夜は殺す為だけに生きてきた人間であり、殺すことが存在理由だった。

「……今は考えるだけ無駄だな」

暴走しかけていた思考を止め、ゆっくりとため息を漏らす。

そうだ。自分はもう日常に生きる人間なのだ。こんなことを考えても、所詮は無価値な時間に終わる。

「湊、遅いな……」

今日は彼女が夕食を作りに来てくれる日だ。最初は迷惑をかけると思い遠慮したのだが、彼女の料理を食べているのが凄く幸せに思え、除々に彼女がこの家に訪れるのを待ち通しにしている自分がいた。

だけど、それも自分が変わった証なのだろう。

故に、鏡夜は日常に生きていると実感できる。非日常なんかに関わらず、学園で授業を受けて、湊と街に出かけて、こうして夕食を作りに来てくれるのを待つて。

それが幸せだった。一年前の自分では到底想像のできない、けれど憧れていた日常^{ユメ}。

——そして、この日常がずっと続くのだと。

ピンポン。

呼び鈴が鳴り、鏡夜はベッドから腰を上げた。

どことなく嬉しげな表情になるが、それは一瞬に過ぎなかった。その顔が、険しいものへと変貌する。

——鏡夜は知っている。この反発機能、この殺気……その在り方。「入れ」

そう、鏡夜はこの日常が続くのだと。

「やあ、久しぶりだね、キョウヤ！」

ドアノブが回り、その少年は姿を現した。

銀髪に蒼い瞳。子供ながらの幼さを残す身長と顔立ち。

しかし、その在り方を鏡夜は知っていた。

右手に大型のアタッシュケースを握った少年は、満面の笑みを浮かべながら部屋に入ってきた。

カイン・エレイス。

その少年が訪れたことで日常が狂い始めたと、鏡夜は完全に理解することとなった。

三者三様

千堂鏡夜とカイン・エレイスの再会は、これで何回目だっただろうか。

邂逅を果たし、幾度となく殺し合った正の殺意と負の殺意。

それは、彼らが対極の思考を持っている他にない。

一人は純粹に殺したい。

一人は完全に殺したい。

相反する嗜好性、行動性を用いた彼らは、この日の再会においても、互いに殺意を剥き出しにしていた。

しかし、それは一年前までとは多少違っていた。

部屋に上がり込み、大型のアタッシュケースを床に降ろしたカイン・エレイスは、鏡夜の顔を見て少なからず動揺したようだ。

それは、今まで感じてきた鏡夜の在り方が根本的に変化を遂げていると実感したが故。

しかし、それは自分の観察者から伝聞いたデータの内に入っていたものだ。だというのに彼が動揺を顕わにしたのは、それを現実だと識ってしまったから。

——まさか、本当にこんな風になっているとは思っていなかったな。

胸中で抱いた感想を表には出さず、カインはにつこりと笑った。

「本当に久しぶりだね、キョウヤ。一ヶ月前はお疲れ様」

「その口ぶりだと、星礼会にはすでに伝わっていたようだな」

「当然だよ。王鬼の顕現なんて五十年に一度あるかないかだ。星礼会本部では、第六位、セラ・ロイデスが封殺されたって情報^{データ}で持ち切り状態。そして、それを成し遂げたのが、あらゆる意味において殺せなくなってしまった存在だってこともね」

カインは床に腰を下ろし、片膝を立てて背中を壁に預けた。

その笑みは、ただ歪だ。まるで今にも襲い掛かるかのような獰猛

で凶悪な笑み。

鏡夜は右手に握っているナイフの刃を取り出す。

「——へえ。それが千堂家の家宝、穿理か。確かに強大な力を感じるよ。でも、殺すつもりはないんでしょ？」

「——」

的を射た問いに、鏡夜は交錯する視線を逸らさずに無言でいた。

「全部分かってるって。チサメちゃんの儀式によって言語抑制術、記憶操作術の解除に成功したこと。そして、新たな心界の内臓に成功したこと。——ひとつ聞きたいんだけど、ボクの存在の因と消滅の果はどこにあるのかな？」

「話す必要はない」

ナイフの刃を仕舞い、ベッドの上に置く。すでにカインの存在の因と消滅の果を捕捉したが、そんなことはどうでも良いことで、彼に話さないといけない理由もない。

「星礼会は、俺をどうするつもりだ？」

鏡夜は端的に尋ねた。その短い言葉の内に様々な意味を含めて。

カインは人差し指を唇に当て、うーんと思案する。その仕草がポーズだと理解しているからこそ、多少の奇立ちを覚える。

「じゃあ逆に問うけど、キョウヤはどうしたいの？」

「——なんだと？」

「もし、『キョウヤがまだ星礼会の所属として扱われている』と返答した場合、君の決心は鈍るの？ そんなに弱い人間だったっけ、君は？」

「——」

「一年前、君が想像心界を使ってカケルを再起不能にしたのは、それ相応の覚悟があったからでしょ？ カケルに星礼会の人形じゃないって言ったんでしょ？ 馬鹿にしないでもらいたいな。君はそんなに弱い人間じゃないとボクは思ってる。ボクが星礼会に戻れって言って逡巡する君の姿なんて見たくないよ」

ふう、と深くため息を吐き、カインは続けた。

「安心しなよ。君はもう星礼会の籍から外れてる。コードナンバー01でもない。日常に生きて良いつて判断されたみたいだよ」

カインはどこか悲しそうに眉を寄せながら、鏡夜の処置を話した。「……まあ、この一ヶ月の間に鬼人が三体顕現したのに、殺しにも向かわなかった時点で、この処置は正解だったかもね」

その言葉で、最近になって鏡夜が抱いていた疑問は解決した。

「お前が殺したのか」

「まあね。ボクは一ヶ月前から日本に来てた。堂崎市に着いたのもそれくらいの時期かな」

「なら、昨日の事件も知ってるか？」

「——昨日？」

きょとんと目を瞬かせて、小首を傾げるカイン。……自分も今日知ったばかりで棚に上げるが、この町に来ている封殺者なら認知しておけと鏡夜は思った。

「昨夜、西区の住宅街で殺人事件があったらしい。腹部を刃物のような物で刺されたってニュースでは報道していたな」

端的に事件の概要を説明すると、カインはゆっくりと目を細めた。

「鬼人じゃないよね、それ？」

「当たり前だ。昨夜は負邪の反発機能を覚えなかった。仮に鬼人だったとしたら、お前も気づいている筈だろ」

「——そっか。そうだよな」

曖昧な返事を投げるカイン。

その、一年前までとは何か違う様子を見て、鏡夜はある疑問を尋ねた。

「ひとつ聞きたいことがある」

「うん。なに？」

「カイン。お前、この町に何をしに来たんだ？」

それが、再会を果たした時からずっと思っていた疑問の本質だ。

カイン・エレイスが堂崎市に赴く要因となった理由。

自分に「君は封殺者ではなくなった」と伝えにきただけなら、力

インの凶器——『チェイン』が入っているアタッシュケースを持ってくる理由はない。いや、それ以前に、伝聞など施設の研究員が報せれば良いだけだ。

なら、カインは何が目的でこの町に来たのか。

その問いに、カインは少し首を下ろし、どこかガランドウな表情をして、

「君を護りに来たんだよ」

そんな、理解不能な言葉を言い放った。

遠近湊は、買い物袋を両手に鏡夜の家を目指していた。

（食材選びで時間掛かつちゃったな……）

予定の時間より少し遅くなってしまったことに罪悪感を覚えながらも、足早に住宅街の道を辿る。

夜の住宅街は人影が少なかった。時刻は八時に指しかかろうとしている。今日は雲行きが怪しく、夜空には黒雲が広がっていた。

その分、路に設置されてある街灯がいつも以上の光を放っているように思える。等間隔に設置された街灯だけを光の頼りとして、駆け足で道を進んでいく。

（ち、ちよつと疲れたかも……）

両手に買い物袋を握っているためか、体が重い。

元より、遠近湊は体力がある方ではない。一年前に負った傷は治療によって完治しているが、あの傷を負う以前よりも体力が落ちているのは紛れもない事実だ。

こういつ時こそ、携帯電話の出番と言えるのだが、あいにく鏡夜は携帯電話を持っていない。自宅にさえ電話機がないので、約束事を決めるのは実際に会ってからの時だけなのだ。

「まあ、今更考えても意味ないか……」

肩を大きく上下させて、「よし!」と気合いを入れなおした湊は、再び足を動かそうとした。

その、時だった。

「あれ……?」

前方から一人の少年が歩いてきていた。

その少年はどこかで見たことがある。銀色の髪、透き通った蒼い瞳。自分と同じくらいの身長。

その少年は、何の感情も抱かせないランドウな無表情のまま、湊の隣を通りすぎた。

でも、湊は知っていた。

そして、思い出した。

「ま、待つて!」

突拍子もなく、湊は少年を呼び止める。

少年は首を振り向かせた。

——蒼い瞳が、湊の瞳と交錯する。

少年は怪訝に眉を顰め、

「誰だい、君?」

「え——?」

と、そう尋ねた。

「人違いじゃないかな? 僕は君と面識がないはずだけど」

素朴な疑問のように言って、少年は湊の前から去って行った。

「え……あれ?」

そんなはずはない。

自分があの少年のことを、あの少年の顔を忘れるわけがない。

(だって、私は——)

あの少年のおかげで、この一年間を生きたのだから。

ポツポツ、と。

雨が降り始めた。

それが、開戦前に見る最後の雨滴。

――雨が降り始めたか。

――雨、降ってきたのか。

――雨、降ってきちゃった。

しかし、それが最後に見る雨になるとは、誰も思っていなかった。

心界の章 / 4

少年は言った。

「君は、どうして殺すの？」

彼は言った。

「それしかできないからだ」

少年は言った。

「それを、君は望んでいるの？」

彼は言った。

「分らない。だが、俺にはそれできない」

次の瞬間、二人は殺し合った。

彼を、憎んでいた。

彼を、妬んでいた。

彼に、嫉妬していた。

彼が、羨ましかった。

彼を、殺したかった。

彼はどうして、そう在れるのだろうか？

彼は、何を望んでいるのだろうか？

彼に、夢はないのだろうか？

邂逅したとき、二人は互いに殺し合った。

共に戦っていた時でも、少年は彼を見ていた。

少年は、彼がスキだった。

だから、これは矛盾といえた。

憎んでいるのに、妬んでいるのに、嫉妬しているのに、殺したいのに——少年は、彼がスキだったのだ。

彼が零階級の領域に到達したと聞いて、少年は荒れ狂った。
自分を差し置いて、先に最高地点に到達した。

彼がスキだった感情は、即座に完全なる憎悪へと変貌した。
毎日殺した。

地獄を味わった。

一度に五十体の鬼人を殺したこともあった。
とにかく、殺した。

ただ、彼に追いつきたくて。
気が狂ったように、殺した。

そうして、少年は零階級に到達した。他者を蹴落として、他者を
殺して、少年はそう成ることができた。

久しぶりに、彼に会った。

しかし、彼は変わっていなかった。

少年は、彼に零階級に成った感想を尋ねた。

しかし、返答は「興味がない」の一言だった。

少年はキレて、場所が星礼会本部であるにも拘らず、彼と殺し合
った。

少年の人生は、彼に対する憎悪や憎しみだけで形作られていた。

……率直に言う。

少年は彼を殺したくて殺したくて仕方がないのに、彼の在り方に

憧れていたのだ。

認識加速粒子

湊が鏡夜の自宅に訪れたのは、午後八時前だった。

「ごめん、鏡夜くん。遅れちゃった！」

玄関に入るなりすぐに詫びを入れる。しかし鏡夜は「気にしないでいい」と一言返して、バスフロアから大きなタオルを持ち出して湊に渡した。

「ありがとう。すぐに夕食作るからね」

湊は雨滴で濡れたワンピースと顔を拭いて、すぐにキッチンに立った。

鏡夜はその様子を見て、

「少し休んでもいいんだぞ。別に強制してるわけじゃない」

「そういう訳にはいかないよ。私が言い始めたことなんだし」

苦笑しながら、湊はまな板を広げて包丁を取り出した。

スーパで購入した人参を切り分けながら、湊は鏡夜にあることを尋ねた。

「……鏡夜くん」

ワンルームの部屋の隅にあるベッドに座っている鏡夜は「なんだ？」と返答する。

「鏡夜くんの知り合いに、銀色の髪をした男の子っているかな？」

その言葉に、鏡夜は少なからず動揺を表した。しかしそれは外見的なものではなく、内面的なものとして。

「——なんでそんな事を聞くんだ？」

湊の方に首を向けると、彼女は顔を俯かせながら、ただ野菜を刻んでいた。

どこか悲哀を思わせる表情を垣間見せながら、湊は言った。

「私ね、一年前に病院でその男の子に会ったんだ。その時に預かった言葉があったから、私は一年間を生きられたの。でね、さっきここに来る前に、その男の子と偶然会ったんだけど、その子は私のこ

とを忘れちゃってみたいで……」

トントン、という包丁の音だけが部屋に響く。

鏡夜は暫し思案した。言うべきか言わないべきか、ではない。

自分が非日常の話をすべきか否か、で迷っていたのだ。

彼は——たった数十分前のことを想起した。

「君を護りに来たんだよ」

その言葉を受け入れるのに、鏡夜はおよそ五分もの間、言葉を失っていた。

ありえない。最初に浮かんだ感想がそれだった。

何故なら、この少年は自分を殺したくて殺してくて仕方がなかったはずだ。自分を殺すことを人生の生き甲斐にしていた少年だったはずだ。

それなのに、何故そのような言葉を口にしたのか。

「カイン。本質を話せ」

鏡夜は細かい事は抜きにして、そのような言葉を発しなければならなくなった経緯を尋ねた。

少年——カイン・エレイスは口元に微かな笑みを浮かべて話し始めた。

「この堂崎市に、王鬼が降りてきたんだよ」

「——なに？」

最初、鏡夜はカインの言葉を理解できなかった。それは、彼の中で様々な矛盾が飛び交ったが故。

王鬼が顕現を果たすのは五十年に一度あるかないかと言われている。伝承などではなく、彼らはそれ程の年月において地上には降りてこないのだ。

『鬼人の王』——下界ではそう呼称されている彼らは、『てんかい天界』に身を隠していると推測されている。

下界は人間界——つまり地球という地上だ。対して、天界とは空想上の世界ではない。

天界とは、地上と宇宙の境界線に存在する『異なる世界』だ。遙か古代、地球という星が始まり、天界という地が人間によって観測されたのはつい最近でもある。

「君も記憶を取り戻したなら知つてると思うけど、天界から王鬼が降りてくるのはおよそ五十年に一度。それが星礼会が観測してきた記録だ。つい最近なら、第六位のセラ・ロイデスだね。彼は君の内に在るモノを略奪しに下界に降りた。それは君が誰よりも知っている筈だ」

カインは淡々とした口調で言葉を紡いでいく。

「なら、なぜ五十年に一度と観測されてきたのに、こつも誤差が発生したのか。簡単なことだよ。今回現れた王鬼も、君のモノを略奪しに降りてきたと推測されているからだ。——君も難儀だね。ボクはつい最近、君が生まれてきた訳を知ったけど、君は記憶を取り戻したから、それを自分自身が認知している」

「……『認識加速粒子』、か。確かに、王鬼からすれば俺の体内にある粒子は極上の代物であることに変わりはないな」

現在では日本退魔御三家の二位である千堂家——その現当主、宗家の父親から聞かされた話だ。

——お前は、世界を変えるために生まれてきたのだぞ——

当主曰く、彼の体内に有る認識加速粒子は、この世界に存在するあらゆる『魔術的、存在的概念』の認識速度を向上させる代物らしい。

しかしそれは認識加速粒子の付加装置に過ぎない。

その本質は、生命魔力粒子、体内魔力粒子、大気魔力粒子の三つの魔力、そしてもう一つの『あるモノ』を同時機能として果たした瞬間に起動するらしい。その起動によってどのような現象や事象が

発生するのはかいつまんでしか説明されていないが、起動に成功すると確実に『世界が変わる』と幼少期に聞かされた。

故に、五百年もの間、負邪の探求を行ってきた第六位の王鬼、セラ・ロイデスが鏡夜の認識加速粒子を欲していたのは、この認識加速粒子が負邪と何らかの関係性があるのだと鏡夜は推測していた。

「現時点で、君は生命魔力粒子^{オド}、体内魔力粒子^{イナ}、大気魔力粒子^{マナ}を扱える。まあ、一ヶ月前に君が魔術家系だって知ったから納得がいったんだけどね。さらには、君の元観察者であるレイ・ストライトがまだ成熟していなかった子供に詠唱を伝授したのも、きっと君の認識加速粒子を知ってたからじゃない？」

——レイ・ストライト。その可能性は確かに在り得ると鏡夜は推察する。

観察者は、封殺者候補の子供のデータを完全に把握している。それは施設の研究員しか知らない極秘中の極秘の記録である。しかし、観察者の部類に属するのは星礼会の魔術師のみだ。その立場は彼らの方が上である。故に、子供のデータは観察者に渡らなければおかしい。

おそらく、レイ・ストライトは鏡夜が魔術家系に生まれた人間であり、認識加速粒子の持ち主であると研究所のデータによって知った。その過程があったからこそ、魔術師でも修得の難関である『レイ・ストライトの詠唱』を伝授したのだろう。

「さらには、わずか十歳で心界を認識したのも同じだね。心界は人生経験によって開花するもの。それがたった十年で認識を得たのも、君が認識加速粒子を用いていたから。……まったく、羨ましいにも程があるよ」

カインはこの部屋に訪れてから何度目か判らない、深いため息をついた。

「話を戻すけど、王鬼が下界に降りたのは星礼会本部ですでに観測された事実だね。それで、ボクは四殺解^{フォースリフト}から『千堂鏡夜を護衛せよ』っていう指令を受けてこの町に赴いたってわけ」

「護衛はいつからだ？」

「明日からだね」

端的に返すカイン。

「で、多分君も驚くサプライズイベントを用意してるから、楽しみにしてて」

「？……サプライズイベントってなんだ？」

「それ明日になってからのお楽しみだよ」と、笑顔で返答して、カインは立ち上がった。

「さて、そろそろホテルに戻るよ。じゃあ、また明日」

そう言い残したカインは、アタッシュケースを握り、鏡夜の家を後にした。

「鏡夜くん？」

と、キッチンで眉を寄せていた湊の声で我に返る。

「どうしたの？ 呆としちゃって」

「……いや、なんでもない」

しかし、カインが湊に会っていたのは知らなかった。それもカインの言葉で彼女が一年間を生きられたという……。

「湊、そいつはお前に何て言っただ？」

尋ねると「え——」と、湊は顔を赤面させる。明らかに動揺した素振りで、

「そ、それは、ちょっと、言えない、かな……」

耳まで真っ赤にして「あはは」と笑いながら、調理を再開させた。
(……あいつ、なに吹き込んだんだ？)

鏡夜は怪訝に首を傾げながら、空腹を紛らわせる為に読書を始めることにした。

「さて——」

カインはオフィス街にあるホテルの一室にいた。千堂鏡夜の護衛は明日から。少しは驚いてくれれば良いなと高揚している反面、胸中では内向的な心境で溢れ返っていた。

「……ボクに、できるかな」

ベッドに横たわりながら、自分自身に問う。

殺したくて殺したくて仕方がなかった存在の護衛。それ自体は許容できる。

しかし、このとき確かに。

カイン・エレイスは、王鬼という存在に畏怖の感情を覚えていた。封殺者^ゴときが、コードナンバーの最上位にも成れない存在が、王鬼を殺すことなど可能なのだろうか？

「でも——」

そうだ。鏡夜は王鬼を殺せたのだ。

彼が特別な存在なのは重々承知している。自分のように体内魔力^イ粒子しか扱えず、心界の認識さえできない下位者とは違うのは理解している。

それでも、自分もこの一年間で強くなっただと思えるから。

だから、日常に戻れた鏡夜を守らなければならない。

昔、自分が抱いていた夢を実現してくれた鏡夜を守らなければならない。

その為ならば。

「——殺してやるよ。エレイス」

銀髪の少年は、確かな決意を顕わにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1512s/>

封殺者-To prove this existence-

2011年10月4日03時35分発行